

東方神笛抄 ～秘封少女 がゼル伝入り～

タミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美術館の絵に消えた宇佐見蓮子。彼女がたどり着いた先は、魔王が世界を蝕み始めた世界。子供の姿で何故か転生してしまった彼女は、元の世界へ戻るため、神話の世界を奔走する！

どうも、タミです。伝説の超駄作、「秘封倶楽部と行く恐怖の旅」の続編、「東方神笛抄」、スタートです。やはり駄作ですが、前作よりかは力入れるつもりなので、よろしくお願います！投稿は、毎週水曜、土曜！よろしくお願います！

目次

蓮子子供編

- | | | |
|-------|-------------------------------|-----|
| 第1話 | 目覚めの朝、目覚める勇者 | 1 |
| 第2話 | デクの樹サマの中、決戦、ゴー マ! | 15 |
| 第3話 | ハイラルの姫、ゼルダ姫! | 25 |
| 第4話 | 死の山、デスマウンテンとゴ ロン族! | 43 |
| 第5話 | 熱いアニキと燃える洞窟?! | 52 |
| 第6話 | 熱戦! キングドドンゴ!! | |
| 第7話 | 暴れ馬、エポナ登場! | 73 |
| 第8話 | ゾーラの王とジャブジャブさ ま! | 83 |
| 第9話 | 潜入、ジャブジャブさまの中 ! vs バリネード!! | 92 |
| 第10話 | 遂に揃った精霊石! 終わり の始まり…? | 100 |
| 蓮子大人編 | | |
| 第11話 | そして7年後! 未来で目覚 めよ、宇佐見蓮子! | 109 |
| 第12話 | 森の神殿!! 決戦、ガノンド | |

| | | | |
|-------------|---------------|-----------|---------------|
| ロフ?! | 121 | 第19話 | 激突!ウルトラブリッツ |
| 第13話 | 賢 | 第19話 | 激突!ウルトラブリッツ |
| 者、目覚める!! | 133 | ポール!! | 188 |
| 第14話 | ゴロンの英雄と炎の邪悪! | 第20話 | 潜入!インゴ―牧場?! |
| 第15話 | 炎熱血戦!ヴァルバジア!! | 194 | |
| 第16話 | 炎の友情アタック!唸れ火 | 第21話 | レース対決!!エポナを勝ち |
| 産霊神(カグツチ)!! | 159 | 取れ!! | 203 |
| 第17話 | 凍りついた里!ハイリア湖 | 第22話 | 闇の巨人、現る!手がかり |
| の異変! | 167 | は7年前! | 211 |
| 第18話 | モーファの罫!蓮子が2人 | 第23話 | 潜入、井戸の底!真の瞳を |
| 第18話 | 177 | 手に入れる! | 221 |
| | | 第24話 | ハイラルの深淵!闇の巨 |
| | | 人、ボンゴボンゴ! | 233 |
| | | 第25話 | リミットブレイク!!超究武 |
| | | | |

神覇斬!!

240

第26話 最後の神殿へ! いざゲルド

の谷!

247

第27話 大脱出、ゲルドの砦!

257

第28話 激突ツインローバ! 見せろ

二刀流、グランドクロス!!

275

第29話 ガノン城へ……、蓮子、決意

の進撃!

285

第30話 この世界の全てを照らす、

奇跡の光

297

………

潜? 邨よ戻 邨ゆo纏翫? 蟋九U纏

蓮子子供編

第1話 目覚めの朝、目覚める勇者

……。……。……。

鼓動が聞こえる。命が動いている。私は生きています。これは、私の命の音だ。ふと、疑問が生じる。「私」とは誰なのだろうか？

問いかけても答えが返ってくるわけでもなく、ただただ静寂が訪れるだけ。体を伝う浮遊感と重い瞼が、ここが夢である、と告げている。

私は……。「宇佐見蓮子」だ。

辛うじて絞り出したのはそれだけ。

本当に？

自問自答する。

ほかに覚えているはないの？

そう。

その時突然、私の精神は、何かに引き寄せられるように進んでいく。

「……………んんん」

声が聞こえる。忘れなくなかった親友の声が。

親友？

私に親友なんていたのか？

考えようにも、私の精神はどんどん目覚めへと向かっていって……

私の精神は、後頭部に伝う硬い感触と、誰かの呼び声で徐々に現実を引き戻された。

「……………むあ……………」

そんな腑抜けた声を出して私は目覚める。真つ先に目に入ったのは木で出来た、木と
いっても、加工された木材でなく、生えていた木をそのまま削って作った部屋のよう
な場所。そして、私の周りを飛び回る一匹の蝶々。

「ほら、起きて蓮子・デクの樹サマが呼びよ！」

手も持たず揺さぶることも出来ないの、蜂のように無限マークを描きながら必死に
私の上を飛び回る。

「……………まったくもう。こんなねぼすけがハイラルの命運を握っているのかしら。」

その蝶々はぐるぐる私の周りを周回しながらペラペラと喋っている。ペラペラと……喋って？

「ええっ?!」

そんな矛盾が寝ぼけていた私の脳を無理矢理にでも回転させる。

「やつと起きた。ホラ、デクの樹サマがお呼びよ。」

私は飛び起きて目を白黒させる。

「おはよう蓮子。私、妖精のナビィ！今日から貴女の相棒よ。よろしくネ！」

私は数秒間口をパクパクさせることしか出来なかった。

そんな。あり得ない。蝶々が喋ってる。秘封倶楽部の活動でも見たこと無かったのに。

え？

秘封倶楽部ってなに？

……わからない。

再び自問自答を繰り返す。

頭によぎったその単語を私の脳は反芻する。

「ホラ、なにボサツとしているの蓮子！デクの樹サマがお呼びなのよ？早く行きましょ！」

考え事をしていた私の頭を蝶々の、否、妖精のナビイがつつく。

「あ、うん。」

私は反動をつけて起き上がり、木でできた床に足をつける。

コツン、という軽い音が響く。

ふと下を見ると、私は両足に茶色いブーツを履いていた。

あ、靴のまま寝てたんだ、と自分を笑う。

さて、と気持ち切り替えて前を見ると、ある違和感が生じた。

「あれ、視線が低い……？」

そう。私の今までの感覚とはまるで違う。

最低でも背は165センチはあったはず。何があったかは思い出せないがそれくらいは分かる。

すると、私の目に全身が映る鏡が飛び込んできた。うん。あれもやけにでかく感じる。

「ん……？」

首を傾げながら鏡の前に立って、鏡に映る自分を見て私は目を見開いた。

「えっ、こ、子供……？」

そこに移っていたのは、せいぜい1メートルほどしかない少女だった。

少女は白と黒の服を着て赤いネクタイ、黒い帽子を被っている。そう。私のいつもの格好だ。

……いつもの？うーん、思い出せない……。

「何してるのヨ蓮子！早く行きましょ！」

すると、妖精のナビイが私を急かしてくる。生意気な蝶々だな全く……。

やれやれ、と私は表へ出る。

表は、一言で言えば、森の中の小さな集落であつた。

周りを見渡せば、私がさっきまでいた家と同じような家が乱立している。

すると、下から誰かが私に声をかけてくる。

「ヤッホー、蓮子！」

私が見ると、そこには全身緑を基調とした服の少女がいた。つて、ちよつと待て。

なんで私の名前を知ってるのさ？

私はこんなところ見覚えのないのに……。まあでも、とりあえず下に降りるか……。う

ん。降りて話したら何か思い出すかもしれないし。

私はそう結論づけ、目の前に据え付けられた下に降りる梯子を下る。

「ふう……っ」

慣れない梯子に少々苦戦しながらなんとか私は地面に降り立つ。

ふと見上げると、私の家の全貌が把握できた。……いやいや、なんでわざわざ高くするのよ……

すると、緑の少女が私に話しかけてくる。

「わあ、妖精！遂に蓮子のところにも妖精がやってきたのネ！」

「私のところにも、って、妖精持つてるの？君は、えっと……」

くそつ、互いに知り合い前提で話していると相手の名前がわかんない……

「サリアよ、蓮子、忘れちゃったの？」

サリアと名乗ったその少女は悲しそうにこちらを見つめる。

「あ、あー！あー！そ、そうねサリア。じよ、冗談よ冗談。」

名乗ってくれたお陰でようやくこの人の名前がわかった。慌てて今思い出したみたいに言い訳する。サリア、か。見た感じ同い年くらいだとは思うんだよなあ……。んー、でもとりあえず私の今の歳くらいは聞いとこうかな……

「ねえサリア。私って今何才だっけ？」

私の問いにサリアは少々考える仕草をして、

「うーん、蓮子が森に来てからは9年くらいじゃないかな？」

私が来てから？……へんな言い方するんだな……。まあとりあえず今の私は9歳くらいなのか……。ん？

若っ!!

いや待て待て!! 私は大人の階段の頂上に辿り着いた20歳だぞ?!

お、落ちて着こう。うん。一旦落ち着け……、11歳のときにここにきたのかもしれない……、って、それならこのちっこい体をどう説明すんのよ?!

などと私が頭を抱えて考え事していると、いつのまにかサリアとナビイが会話していた。

「へえ! 蓮子、デクの木サマに呼ばれたの? すごいじゃない! だったら、早く行った方がいいわ! またお話ししましょうね!」

手を振るサリアに手を振り返し、ナビイに連れられて私は奥へと進んでいく。

「ホラ、蓮子! デクの木サマはこの奥よ!」

ナビイが奥に進もうとするが、そこには私と同じ身長くらいの男の子が立ちふさがっていた。

「あ? 蓮子じゃねーか? なんだヨそんなに急いで?」

「何よアンタ。私はデクの木サマに呼ばれたの。そこ通してくんない?」

「はあ?! オマエがデクの木サマに? そんなの信じられるかヨ! このミドさまの目が白い内は、オマエなんか認めないかんナ!! もし、本当にそうなら、剣と盾くらい持ってこい! じゃないとデクの木サマに失礼つてもんだろ!」

なんだこいつ。うざったいの一言だ。ってか白い内じゃなくて黒い内、だろ…。まあ、そんなこと言っても仕方ない、か。

「ねえアンタ。剣と盾持って来れば通してくれんでしょう？」

私はポケットに手突っ込んで偉そうにしているミドにそう問う。

「そーだよ！ まっ、オマエには無理だろうがナ！」

いらっ……

ふんっ、上等だよクソガキ、絶対見つけて土下座させてやる……！

イライラしながら私は来た道を引き返す。

「うーん、啖呵きって出てきたのはいいけど、剣と盾、この森にあるのかな……」

私ははあっ、とため息を吐く。

すると、ナビイが何かを思い出したかのように私の目の前に現れる。

「そうヨ蓮子！ ナビイ剣はコキリの練習場の中に隠されてるって聞いたことあるよ！」

「コキリの練習場……、ね。まあ、情報もないし、とりあえずそこ行ってみますか。」

私は伸びを一つして、また歩き始めた。

「お、よう蓮子！元氣してるか？」

「今日はえらく遅いお目覚めだったわね！」

ああくそつ、こちとらアンタらの名前なんて知らないのに人の気も知らないで……！
私は緑の服の子供たちにひきつった笑顔で軽く会釈をしながら看板を頼りにコキリの練習場に歩いていった。

「……ね……」

そこには子供一人がなんとか通れそうな小さな穴が開いていた。

「うーん、これはギリギリっぼいね……」

まあでも行くしかないよね。

私は狭い通路を這って進んで行く。

「ふうつ、抜けた……」

でもまだちよつと余裕があつたかなあ？

なんて思案していると、私の目の前に宝箱が現れた。

「……いいのかな？持っていいの？これ……」

「蓮子、多分それが劍と盾よ！さ、持ったらミドのところ行きましょう！」

ナビイもこう言ってるし、まあ借りてくだけだし、いいよね。

「よっ……」

私は体重を乗せて宝箱を開けようとする。

ぎいい、という重い音を立てて宝箱は開く。

私は中に入っていた剣と盾を拾い上げる。

「……これでよしつとー」

私はシオルダーベルトを身につけ、剣と盾を担ぐ。

「さあて。あのクソガキんところ行きますかね。」

「ん？おい蓮子。ここは剣と盾が無いと通さねえって……つてあーっ!?そつ、それコキリの剣じゃねえか?!それにデクの盾まで……。へ、へんっ!そんなの持ってたつて弱いヤツは弱いんだかんナ!!」

ミドはブツブツ言いながら消えていった。

ふんっ、なんつても言えはいいさ。弱い犬ほどよく吠えるつて言うからね。

よし……行くか……

私はゆつくりと歩みを進める。

曲がりくねった道を進んで、開けた場所に出た。

「おお蓮子よ……来たようじゃな……」

「うわ！木が喋つとる!!」

私は思わずそう叫んでしまう。

「ナビイよ、ご苦勞であつた……。む？おぬし……、この世界の人物ではないな？」

デクの木サマに言い当てられ、私はどきりとする。

「は、はい……。たぶん……」

私はこう答えるしかできなかつた。

デクの木サマにはなにもかも見透かされている感じがした。だったら隠し事しても

無駄だよな。

「そうか……。おお、なんとということだ……。これで本来あるべき歴史から少しズレてし

まった……。」

「デクの木サマ！歴史がズレたつて、どういうことですか？」

ナビイも不安になってきたのか、デクの木サマに問う。

「本来の歴史ならばここに来るのは違う子供だったのだ。……ならば今ワシの前に立つ

ているこの少女は何者なのだ……?」

デクの木サマは必死に考えるような仕草を見せる。

「……もしかしておぬし、どこか別の世界で時空の穴に飲み込まれたか?」

「えつと……。私、自分の名前以外ほぼ記憶が無くて……。でも、この集落にいる子供は全員緑の服を着ていたのに、私だけこんな服に……」

私は自分の身体を見回す。

「それはおそらくおぬしがここに来る前に着ていた服なのだろう。本来ここはコキリ族という緑の服を着た子供のまま成長しない者たちが住む場所なのだ。蓮子、おぬしがその服で周囲から排他的に扱われないのはおそらくおぬしがこの世界に來た時にその服でも違和感がないよう都合よく改ざんされたと推測できる。」

「は、はぁ……」

だんだん意味がわからなくなってきたのでとりあえず相槌だけはうっておく。

「それで、おぬし……。いや、もしかすると、おぬしがこの時間軸の勇者なのか……?この里では妖精を持たぬ子はおぬししか居ない……」

「ゆ、勇者? 一体全体なんの話……」

私がデクの樹サマに問いかける。

「おぬしは神によって選ばれたのだ。おぬしならば、きっと、このハイラルを良い方向へ

「まずは、蓮子、おぬしの勇気を試させてくれ。ワシは今呪いをかけられておる。それを
おぬしの知恵と勇気で解いてほしいのじゃ。どうじゃ、やってくれるか……?」

ああ。これも「はい」しか選択肢無いやつやん……。

そう思案しながら私は、

「わかりました……やってみます!」

「では蓮子……、妖精ナビィと共にワシの体内に入るのじゃ。妖精ナビィよ。蓮子の力
となるのだ。よいか蓮子。ナビィが語りかけるときは、耳を傾けることだ。」

そう言つてデクの樹サマは口を大きく開く。

「は、はあ……」

私はそれだけ言つて仕方なくデクの樹サマの中へと入つていった。

第2話 デクの樹サマの中、決戦、ゴーマー！

「ふええ……。これがデクの樹サマの中ねえ……」

私は思わず口に出してしまふ。

「ナビイもデクの樹サマの中に入ったのは初めてだよ。」

ナビイも私と同じような感想なのだろうか。私の首元を飛び回っている。

「とにかく、進んで見ないとわかんないから、取り敢えず行こう。」

私はナビイにそう言つて、ゆっくりと歩み出す。

私は上を見上げてみる。するとそこには二階や三階が見えた。

「あれ、なんか人工的に作られてる部分もあるんじゃない。ねえナビイ……」

「あ、蓮子……下、下……！」

私がナビイに質問をしようとした途端、ナビイが下を見るように促してくる。

「……？下がどうしたつてのよ？」

そういえば地面の感覚がない。……ん？地面の感覚が、ない？

つんつんと靴先で地面をつついてみる。

ん？

……ない。地面が。

なんとなく察せた。

私はぎこちなく下を見てみる。

あつ……

そう。私が見下ろした時には全てが遅かった。

「嘘……」

私の足元には、ぽっかりと大穴が開いていた。そうか。上ばかり見てたから気づかなかったのか……。

サーつと血の気が引いていく。

……\ (o^o) / オワタ

「うわああーっ!!!」

私は大穴に向かって真つ逆さまに落ちていく。

「れっ、蓮子ーっ?!」

ナビイも慌てて追いかけてくる。

どぼーん、という音と共に私は着地、否、着水する。

「……………ぷはっ!!」

私は水面から顔を出し、咳き込む。

どうやら水に落ちたお陰で助かったらしい。まあ痛かったのかって言われれば痛かったのだが……………。

「れ、蓮子！大丈夫?!」

すると、ナビイが降りてきて私の側に来る。

「あ、うん。まあね。」

私は水に浮かんでいた帽子を取って水気を切り、被り直す。

そして、近くの陸地によじ登る。

「ふうっ、なんでこんな水たまりがあるのやら……………ま、お陰で助かったんだけどさ。」

ぶつぶつと文句を言いながら水が滴る服を絞る。

「へっくしっ！寒っ!」

私はくしゃみを一発かまして鼻をすする。

「大丈夫？蓮子。」

「あー、うん。多分大丈夫よ。」

私は両手を擦って、はーっ、と息を吹きかけ、再び手を擦りだす。

その時、私の目に入ってきたのは、1つの扉であった。

「取り敢えず、上には戻れそうもないし、行くしかない、か。」

私は虚空に呟くように言って、ゆっくりと進んで行く。

そして、私がドアの前に立つと、自然にドアは鈍い音と共に開いていく。

「よし、行こう、ナビィ。」

「うん。気をつけてネ、蓮子。」

ナビィは私の帽子の中に入って、私に身を委ねる。

それを確認して、私はゆっくりと中に入っていく。

「あ、宝箱。」

私は部屋のすぐ側にある宝箱に目がいった。

やつぱり、こういうのはパク……、借りていくのが勇者の特権ってやつよね。

私は体重をかけて宝箱を開く。

そして、ぴよんと宝箱にお腹を引っ掛けて、中に手を突っ込んで探る。

「おっー！」

私に手にしたのは……

「つてなんだ、パチンコかあ……」

大事そうにしまつてあつたのは、子供用のパチンコだった。

ご丁寧な弾と思われるタネも入っていた。

うん。これ、宝箱にしまうようなものなのか？

「……まあいつか。」

私がそれだけ口になると、地面の中から植物みたいな生物が出てくる。

そして、いきなり口からタネを飛ばしてきた。

「うわっ!!」

私はとっさに盾を構える。

すると、目の前の生物が吐き出してきたタネが私の盾に当たり、反対側に跳ね返った。

「蓮子！あれはデクナッツよ。近づくと草の中に逃げちやうよ！とばしてくる木の実を

はねかえせ！」

「えっ?!」

ナビイのアドバイスを元に、私は再び盾を構える。

すると、デクナッツは再びタネ、否、木の実を飛ばしてきた。

直後、デクナッツの吐いた木の実が私の盾に絶妙な角度で当たって跳ね返り、デク

ナッツに命中した。

「ピ……、ピピーツ!!ま、参ったっピ!!ご、ゴーマさまの秘密を教えるから、た、頼むから見逃してくれっピ!」

すると、デクナツツは急に喋り出した。

「ゴーマさまにトドメをさすにはひるんだスキに剣で攻撃だっピ。……喋ってしまったっピ。ゴーマさま……、ごーまんない。……なんちて。」

おーっ、寒つ……。もう夏も終わりね……。

それだけ言い残してデクナツツはスタコラサツサと逃げていった。

「もしかして、この奥の扉にゴーマとかいうやつがいるのかな?」

私はデクナツツが消えた穴の奥に大きな扉があるのがわかった。

「蓮子、この奥から嫌な気配がするヨ……」

ナビィも私の帽子の中から私に話しかけてくる。

「……まあ、行かないやデクの樹サマの呪いは解けないんでしょう? だったら行くだけよ。」

私はそれだけ行ってゆっくりと扉の鬼進んでいった。

大きな扉は、私に反応したのか重い音を立てて開く。

そして、私はゆっくりと中へ入っていった。

「あれ、何もないじゃない。」

私は周りを見ながらそう言う。

「れっ、蓮子！上!!」

ナビイが上を見てその華奢な体を縮こめる。

私が促されるまま上を見上げると、そこには……

巨大な、魔物、と呼ぶべきなのだろうか。とにかく巨大な生物が居座っている。

「それ」は、巨大な目玉が一つついており、蜘蛛のような体を持っていた。

「あ、あれが、甲殻寄生獣ゴーマー！デクの樹サマに寄生した怪物よ！赤くなつた目をねらって！」

ナビイの言葉に耳を傾けるが、ゴーマは天井に引つ付いたまま降りてこようとしな
い。

「目を狙うつたつて、剣じゃ届きそうもないし、どうすれば……?」

私がそう呟いた途端、

「蓮子！あなたさつきパチンコ拾つてたわよね？それでうまくあいつを叩き落とせないかな?!」

「えっ、パチンコ？そんなのでいけんのかな……」

冷静に考えてもみてほしい。こんな子供騙しにしなければならないようなパチンコであんなデカブリツに太刀打ちできないだろう。

それでも今は他に手がない。

仕方なく私は弾用のタネ袋からタネを一粒取り出し、パチンコに引つ掛けて狙いを定める。

「……?」

そこで、私は1つの違和感を覚えた。

わかるのだ。弾が飛んで行くであろう道筋が。

私はお世辞にも視力はいいとは言えないし、遠近感も特別優れているわけでもない。

それなのに、今の私にははつきりとわかる。

「……そこっ!!」

私は自分の感覚に全てを委ね、タネを発射する。

すると、タネはゴーマの目玉のど真ん中にジャストミートした。

そして、バランスを崩したのか、ゴーマは地面へと落下してきた。

「れ、蓮子！今しかないヨ!!」

「!!」

なんであんなのが効いたんだ、とか考えそうになったが、ナビイの一言ではつと我に

戻る。

そして、あのデクナツツが言っていた言葉を思い出した。

「ローローゴーマさまにトドメをさすにはひるんだスキに剣で攻撃だツピ。」

あいつが落ちてきた今しかチャンスが無い……。この一撃で決めてやる！

「見様見真似だけど……。これでどうだっ!!」

私は剣を鞘ごと持って右手で鞘を、左手で柄を持つ。

「一刀流居合……。？子歌歌っ!!」

私はそう呟いた後、猛烈なスピードでゴーマの目玉を切り裂いた。

そして、チンツと剣を鞘に納めると、途端にゴーマの目玉から血しぶきが飛び散り、ズ

ズン、という音と共にゴーマは崩れ落ちた。

「蓮子、怒られるヨ……。」

「でへへ。」

半分呆れ気味に言ってきたナビイに、私は少し申し訳ない、という顔をして苦笑いをし、頭をかいた。

……にしても。

よく出せたな、？子歌歌。

あんなの普通人間卒業してる人の技なのに……。

まあ、それだけゾ○さんが凄いつてことか。

私はそう結論づけ、ゴーマが倒れた方を振り向く。

すると、ゴーマは灰のようにボロボロと崩れて落ちていった。

「これで、デクの樹サマの呪いは解けたのよね?」

私はナビイにそう聞く。

「うん。多分そうだと思うヨ。」

私はそっか、と言ってゴーマの灰があつたところに出来た光のサークルに向かっていく。

「なにかしら、これ。」

「それで多分地上に戻るヨ・さ、蓮子、早くデクの樹サマのお話を聞かなきゃ!」

ナビイはそう言って私の帽子の中へ入り、急かしてくる。

私がサークルの中へ踏み入った瞬間、私の周りを水晶のようなものが囲み、くるくると回転しだす。

そして、私とナビイは、その場から消失した……。

第3話 ハイラルの姫、ゼルダ姫！

私の体は空から落下したかと思うと、地面で急激に減速し、ゆっくりと地面に降り立った。

それに見覚えのある場所だ。デクの樹サマの目の前。

戻ってこれたんだ、と安堵する私。

「よくやってくれた。ありがとう、蓮子。お前の勇氣、確かに見せてもらった。お前はワシの願いを託すにふさわしい少女であった。」

「え、ええ。それなら良かった。んじゃ、私帰りますんで。」

私はそう言うのとクルリと踵を返して立ち去ろうとするが、

「れ、蓮子！一応最後まで聞こうヨ!!」

ナビィが私の前に立ちふさがる。

「え？いや、だつて、デクの樹サマの呪いは解いたんだから、これで終わりじゃないの？」
「いやいや、まだ世界のせの字も出てないヨ?!まだ救つてもいないヨ?!私たちの守護神様を救っただけだヨ?!蓮子、正直あなたが世界を救える気がしないヨ……」

「いやだから、そもそも私は世界救うというよりはさっさと記憶取り戻したいってのが

本音だし。」

私は頭をかいてそう言う。

「蓮子、私たちがちゃーんとあなたの記憶は戻してあげるから! そのかわり、蓮子も私たちを手伝って! これでいいでしょ? 等価交換よ!」

「なあに? 錬金術でもやるの? フルメタルなアルケミストなの?」

「……もう、突っ込むのが追いつかないヨ……」

半分というより完全に諦めたナビィを尻目に私はデクの樹サマに再び向き合う。

「も、もう済んだか?」

「ええ。まあ。」

私は頬を赤らめて視線を逸らす。

「オホン。では、改めてお前にワシの願いを伝えたい……。聞いてくれるかな……?」

「大丈夫ですよ。それに、はいしか選択肢ないじゃないですか。」

「せ、選択肢で……」

なんかデクの樹サマがすごい困惑した顔してる……。流石にふぎけすぎたかな。

「で、では、心して聞いてくれ。ワシに呪いをかけた者は黒き砂漠の民じゃ。」

砂漠の民、ね、アラ○スタか? アラ○スタだよね?」

「あの者は邪悪な魔力を操り、ハイラルのどこかにあるという聖地を探し求めておつ

た。」

聖地、か。取り敢えず、砂漠があるってことはハイラルは森だけじゃないってことよね。

「なぜなら…、聖地には神の力を秘めた伝説の聖三角、トライフォースがあるからじゃ。なにそれ？タライとホース？」

「世に理なく、命未だ形なさず。混沌の地、ハイラルに黄金の三大神降臨す。」

「なんかデクの樹サマが難しい言葉使い始めた……。古典は高校生くらいですっぱり忘れたからなあ……」

「すなわち、力の女神、デイン、知恵の女神、ネール、勇気の女神、フロルなり。」

「なんかまた横文字出てきたな……」

「デイン……。そのたくましき炎の腕かいなを持って地を耕し、赤き大地を作る。」

「え？なにそれ。紅蓮腕的な？二の秘剣的な？」

「ネール……。その叡智を大地に注ぎて世界に法のりを与える。」

「法律って人間が作ったもんじゃないの？……いや、デクの樹サマが言ってるのは理ってことかな。」

「フロル……。その豊かな心により、法のりを守りし全ての命、創造せり。」

つまり、フロル様が私たち人類や魔物を作ったと。魔物は法のりを守ってるって言えるのか

な？

「三大神、その使命を終え、彼の国へ去り行きたもう。神々の去りし地に、黄金の聖三角残し置く。」

つまり、デイン様、ネール様、フロル様が神々の国へ帰ったところが、今のハイラルの聖地ってことか。そこに、その、タライとホースがあると。

「この後、その聖三角を世の理の礎とするものなり。またこの地を聖地とするものなり。」

なるほどね。そのタライとホースがあれば、世界をひっくり返すことも可能だと。

「あの黒き砂漠の民をトライフォースに触れさせてはならぬ！悪しき心を持つあの者を聖地へ行かせてはならぬ！あの者はワシの力を奪い、死の呪いをかけた……。やがて呪いはワシの命をも蝕んでいったのじゃ……。」

そうか。だから私を急いで呼び出したってことか。この場所にもともといるはずだった人物を呼ぶはずだった、ってことね。

「お前は見事にワシの呪いを解いてくれたがワシの命までは元には戻らぬようじゃ……。」ワシは間もなく死を迎えるじやろう……。」

そんな……、じゃあ、私は一体何のために……？

「だが……、悲しむことはない……。なぜなら、今、こうして……、お前にこのことを伝

えられたこと……。それがハイラルに残された最後の希望だからじゃ……」

デクの樹サマが言葉をつぐ度に辛そうにデクの樹サマは表情を歪める。

希望、か。私はそんなのとは真反対の人間なのにさ。

「蓮子よ。ハイラルの城へ行くがよい……。その城には神に選ばれし姫がおいになるはずじゃ……。」

お姫様……。そういえば、私も子供の頃はお姫様ごっことかしてたっけ。……いや、なんにも思い出せないんだけどさ。

「この石を持ってゆけ……。あの男がワシに呪いをかけてまで欲したこの石を……」

デクの樹サマがそう言うと、私の目の前が激しく発光する。

すると、私の手の中に緑色の宝石が現れる。

「それはコキリのヒスイ。森の精霊石だヨ！」

とナビイが言うが、さっぱりわからん。それでもクロ○ダイヤルが欲しがった石ってんだから大事なもんなのよね。

「頼むぞ蓮子。お前の勇気を信じておる……。妖精ナビイよ……。蓮子を助け、ワシの志を継いでくれ……」

「………すいませんデクの樹サマ。私、蓮子を助けられる気がしないです……」

「よいな……ナビイ……さらばじゃ……」

デクの樹サマはそう言うのと枯れてしまった。

「ああ、枯れちゃった……。せつかく呪いを解いたのに……」

私は俯く。

「蓮子、行きましよ……ハイラル城へ。……さよなら、デクの樹サマ……」

「……」

デクの樹サマは答えてはくれなかった。

私は数歩後ずさりをして、そのまま踵を返して、歩いていった。

「森の出口はあっちよ。」

ナビィは私の前を飛んで先導する。

「うん……」

私も暗い気分で答え、走っていく。

「おい蓮子。」

すると、誰かから声をかけられ、私は立ち止まる。

「オイラたちコキリ族は森から出たらシンじやうんだぜ。オマエ、ホントに行くのか?」

「うん。あんたも誰だかわかんないけど、やんなきゃいけないことができちゃったから。」

「そうか……」

ミドとは違う髪の長い男の子は私の返答を聞いて、素直に道を譲ってくれた。

「あんがとね。」

そして私は木でできた道を抜けて、橋に差し掛かった。

私が橋を走って渡ろうとすると、

「……行っちゃうのね……」

ふと、聞き覚えのある声が聞こえた。

私が後ろを振り返ると、そこには心配そうに見つめるサリアがいた。

「うん。ごめんね。なんか、心配かけるようなことしちゃって。」

「ううん、いいの。サリア、わかってた。蓮子が、あなたがいつか森を出て行っちゃうって。だって蓮子、サリアたちとどこか違うもん。」

うん違うね。服装全然違うね。違和感ありすぎだね。

「でも、そんなのどうでもいい！アタシたちずっと友達！そうでしょう？」

「サリア……」

サリアの言葉に、胸が締め付けられる感覚を覚えてしまう。

本当に申し訳ない。これほどまでに私を思ってくれているのに、置き去りにするようなマネをするのだから。

「うっ……」

ずきり、と頭痛が走る。

そうだ。私は前にもこうやって、友達を置き去りにして、どこかに……

私がそう考えていると、サリアが持っているオカリナを差し出した。

「このオカリナ……、あげる！大事にしてね！」

「わあ……、いいの？ありがとう！大切にするよ！」

私はオカリナを懐にしまう。

そして苦手な笑みをサリアに向けた。

「オカリナ吹いて、思い出したら、きつと帰ってきてね、約束よ？」

「……うん、約束するよ。きつと帰ってくるから。」

するの、また私の頭部に電撃が走ったかのように鋭い痛みが襲う。

「……私……つ！ぜつつつたいに……!!いつ……、待つて……」

……は、笑つて……へ、戻つてくる！だか……、……しらないで!!

「……なん……つ、なのよ、これ……つ、！」

頭を抑えてフラフラする私を心配して、サリアは私を支えてくれた。

「大丈夫、蓮子!?!どこか怪我でも……?」

「……蓮子。」

「……っっ!!」

誰かの声が響いたときに、私の頭痛は治まった。

ふと顔を上げると、サリアは涙目でこちらを見ていた。

「サリア……、ありがとう、大丈夫、心配しないで。」

「蓮子、本当に……、無理だけはしないでね。」

「……うん。またね、サリア。」

私はそう言って小さく手を振り、踵を返し走り出した。

切り株の道を抜けると、そこは広大な平原が広がっていた。

「わあ……、広……っ!」

私が驚いていると、

「ホホーウー！蓮子よ、こちらをござらん。」

と、木の上から何者かに声をかけられた。

私を上を向くと、そこには巨大なフクロウが止まっていた。

「やっとお前の旅立ちの時が来たようだの。お前はこの先多くの苦難に会う。この世界を去った後もな。だが、それがお前の運命。恨んではならん。」

「世界を去るってどういう……?」

私の質問に答えることなく、フクロウは続ける。

この道をまっすぐ行くとハイラルの城が見えてくる。お前はそこで一人の姫に出会うだろう。わかつたかい?」

「は、はあ……。わかりましたけど、とりあえず私の質問に教えてくださいよ。」

「それはお前が苦難を乗り越えれば、おのずとわかつてくるはずだ。それでは、ワシは一足先に行くとしよう。待つておるぞ。ホホーツ!!」

そう言うくとフクロウはバツサバツサと飛んでいつてしまった。

「あつ、おいこらー!ちよつとー!あんたは誰なのさー?!」

私の叫びも虚しく、フクロウは消えてしまった。

「……はあ。仕方ない。城に行きますか。」

私はそう呟いて歩きだした。

「おつ、町だ。」

私の視線の先には、城と、城下町と思しき町があつた。

「蓮子、多分あそこからお城に行けると思うヨー！」

「そうだね。行ってみよっか。」

ナビィと私は顔を見合わせ、城下町に走っていく。

「随分と活気に溢れてるわね。ホントに世界の危機なんて起こってんのかってくらいに。」

私は周りを見渡しながらそう言う。

「ねえ、あなた！変わったカッコしてるね。町のこじやないでしょ？どこから来たの？」
すると、小さい女の子に話しかけられ、私は歩みを止める。

「え、あ、私は、森から来たの。」

私はテンパっておどおどしながら話してしまった。

「へーっ、森の妖精の子なんだ……。アタシ牧場の子マロン。マロンはネ、とーさん待ってるの。とーさんお城に牛乳届けに入ったまま出てこないんだ……」

「そうなんだ……。あのさ、私、お城に用があるからさ、ついでにあんたのお父さん探してあげるよ。」

「本当?! ありがとう!」

マロンは目を輝かせて私の手を握り乱暴に上下させる。

「じゃ、じゃあ、行ってくるね!」

「あ、待って!」

私が城に向かおうとすると、マロンが私を引き止めた。

「とーさんきつとお城のどこかでねてるのヨ……。困ったオトナよネ。フフフ!」

いや、笑い事以前にそんなところで寝るか普通?!

「そうだ! とーさん見つけてくれるなら、これあげる! マロンが大事にあつたためたのよ!」

すると、マロンはちよつとおつきなタマゴをくれた。

「あ、ありがとう……」

うーん、明日は卵焼きかな……

「それじゃ、行ってくるね！」

「ありがとう！行ってらっしゃーい！」

手を振るマロンに手を振り返し、私は城に向かって走っていった。

「おーい、蓮子、こっちじゃよー！」

私が城への道に着くと、先ほどのフクロウがまた木の上から話しかけてきた。

「お姫様はこの先のお城の中……。見張りの兵に見つからぬようにな。ホツホツ。さて。城にたどり着くまでにどんな出会いがお前を待っておるか楽しみじゃ。それでは、気をつけてな。ホホーツ！」

そう鳴いたら、フクロウは飛んで行ってしまった。

「……行っちゃった。」

「……まっ、いつか。」

私はそう言って、歩きだした。

それから、私はどうかこうにか城の堀にまでたどり着いた。

「蓮子、今のはどう考えたってラクしてるよネ……?」

「ナビィ、そこは突っ込んだら負けなのよ。」

私は兵士の目を掻い潜りながらそう言う。

「そ、そうなのかな……?」

なんて会話をしていると、私が持っていたタマゴにいきなりヒビが入り、中からいきなりニワトリが出てきた。

「うわっ、ニワトリ?! ヒヨコじゃないのね……」

すると、誰かのいびきが聞こえてきた。

「……?」

私とナビィが同時に音のする方を見てみると、おっさんがお堀の脇でぐーすか寝ていたのだ。

私はすぐに察せた。この人がマロンちゃんの言ってたとーさんなのだ、と。

そして、先ほど生まれたニワトリととーさんを交互に見つめ、とーさんの耳元にニワトリを持つていく。

すると、コケコッコーツ!! と大きな音でニワトリが鳴き、とーさんが目を覚ました。

「なつ、なんだーよ？せつかくキモチよく寝てたのに。」

「…………お嬢ちゃん、誰だーよ？…………そうだーよ。オラがロンロン牧場の牧場主、タロんだ。お城に牛乳届けに来ただが眠くなつてついウトウトと…………」

ウトウトと言う割には寝つ転がつてぐーすか寝てただろーが…………！

「あの、それより、マロンちゃんがあなを探してましたよ。」

「…………え？マロンが、オラを探してた？…………し、しまっただーよ！マロンをほつといたままだーよ！また怒られるだあーっ!!」

なんだか一人で慌てて一人で走つて行つてしまった…………。

私が呆れていると、お城の壁に小さな穴が開いていた。そこから水が溢れ出ている。

「ん、あつこから入れるわね…………。よし…………」

私は後ろに下がつて、助走をつけてから堀を飛び越え、小さな穴に捕まった。

「わあ！蓮子凄いいい！」

「な、なんとか届いた…………」

私はホツと一息ついて、穴を通つていく。

「よし、出口かな？」

私が出た場所は、恐らく城の中庭部分であろう場所だった。

「そして、例に漏れず警備はある、と。」

「よし。」

私はそう言つて警備網を掻い潜り、中庭の開けた場所に出た。

「蓮子、手抜きすぎだヨ……。」

「しゃーないでしょ。尺が長すぎてうP主が死にかけてんだから。これもうちよつとで「世界を救つたサイヤ人が幻想入り」約2話分の量になるのよ?」

「蓮子、メタすぎるヨ……。」

そんな会話を交わしながら、私たちは奥へと進んできた。

すると、奥に窓の中を覗く女の子がいた。

「……。」

私たちが見つめていると、女の子は気づき、こちらを振り返る。

「! だ、だれ? あ、あなた、だれなの? どうやってこんなところまで……?」

「げっ、バレた……。」

「どうするナビィ? 逃げようか?」

「いや、蓮子。どうやらその必要はなさそうだよ。あの子、普通の人とは違う感じがする。」

私とナビイはコソコソと話す。

「あら？それは……妖精?!それじゃあ、あなた、森から来た人なの？」

「う、うん。まあ。」

私はぎこちなくそう答える。

「それなら……、森の精霊石を持っていませんか？緑色のキラキラした石……。」

「あ、うん。持ってるよ。」

「やっぱり！」

私が答えると、女の子の表情がぱあっと明るくなる。

「わたし、夢を見たのです。このハイラルが真っ黒な雲におおわれてどんどん暗くなっ
ていくのです……その時一筋の光が森から現れました……。そしてその光は雲を切り裂
き大地を照らすと、妖精を連れて緑に光る石を掲げた人の姿に変わったのです。……そ
れが夢のお告げ。」

女の子はそう言って私を指差す。

「そう……。あなたがその夢に現れた森からの使者だ、と。あ……ごめんなさい！わた
し、夢中になってしまっ……まだ名前もお教えしていませんでしたね。」

女の子ははつとして凜とした目をこちらに向ける。

「私はゼルダ。このハイラルの王女……。」

「あなたが……王女、様……。わ、私は、蓮子、宇佐見、蓮子、です。」

王女様なんて見るのは初めてなので私はぎこちなくなってしまう。

「蓮子……。不思議。懐かしい響きね。じゃあ蓮子、今からハイラル王家だけに伝わる聖地の秘密をあなたにお話しします……。」

そうして、ゼルダ姫は語りだした……。

第4話 死の山、デスマウンテンとゴロン族！

「それでは、これから王家に伝わる伝説をお教えしますね……」

ゼルダ姫は神妙な面持ちで私に言ってくる。

「あつ、そうだ！ 誰にも言わないでくださいね！」

「あつ、はい！ もちろんです！」

私は慌てて返事をする。

「では、それはこう伝えられているのです……」

そうしてゼルダ姫は語りだした。

「3人の女神様はハイラルのどこかに神の力を持つトライフォースを隠されました。その力とはトライフォースを手にした者の願いを叶える、というものです。心正しき者が願えばハイラルは善き世界へと変わり、心悪しき者が願えば世界は悪に支配される。そう伝えられていました。」

なんでも願いが叶う、ね。さすが神さまの力つてやつなのかしら。峻るわね……

私は真剣な表情のまま話を聞いていた。ナビイも私の隣で黙って話を聞いている。

「そこできにしえの賢者たちは心悪しき者からトライフォースを守るため、時の神殿を

造られました。そう、時の神殿とは、この地上から聖地へ入るための入り口なのです。」なるほど。じゃあその時の神殿つてどこに行けばトライフォースを手に入れられるってことね。

「でもその入り口は「時の扉」と呼ばれる石の壁で閉ざされています。そしてその「扉」を開くには……、3つの精霊石を集め、神殿におさめよ、と伝えられているのです。」

精霊石……、じゃあ私の持つてる一個の他に、あと2つあるのね。

「さらにもう一つ必要なもの……、言い伝えとともに王家が守っている宝物……、時のオカリナです。……私の話……わかりましたか？」

「あ、はい。」

私がそう答えると、姫の表情ははばあつと明るくなる。

「よかった！あ、そう！忘れていました！私は今、見張りをしている最中なのです。夢のお告げのもう一つの暗示……、黒い雲、それがあの男……。あなたものぞいてみてくださいるっ。」

すると、ゼルダ姫は場所を私に譲る。

私はコクリと頷いて、窓から中を覗き込んでみる。

「蓮子、お城の中だね……」

「しっ、ナビイ、静かに！私たちが忍び込んでることバレたら切腹じゃ済まされないわよ

?!」

「なんでそんなSAMURAI視点なの……?」

私とナビイがそんな会話をしていると、1人の男が窓の奥に現れた。

「鋭い目つききの男が見えるでしょう?あれが西の果ての砂漠から来たゲルド族の首領、ガノンドロフ……」

あれ、クロ○ダイルじゃないんだ……

「今はお父様に忠誠を誓っているけれど、きつとウソに決まっています……」

まあそんな決めつけることは……、ほら、人は信頼って言うし……

「夢に見たハイラルを覆う黒い雲……、あの男に違いありません!」

「……………」

私が黙ってガノンドロフを見つめていると、ふとガノンドロフがこちらを睨みつけてくる。

「つ!!」

私は慌てて窓から体を離す。

「どうしたのです?気づかれたのですか?構うことはありません!私たちが今何を考えているか、奴にはわかりはしないのですから!」

「だといいですけどね……」。

殺気。ガノンドロフから浴びせられたのは間違いない。それだった。

背中に巨大なつららを突き刺された感覚だった。

もし仮に私たちの作戦が失敗したとして、あいつと戦うことになるとしたら、と考えるゾツとする。

ここでふと、私の中に疑問が浮かんだ。

「王様には、相談はされなかつたんですか？一応話は聞いてくれるとは思いますが……」

私がそういうと、ゼルダ姫は表情を曇らせる。

「ええ。お父様には相談しました。けれど、お父様は私の夢のお告げを信じてくださいませんか……。でも、わたしにはわかるのです！あの男の悪しき心が……！」

ゼルダ姫はそう言う拳を握りしめる。

「ガノンドロフの狙いはおそらく聖地におさめられたトライフォースです。それを手に入れるためにハイラルにやってきたのでしょう。そしてハイラルを、いえ、この世界をも手中に収めるつもりなのです！蓮子、今ハイラルを守るのは私たちだけなのです！どうか、信じてください！お願いです！」

ゼルダ姫はまっすぐな目で私を見つめてくる。

「はい。信じます、その話。私も、記憶を取り戻したいです。その代金としては、安い

もんですよ。」

「よかった！ありがとう！私は、怖いのです。あの男がハイラルを滅ぼす、そんな気がするのです。それだけの恐ろしい力を持った男なのです。でもよかった。あなたが来てくれて。……とにかく、ガノンドロフにトライフォースを渡してはいけません！時のオカリナはなんとかしてあの男の手に渡らぬよう、守ります。」

「そこで、あなたは残る2つの精霊石を見つけてください。ガノンドロフよりも先にトライフォースを手に入れて、あの男を倒しましょう！」

「はいー！」

私も力強く返事をする。

「あ、そうだ！それから、この手紙を渡しておきます。きつと役に立つはずですから。すると、ゼルダ姫は直筆の手紙をくれた。」

「私の乳母が城の外まで案内してくれますから、怖がらず、話をしてくださいね。」
「わかりました！色々ありがとうございます！」

私はゼルダ姫にお辞儀をしてから、踵を返し、中庭の入り口に戻る。
するとそこには、長身の女性が立っていた。

私も記憶の中ではそこそこ身長あつたはずなんだけどなあ……

「私はシーカー族のインパ。ゼルダ様をお守りする者だ。全ては今姫が話された通り。」

「勇氣ある少女よ。新たな旅へ向かうのだな。」

「はい。それが私の使命だつてんなら、やってやります。」

「……私の役目は森の使者に1つのメロディを授けることだ。そのメロディは、古代より王家に伝わる歌。私がゼルダ様に幼き頃より子守唄としてお聞かせ申し上げていたが……私はこのメロディに不思議な力を感じるのだ。さあ、心して聞くがいい。この歌を、覚えるのだ。」

すると、インパさんは指笛を吹き始める。

なんだか心が落ち着くメロディが周囲に響き渡った。

「さあ、お前の持つているオカリナ、それで復唱してみろ。」

私はインパさんの指示通り、サリアから託されたオカリナで、先ほどのインパさんの指笛のメロディを復唱した。

よし、覚えた。ぼんやり。

「城の兵士たちに見つかるとなにかと厄介だ。城の外までお送りしよう。」

そうして私はインパさんに連れられ、ハイラル平原に戻ってきた。

「……勇氣ある少女よ。我々はこの美しいハイラルを守らねばならない。」

するとインパさんは、城下町入り口の左手にある、大きな山を指差した。

「見るがいい、あの山をあれが炎の精霊石がある、ゴロン族の山、デスマウンテン。」

いきなりラスボスの根城感が溢れてる……

「デスマウンテンの麓には、私の生まれ育った村、カカリコ村がある。村人たちに話を聞いてから、デスマウンテンに向かうといい。」

「はい。お世話になりました！じゃあ、2つ、精霊石集めたら、戻ってきます、約束しますね。」

「ああ。約束だ。……さて、お前に託された歌は王家の者にだけ許される不思議な力を持った歌だ。王家に関わる者の身の証にもなろう、よく覚えておくのだ。姫はお前がこの城に戻ってくるのを待っておられる。では、頼むぞ。」

私はこくりと頷く。

すると、インパさんはパンツ、と何かを地面に叩きつけ、激しい光を放ったかと思うと、インパさんは消えてしまった。

……忍者かあの人は。

山の方へ向かい、歩いていくと、看板と階段があった。

デスマウンテン登山口、カカリコ村入り口、と書いてある。

「よし、ここね。」

「うん、行こう蓮子!」

私とナビイは顔を見合わせて、階段を上っていった。

「ここがカカリコ村……。随分とのどかな雰囲気ね。」

私は思わずそう零す。

そして、道なりに進んでいくと、門と、その前に1人、兵士が立ちふさがっていた。

「あの、そこ、通してもらえませんか?」

「キミ、ここは通行止めだ。その看板が読めんのか? そうか、子供には読めんな! はっはっは!!」

むかつ……

「ナビイ、こいつ殴っていい?」

「蓮子! ダメだヨ!!」

殴ろうとする私をナビイが必死に止める。

「はあ。これでどうよ!」

私はイライラしながら兵士にゼルダ姫の手紙を突きつける。

「おお、これは、たしかにゼルダ姫の御筆跡！なにになに……ふむふむ、「この者、宇佐見蓮子というハイラルを救う為、我が使命を受けし者なり」……？はっはっはっはっは！！姫さまもまたおかしな遊びを思いつかれるものよ！まあ、よかろう！通るがよい！気をつけて行けよ勇者チャン！ハーツハツハツハ！！」

いらっ……

「ナビィ、こいつ蹴っていい？」

「流石に今のは酷いネ……って！ダメよ蓮子！！」

蹴ろうとする私をナビィが再度止める。

はあ、と私はため息を一つ。

「まあ、とりあえず進みましょう。こんな奴に構ってる暇ないしね。」

私たちはゆっくりと歩みを進めていく。

ラスボス感漂う山、デスマウンテン。そこに住むゴロン族とは何者なのか?!果たして、どうなってしまうので、あろうか?! (界王様風)

第5話 熱いアニキと燃える洞窟?!

私がしばらく歩いていっていると、先ほどの村の景色と一変し、ゴツゴツした山道が続き始めた。

「登山なんて初めてだなあ……」

ナビイは私の周りを回りながら言う。

「とりあえず、てっぺんに住んでるのかな、そのゴロン族ってのは。」

「うーん、どうだろう? わかんないな。とりあえず、登ってみようヨ。」

「ま、それもそうね。」

私は納得して、さっさと先に進み始めた。

道はゴツゴツしているが、登りにくい、ということはない。緩やかな坂道が続いているだけだ。……今は。

「ん、看板?」

すると、私の視界に大岩と看板が入り込んできた。

「ドドンゴの洞窟 勝手にはいるな!」……ドドンゴってなに?」

私はナビイに問う。

「ドドンゴはこの先の洞窟に住む魔物のことだよ。結構強いから注意した方がいいね。」
「ふうん。」

私はそれだけ言って、大岩を見上げる。

「まあでも、こんな岩があるんじゃないわね。」

私は諦めて踵を返し、さらにデスマウンテンを登っていいこうとする。

その時、私の横にあつた岩が急に動き出し、ゴツい体の生き物に姿を変えた。

「っ!!魔物か?!

私は剣に手をかける。

「あ、違うヨ蓮子!あれがゴロン族だよ!」

ナビィの一言で私は頭に疑問符を浮かべてしまう。

「うーん、人と魔物の区別ができないわね……。」

すると、ゴロン族は私に話しかけてくる。

「オラ……、デスマウンテンに住んでるゴロン族だゴロ。」

ゴロ……?」

「この大岩見てほしいゴロ。ここはドドンゴの洞窟。オラたちゴロン族にとって大事な場所だったゴロ。中はてきとーに薄暗くて燃えてて、美味しい特上ロース岩がとれてたゴロ。」

「でもある日突然洞窟内のドドンゴが凶暴化!コワイ所になっちまったゴロ。さらに黒いゲルド人が魔法で入口を塞いじやったゴロ。」

ああ、クロ○ダイル……じゃなくて、ガノンドロフか。

「このあたりの話を聞きたいならオラたちの町に行けばいいゴロ。」

町?・山の中に町があるの?

「ゴロンシテイはこの真上。歩いてちよつとゴロ。」

ゴロンシテイで……ハイカラな名前ね。

「ありがと。この上にあるのね?」

「そうゴロ。……ところで、おめえ、見ない顔ゴロ。どつから来たゴロ?」

「ん、森から。」

「んー……?森?おめえ森から来たゴロ?森はいいとこゴロ。オラたち森から聞こえてくる歌が大好きゴロ。」

「そうなの?じゃ、まあ、私はこれで。じゃね。」

私はそれだけ言つて登山道を再び歩きだした。

しばらく進むと、道が二手に分かれていた。

「蓮子、ゴロンシティはこっちっぽいよ。」

すると、ナビイが私を先導しだす。

「あ、待ってよナビイ！」

私も慌てて追いかける。

「あ、またいた、ゴロン族。」

私の視線の先には、先ほどより大きなゴロン族がいた。

「おっす。オラはここでの、バクダン花の為に日避けになってるゴロ。おめえ誰ゴロ？」

「私は宇佐見蓮子。ねえ、バクダン花ってなに？」

私が聞くと、ゴロン族は快く説明してくれた。

「そこにはえてるのがバクダン花。デスマウンテンにしかはえない「鉱山植物」ゴロ。」

ゴロン族が示した先には、本当に爆弾のような花が生えていた。

「ふつうは暗いところにはえる花だから、こんなところにはえてるのは珍しいんだゴロ。」

「こどもでもゴロンのうでわがあれば、こう、摘み取れるゴロ。」

「そうなんだ……。ありがとう。」

「どういたしましてゴロ。」

私はゴロンにお礼を言ってさらに先に進み始める。

先に進むと、大きな洞穴のようなものと看板が見えてきた。

「ゴロン族の国 ゴロンシティ」……

国なのに町とはこれいかに……

まあそんなこといちいち突っ込んだら負けか……

私は諦めてゴロンシティに入ってしまった。

「おお……」

そこは巨大な洞穴で、いたるところに壁画が描いてあった。

「お、こどもゴロ。」

うっさいな。私は体は子供、頭脳は大人なの。

私はそう思いながら、ゴロン族に耳を貸す。

「よくこどもがこんなところまで来れたゴロね。なんか用があるゴロか？オラたちややししいことはニガテだから、そういうことはアニキに聞いてほしいゴロ。」

「アニキ？」

私は首をかしげる。

「ダルニアのアニキってば、キゲン悪いと怒るからコワイゴロ。でも、オラ知ってるゴロ。アニキのヒミツ！」

とりあえずそのアニキさんに会えばいいのね。

ってか秘密？なんだろう、無性にウズウズするこのフレーズは……

「アニキはあれでもダンスが趣味なんだゴロ。リズムに乗せてやればきつとキゲンよくしてくれるゴロ。ダルニアのアニキはこの一番下にいるゴロ。…そういやアニキ、最近よく森から流れてくる歌を聞いてたゴロなあ……。あの頃が懐かしいゴロ……」

うーん、みんな森、森って……。コキリの森のこと言ってるのかな……。どっかで繋がってたりするの？

「昔はあそこに赤いキラキラした石があってオラたちの町を照らしてたんだけど……。アニキが持つてつちやつたまま部屋から出て来てくれないんだゴロ、それ以来町は灯が消えたよう。オラたちまでゆうつな気分なんだゴロ、」

「それってもしかして、精霊石？」

私はハツとしてゴロンに問う。

「うーん、たしかそんな名前だった気がするゴロ。アニキは赤い石は狙われてるって

言つて、「王家の使いを待つ」つつて、自分の部屋に閉じこもつてるゴロ。」

「ナビィ！」

「うん！きつとダルニアつて人が持つてるんだよ！」

なーんだ、チョロいもんじやない。これで残り一っね！

私はそう考え、ゴロン族にお礼を言つてから下まで降りた。

私の下に着くと、石の壁が立ちふさがつていた。

私が目の前にたつても、うんともすんとも言つてはくれない。

うーん、やっぱなんかがいるのかな……

「ねえ蓮子。王家の使いの証明をしたら、アニキも開けてくれるんじゃないかな。」

王家の、使いの証明……

そこで、私はインパさんの言葉を思い出した。

「……お前に託された歌は王家の者にだけ許される不思議な力を持った歌だ。王家に
関わる者の身の証にもなるう、よく覚えておくのだ。」

「そっか。それなら……」

私はサリアから譲り受けたオカリナを取り出し、インパさんから教わつたメロディを

奏でた。

すると、アニキが聴いてくれたのか、扉が開いた。

「おつ、開いた！お邪魔しまーす……」

「なんでえ！王家の歌が聞こえたからどんな使者がきたのかと思えばガキンちよ、しかも女じゃないか！」

私が部屋に入ると、アニキから罵声を浴びせられた。

「このダルニア様もあまく見られたもんゴロ！ふん！もう完全にヘソ曲げたゴロ!!とつとと帰れゴロ!!」

いらつ……

なんでこうこの奴らは人をイライラさせるのが上手い奴らばつかなのかな……?!

「あの、なんでそんな怒ってるんです？」

イライラを抑え、私が怒りの理由を尋ねる、

「なに？なんでそんなにキゲンが悪いのかつて？ドドンゴの洞窟における古代生物、ドドンゴの異常繁殖！名産品バクダン花の不作！岩不足による空腹！だがな！これはオレたちの問題だ！よそ者の力なんか借りねえゴロ!!」

……はあ。

「……なんか、精霊石の話の切り出せなくなっちゃったネ……」

ナビイが私に耳打ちする。

「そうね。ここは大人しく一旦引き下がらしましょうか。」

「チクシヨ〜!なんであんなに怒るんだよ!逆にこつちがムカつくわ!」

ブツブツと文句を言いながら私は来た道をもどる。

「仕方ないよ蓮子。」

ナビイも半分諦め気味だ。

「ん?」

すると、ゴロンシテイの中の洞窟から歌声が聞こえてきた。

「もしかして、森の歌って、これかな?」

「そうかも……、行ってみようよ蓮子!」

私とナビイは穴の奥へと進んでいった。

次に私たちが目にしたものは、森の景色であった。

「あつ、本当に森に出た！」

「とりあえず、歌が聞こえる方へ行ってみよう！蓮子！」

私はこくりと頷き、歌が聞こえる方へとどンドン進んでいった。

しばらく進むと、とある建物の前に出た。

「あつ！蓮子！待ってたヨ！」

そこには、切り株に座ってオカリナを吹くサリアがいた。

「サリア！あんただったのねあの歌って！」

「あ、聞こえてた？ごめんネ。……ここは森の聖域。サリアのヒミツの場所！なんだかここって……、これから2人にとってすつごく大事な場所になる、そんな気がするの！ここでこの曲吹くと妖精たちとお話しできるのよ。蓮子、いっしょにオカリナ吹いてみる？」

サリアの提案に、私が首を横に振るはずがなかった。

「じゃあ、私の吹くオカリナのメロディを真似してね！」

そう言って、サリアはオカリナを吹き始める。

なんだ心が躍るようなメロディが響いた。

私もそれを真似して吹いてみる。

「うまいうまい！その曲、忘れないでね！アタシのの声、聞きたくなったらサリアの歌を
ふいてね！いつでも話せるから……」

「ありがとう！いろいろお世話になっちゃって……」

「いいの！アタシたち友達だから、助け合うのはトーゼンでしょ？」

「ありがとうサリア！じゃあ私行くね！じゃあ！」

「うん。またね！」

そう言って私はサリアに背を向け走り出した。

よし、これでアニキの機嫌が直るかな……？

「よし、ゴロンシテイに戻ろう！」

ナビイは急いできた道を引き返し始めた。

「なんだおめえ！まだいたゴロか?!何回来たって同じゴロ！」

再びアニキの前に来た私たち。

「ま、まあまあ。とりあえず、この曲でも聞いてくださいよ。」

私はさっそくオカリナを取り出し、サリアの歌を奏でる。

すると、アニキの顔に笑みが戻り、私のオカリナに合わせて踊り出した。

「お……、おっ……！来た！来た！来たっ！！このアツいビート！！」

ビートではなくね……？

そうして、しばらく踊り続けたアニキは、

「うーん、いい曲だあ！沈んだ気分がスッキリしたぜ！ネエちゃん！さつきはすまな

かったな！オレに用があるんだろ？」

「あ、はい。精霊石について……」

「おめえも炎を精霊石を探してるんだな。あれは別名ゴロンのルビー。オレたちの大事

な秘宝だ。カンタンにや渡せねえ。どうしても、っていうんなら、」

「ドドンゴの洞窟の怪物倒して、オトコになってみな！」

いえ、私女です。

いや、そういう意味じゃないか。

「そうすりゃオレたちもみんな幸せ！精霊石だつてもちろんくれてやろうつてもんだ

！」

「わかりました、……やってみます！」

私の返答に満足したのか、アニキは嬉しそうに言う。

「さすが王家の使い様は器が違えやー！じゃあ頼むぜ！」

そして私はよし、と気合を入れなおすのであった……

第6話 熱戦！キングドドンゴ！！

「ああそうだ！ネエちゃん。ドドンゴの洞窟に行くんなら、これを持っていけ。役に立つだろう。」

そういうとアニキは重い袋をくれた。

結構重いな。何が入ってんだこれ……？

「中身はバクダンさ！」

え？

マジで？

「幼気な少女に爆発物持たせんよな……」

私はボソツとそう呟く。

「蓮子、獅子歌歌出せる少女は幼気じゃないヨ……」

ナビイもこっさり私に耳打ちする。

うぐ、それもそうか。

「それをドドンゴの野郎のクチにでも放り込んでやるといいさ！ドカンとかましてやれ！」

そう言つてアニキは高らかに笑いだした。

そんなんで勝てたら苦労しないわよ……

私は内心でため息をつき、

「じゃあ、行つてきますね。」

とだけ言つて、アニキの部屋を後にした。

「おう、気をつけてな!」

と言つてくれるアニキに、手を上げて応えた。

……さて。

着いたはいいものの、大岩で入れないってことをすっかり忘れてた。

「ねえ蓮子。そのバクダンでこの岩壊せないかな?」

ナビイはそう言うが、この大岩にはちよつとねえ……

なにせバクダンはボーリングの球くらいしか無く、大岩は二階建ての家くらいはあ
る。

「まあ、やってみなきゃわかんないか。」

私はそう呟いて、バクダンを取り出し、持ち合わせていたマッチで火をつける。

シュー、と言う音が導火線から聞こえ始めたので、私は慌てて、なおかつそつとバクダンを大岩のそばに置き、急いで離れる。

すると、バクダンは爆発を起こし、岩を崩した。

「凄い蓮子！やるじゃない！」

ナビイはそう言うが（2回目）、1番驚いていたのは私だった。

ボーリング球くらいバクダンに一体どんだけ火薬が詰め込まれてるんだ……
考えるだけでゾツとする。

私はため息を吐き出し、考えるのをやめ、洞窟の中へと入っていった。

「暑っ……」

蒸し暑いレベルじゃない。てきとーに暗くて熱いって言うってたけど、全然適当じゃない……

「あゝ……」

私はフラフラしながら洞窟内を進んでいった。

「熱いね蓮子……」

「サウナかここは……」

私は頭すら持ち上げられず、だらんとぶら下げたままゾンビのように歩いていた。

「あーもうっ!」

帽子が蒸れるしやっつけられるかつたく!

私は乱暴に帽子を取って腰のベルトに引っかける。

あー、これで少しはマシになった気がする。

私が死んだ魚のような目をしながら正面を見ると、そこには……

トカゲのような化け物がそこらじゅうに跋扈していた。

おそらくあれがドongoとやらだろう。

「うわあ……」

私は思わず苦笑いが漏れてしまう。

「れ、蓮子、どうするの……?!」

ここで逃げたら人が廃る。

私は何かに引き止められ逃げようとする足を止める。

「ナビィ、私ん中に隠れてて。」

「えっ?ど、どうするの?!」

私は少し沈黙を返した後、

「……突つ切る!!」

私は剣を引き抜き思い切り走りだす。

「おらあああつ!!!」

私は絶叫をあげながらドドンゴの中に飛び込んでいった。

私は目の前に立ちふさがるドドンゴたちを斬りつけ、どんどんと先に進んでいく。

ここで足を止めたら袋のネズミだ。

それは馬鹿な私でも簡単に理解できた。

「斬っても斬っても減りやしない……!!」

私は憎々しげにそう呟く。

「蓮子・あそこに下に続く穴が……!」

ナビイは私の視線の先に小さな穴があることに気付いた。

「あそこに入れば……!!」

私はドドンゴをぶった斬りながら穴に滑り込む。

すると、私の体は滑りだし、大きなマグマだまりのある部屋に放り出された。

「(ハハ)は……?」

私は息を切らしながら立ち上がる。

すると、ドスン、ドスンと言う音が私の後ろから響く。

「……………」

私が妙な寒気を感じながら振り返ると、そこには先ほどとは比べものにならないほどの大きさのドドンゴがいた。

「れっ、蓮子!あれが「猛炎古代竜 キングドドンゴ」だヨ!!あれがドドンゴの親玉だったんだ!!」

ナビィが声を荒げる。

直後、キングドドンゴは口を大きく開き、エネルギーを溜め始める。

「させるか…………!!」

私はそのまま持っている剣で斬りつけるが先ほどのドドンゴとは違い全く怯まない。

瞬間、ドドンゴのエネルギーが溜まり終わったのか、火球を私に放ってくる。

「!!」

私は反応できずに、モロに喰らってしまった。

「あっつ…………っ!!」

息吸っただけで喉が焼けた……

私はケケケホ、と咳き込む。

「あれはなんでも食べる巨大なドドンゴ。ショックを与えて剣でとどめよ!」

ナビィはそう助言する。

でも、シヨックつつたつて、どうすれば……？

すると、私の脳内にアニキの言葉が蘇る。

「……それをドドンゴの野郎のクチにでも放り込んでやるといいさ！ドカンとかましてやれ！」

そうか……！

私はバクダンを取り出し、マッチで火をつける。

すると、キングドドンゴが私にとどめを刺そうと再び口を開いた。

「このやろ、これでもくらえっ!!」

私は思い切りキングドドンゴのクチ目掛けてバクダンを投げる。

すると、バクダンをキングドドンゴが飲み込む。

刹那、やはりというべきか、腹のなかでバクダンが爆発し、キングドドンゴが怯んだ。

「……いつでとどめっ!!」

私は剣を腰のあたりで構えて、右手で持つ。

「邪聖剣烈舞踏常闇雷神如駆特別極上奇跡的超配管工兄弟式號役立不弟逆襲監督斬つ!!!」

私はそのまま剣を引き抜き剣ポタンで斬りつける。

すると、キングドドンゴはぐるぐると回転しだし、バランスを崩してマグマだまりに

落っこちて丸焦げになってしまった。

「蓮子……。」

なげー……ー……ーよ!!!

いや、凝ってるのは伝わるけど……!」

「まあいいじゃない。勝ったんだから。」

私はまた咳き込み、ゴーマのときと同じように近くにできた光に飛び込む。

「あつ、待ってよ蓮子!」

ナビイも私を追いかけ、私と一緒に光に包まれた……

第7話 暴れ馬、工ポナ登場！

「ふうっ、やっと出てくれたー！」

私は額の汗を拭ってとつていた帽子を被り直す。

「蓮子、喉は大丈夫？」

「え？ああ。うん。一瞬炙られたくらいだから。」

「響きだけじゃ重症だね……」

ナビイはしゅんとする。

あはは、と私が笑っていると、ドスン、と私の真後ろから衝撃がくる。

……もしかして……

私は恐る恐る振り返ると、そこには……

「オレだゴロ！ダルニアだゴロ！よくやったゴロ。これでまたウマイ岩がハラいっぱい食えるゴロ。オメエのおかげだー!!」

ドドンゴ、ではなくアニキは私の頭を乱暴に撫でる。

いや、むしろもうこれ叩いてるな。

「……しかし不思議な話だゴロ……。あんなにドドンゴが増えちまうなんて。それに洞

窟を塞いでた大岩……。それもこれも、きつとガノンドロフとか言うゲルド野郎の仕業だゴロー！」

ガノンドロフ……。やっぱりか。

「あの野郎、精霊石。渡せば洞窟を開いてやるなんてぬかしやがったゴロ。それに比べ、オメエは見ず知らずのオレたちのために危険をかえりみず……。!!」

アニキはうんうんと頷きながらこちらを見る。

「オメエが気に入ったゴロー!今日からオメエとオレはキョーダイだあ!!」

ええ〜?!なにそのダダンからスった酒で義兄弟誓い合おうぜ的な……

「キョーダイの誓いのあかしに、コイツを受け取っちゃあくれねえか!」

するとアニキは赤く輝く石を私に渡してくれた。

「蓮子!それがゴロンのルビーだヨ!ゴロン族に伝わる炎の精霊石!」

……キョーダイだかなんだか知らんが、とりあえず、後一個か……

私は石をしまつて、

「ありがとうございませすダルニアさん。」

「おいおい!ダルニアさんなんて呼ぶな!アニキでいいぜ!それより、キョーダイ。オメエはこれからも自分を磨く旅を続けるんだな?」

いえ、違います。世界救う旅です。アレフガルドでも救つてやろかと。

「さあテメエら！キョーダイをお見送りしろい！！」

アニキがそう叫んだ瞬間、アニキの両サイドにゴロンが現れる。

そして、よくやったゴロ、だとか、オラたちキョーダイ、だとか、言つてこちらににじり寄つてくる。

おそらくハグでも求めているんだらうか。

落ち着け。あんな奴らにハグでもされたら肋骨どころじゃ済まない……。

最悪心臓が押しつぶされる……っ！！

「い、いえ、け、結構です……。邪魔しましたああーっ！！」

私は踵を返して猛ダツシユで下山していった。

気付いたら平原まで帰ってきていたようだ。

「うっ……」

どつと襲いくる倦怠感。

恐らく人生のなかで一番の全力疾走だった気がする。多分。

「慌てて降りてきちゃったネ……。」

ナビイもどうにかついてきていたようだ。

「ねえ蓮子、ノド乾かない? なんか、この辺に、おっきな牧場があるみたいだよ!」

「だからちよつと寄り道していいかない?」

「おっ、そうね……。ちよーど私もノドカラカラ……」

私たちはそう言つて城の近くに見える牧場目指して歩いていった。

私たちが牧場に入ると、程よいまきばの香りが私の鼻孔を刺激した。

なんか、嗅いだことないにおい……

いや、まあ、そんなことより……水、水！なんでもいいから私たちにドリンクを……っ
!!

私とナビイは考えを一つにして母屋に入っていた。

「牧場つて聞いて思ったけど、やっぱりマロンちゃんの牧場だったんだ。」

私の目の前には、城でぐーすかと寝てたとーさんがニワトリに囲まれて寝ていた。

「あの……」

私が声をかけると、

「むにゃむにゃ……はーい、起きてますだーよ。ん？おおつ、誰かと思ったらくないだの妖精お嬢ちゃん！あの時は助かっただーよ。あの後マロンの機嫌を直させるのに苦労しただ。」

そりゃあんなどここにぐーすか寝てりや頭くるわよ……

私は呆れ気味にとーさんを見つめていると、

「と……ころで、何の用だーよ？」

と聞かれ、私は思い出した。

私たちのノドがカラカラで、現在進行形で体の中の水分がぶっ飛んでいることを……

「あの、私たちはさつきまで火山にいて……ノドが渴いちゃったんでここに……」

「そうだかそうだか!ならこないだのお礼と合わせて、これあげるだーよ。」
するとトーさんはビンに入った牛乳をくれた。

「ビンもあげるから、いろいろと使ってくれると嬉しいだ。」

「あ、ありがとうございます……!」

私はトーさんからビンを受け取ったあと、猛烈な勢いでぐくぐく飲み始める。

「……………つかあゝゝつ!!うまいっ!!」

私は半泣きで絶叫をあげる。

風呂上がりの牛乳のようなまさ……!うまい (確信)

「そっちの妖精ちゃんは砂糖水でいいだか?」

「あつ、ナビィ砂糖水ほしい!」

ナビィはトーさんの言葉を聞いてウキウキしだす。

「わざわざこんなところまでありがとう。牛や馬くらいしかいねえけど、ゆつくりして
いってくれ。」

トーさんは牛乳のお代わりをもらった私と砂糖水を摂取するナビィに笑みを送る。

その後、私たちは一通り牛乳と砂糖水を堪能した。

「そうだ、せっかく来たんだから、マロンに会ってやってくれねえだか？マロン、よつぽど妖精お嬢ちゃんのこと気に入ったみたいなんだよ。」

「そうなんですか？わかりました。」

まあ、せっかく来たんだし、挨拶くらいしていいこうか。

「じゃあ、お邪魔しました。」

「うん。またいつでも来ていいだよ。」

とーさんは私を笑顔で送ってくれた。

「ふうっ」

表に出た私の耳に綺麗な歌声が聞こえてきた。

それは牧場の奥から聞こえてきた。

私たちが牧場の奥へと進むと、

「アラ、こないだの妖精ちゃん！とーさん見つけてくれたんでしょ。ありがとう！お城はどうだった？お姫様には会えた？ふふっ！」

牧場の真ん中で歌っていたマロンちゃんが声をかけてきてくれた。

「うん。こっちこそありがとう。おかげで姫さまに会えたよ。」

「そうーよかった。そうそう、とーさんだったら!あのあとすぐ帰ってきたのよ。おおあわてでね……フフフ!」

マロンちゃんそのときの情景を思い出して笑う。

そして、思い出したかのように、

「あ、そうだ!妖精ちゃんに紹介するわ、アタシのともだち……!」

そういうとマロンちゃんは隣にいた馬を見せてくる。

「このウマなの。エポナってゆーのよ。カワイイでしょ?」

マロンちゃんがそう言うと、エポナがマロンちゃんの側を離れて走り去ってしまった。

「あつ、行っちゃった……!」

私がポカンとしたままエポナを見てみると、

「エポナ、妖精ちゃんのこと怖がつてるみたい……。そうだ!この歌、おかーさんがつくったの。いい歌でしょ?マロンと一緒に歌いましょう!」

するとマロンちゃんは私のオカリナに目をつけた。

「あら、カワイイオカリナ!ねえねえ、そのオカリナで、この歌ふいてくれない?」

「え?ああ、うん、わかった。」

マロンちゃんの頼みを聞き入れ、私はオカリナを構える。

「いっ……の歌よ。」

マロンちゃんはそう言つて歌を歌いだした。

そして私も同じメロディをオカリナで奏でる。

なんだか牧場のような安心感のあるのかなメロディが響き渡つた……

よし、覚えた。……たぶん。

「……うわっ?!」

すふと、私の背中に軽い衝撃が走る。

私が後ろを見ると、どうやらエポナが近寄つてきてくれていたようだ。

「よかった! エポナったら、妖精ちゃん気に入つたみたい! この歌吹けば、エポナが心を

開いてくれると思うわ!」

「そう? へへ……、かわいいな……」

まだ仔馬のエポナが私にすり寄つてくる。

私もエポナの頭や首を撫でてあげる。

「それじゃあ、私、そろそろ行くね。」

「そう? うん、わかつた! じゃあまた来てね!」

「うん! きつと来るよ!」

私は手を振るマロンちゃんに手を振り返し、踵を返して牧場を後にした。

ふと、思い出す。

「うーん……、そういえば、精霊石はどこにあんだ……？」

「ねえ、次の精霊石ってどこにあるの？」

私がナビィに尋ねる。

「うーん……、そういえば、精霊石はデスマウンテン、ゾーラ川にあるってデクの樹サマから聞いたことがあるヨ！」

よし、じゃあ次はゾーラ川か。

「ナビィ、道案内お願い。」

「うん！」

そうして、私たちは次なる目的地、ゾーラ川を目指して新たなスタートを切ったのだった……

第8話　ゾーラの王とジャブジャブさま！

「わあ、綺麗な川ね……」

私は思わずそうこぼす。

「ここはゾーラ川。この水が湧くところにゾーラ族は住んでるヨ！」

ナビイは私の周りを飛びながら言う。

私は手で川の水をすくい取り、口に運ぶ。

「うん、凄い美味しい……」

流石の水の綺麗さ。流石の美味しさであった。

「さあ、早く行って精霊石をもらって、姫さまのところに帰ろう蓮子！」

ナビイの一言に私はうん、と答えて、川を遡っていった……

「なんじゃ、こりゃ……?!」

私は真上を見上げる。

私たちの前に立ちふさがっているのは、巨大な大滝。その奥に小さな、人が通るには困らない程度の穴が開いている。

「ねえナビィ。行き止まりじゃないの。」

私はナビィに文句を言う。

「うーん、この先がゾーラの里のはずなんだけど……」

ナビィも唸り声をあげる。

「……?」

すると、私は何かの石板の上に立っているのに気付いた。

そこには三角形が三つ並んだ文様が描かれてあった。

「蓮子、もしかしてこれって、王家の証明ができたら……ってことかな?!」

ナビィの言葉に私ははっとして、オカリナを構える。

そして、私はゼルダの子守唄を吹いた。

すると、滝が割れて、穴が露わになった。

「やった!」

私とナビィは声を合わせる。

そして私たちはその穴に向かって飛び、穴の奥へと入っていった……

「わあ……」

私たちはそんなことしか言えなかった。

そこは水色が美しく輝いているホールのようなところであった。

「よし、とりあえず、親分のところに会いに行きましょう！」

私はそう言つて奥へと入つていった。

私が道なりに進んでいると、魚人のような人に声をかけられた。

「やあ！ボクらは誇り高き水の民、ゾーラ族！君がハイラル王家の使いかい？なんの御用かな？」

「えっと、私は精霊石を探してまして……」

「精霊石……うーん、よくわからないな。とりあえずキングゾーラ様に聞いてみたらどうだい？」

「キングゾーラ?」

私は小首を傾げる。

「うん。ボクラゾーラ族の王様さ。」

ゾーラ族の人は私の質問に快く答えてくれた。

「じゃあ、その人に会えばいいんですね。」

「そうなるね。」

「わかりました。ありがとうございます!」

「あ、そうだ。今はボクラ、姫さま、ルト姫を探しているんだよ。」

「姫さま? 行方不明なんですか?」

私が問うと、ゾーラ族の人は頷いた。

「キングゾーラ様の玉座の裏にはゾーラの泉に繋がる道があつてね。そこに住むジャブジャブさまのお食事のお世話をなさっていたのさ。それが、パツと姿を消してしまわれ
てね。」

「そうなんですか……。」

「うん。あ、そうだ。せつかくここまで来てくれたんだ。とれたてのおサカナをあげるよ。煮るもよし、焼くもよし。」

そう言うゾーラ族の人は私の空き瓶におサカナを入れてくれた。

「あ、ありがとうございます……」

私はそう言って魚の入ったビンをしまい、さらに道なりに進んでいった。

歩いている私の靴に何かがコツンと当たった。

「? なにこれ?」

私は訝しげに蹴飛ばしたものを拾い上げる。

「ビンみたいだね。なにが入ってるの?」

ナビイに聞かれるがまま、私はビンを開ける。

「手紙みたいよ。」

私は手紙を開いて中身を読む。

内容はこうであった。

「助けてたもれ! わらわはジャブジャブさまのお腹の中で待っておる! ルト

追伸 お父様にはナイシヨゾラ!

「……え?」

「……え?」

私とナビイは顔を見合わせる。

「ん?ん?ルト姫が、ジャブジャブさまに、食べられている……う?」

「れ、蓮子、このままだと姫さまは胃液で……」

ナビイの一言で私たちの顔から血の気が引いた。

「やつ、やばい!!」

私たちは慌ててキングゾーラの玉座目指して走っていった。

「はあつ、はあつ、キングゾーラ様、ってあなたのことですよね?」

私は岩の壁に座る一回り大きなゾーラに声をかける。

「あ、ああ。確かに余がキングゾーラだゾラ。」

「とつ、とりあえず、これを見てください!!」

私は大慌てでルト姫の手紙を差し出す。

「なつ、なんと?!余のかわいいルト姫はジャブジャブさまの腹のなかとない?!しかし、我らの守り神であるジャブジャブさまがそのようなことを……?」

キングゾーラは酷く狼狽しているようだ。

「いや、しかし、ここ最近、ガノンドロフとかいう男が来てからは、ジャブジャブさまの

様子がヘンだゾラ。……よし！そちを信じてジャブジャブさまの祭壇に続く道を通してやろう！そちはハイラル王家の使いであろう？ならば尚更信用できる！頼む、余のかわいいルトを救ってくれ！」

流石にドロドロの姫さまなんて見たくないからね……！

「はい、わかりました！行ってみます!!」

私が力強くさういうと、キングゾーラ様は横にずれて道を開けてくれた。

「ジャブジャブさまはこの奥だ！頼む、急いでくれ！」

「よしきたっ!!」

「蓮子！急ごう!!」

そうして、私とナビィは大急ぎで泉へと向かっていった……

「ここがゾーラの泉……」

私は膝のあたりまで水に浸かったまま泉の祭壇に出てきた。そこにはジャブジャブさまと思われる大きな魚がいた。

しかし、ジャブジャブさまは口を閉ざしたままピクリともしない。

「うーん、どうにかして口を開けてもらわないと……」

私が悩んでいると、

「ねえ蓮子。そのおサカナ、あげてみたら?」

「へ?」

ナビイからそんな提案がくる。

いやいやいや。そんな簡単なことで……。

いや、この世界なら簡単なことが案外正解だったりする……

「そうね。物は試しつていうし……」

私はビンからサカナを出して地面に落とした。

すると、ゆっくりジャブジャブさまは口を開けていき、サカナを吸い込もうとする。

「ちよ、ちよ、ちよつと?!これ、私たちも吸い込まれてない?!」

そう。余りにも吸引力が強すぎて、サカナどころか私たちもジャブジャブさまに引き寄せられていた。

ダ○ソンかあれは……っ!!

「も、もう限界……!」

「うわあああああーっ!!」

私たちは耐えられなくなり、吸い込まれるままジャブジャブさまの中へと消えていっ

た
⋮
⋮
⋮

第9話 潜入、ジャブジャブさまの中! v s バリネード

!!

「…………たたく、こやつは…………のじゃ。」

…………なにか聞こえる。なんだろう…………?

確か私、ゾーラの里に来て…………?

そうだ。私はジャブジャブさまにサカナをあげたんだ。それでジャブジャブが口を開けて…………

そうだ、それで食べられて…………

私ははつとして飛び起きる。

「うわっ!」

すると、小さなゾーラの女の子が驚いて尻餅をついてしまう。

「う…………ん…………」

私は頭を抱えて唸る。

「おい、そのほうは何者じゃ?」

「誰かに名前聞くんならまずてめーが名乗んなさいよ。」

「わらわはゾーラのプリンセス、ルトじゃ！」

「ああ。あなたがルト姫？じゃあ話が早いや。あなたのお父さんに頼まれて助けに来たんですよ。」

「なに？お父様に？ふん、そんなこと頼んだ覚えはナイ！」

「じゃああの手紙はなんなんですか……」

「ビンの手紙……、そ、そんなもの知らん！父上が心肺しようがしまいが、そんなことは関係ない！と、とにかく今は帰れん！そのほうこそ、さつさと帰るのじゃ。よいな？」

そう言うルト姫は踵を返して歩いていくが、

「あのー、姫さま？そこ、穴空いてますよ？」

しかし、私がそう言った時には、すでに遅かった。

「あくれ〜っ!!」

「おいいいいいい!!ホントに落ちてどうするーっ?!」

ギャグ漫画じゃあるまいし……!まったく、死んでないわよね……?!

私もルト姫が落ちた穴に慌てて飛び降りた。

「あ、いた。」

私はボソツと呟く。

何故カルト姫はケロツとしていた。

「なんじや、まだおったのか？ さつさと帰れと言ったであろう？ わらわは幼き頃よりジャブジャブさまのなかに入っておるのでへーキじやが……。今のジャブジャブさまはすごーく、ヘンなのじや……。」

他人の心配するより、まず自分の心配しろよ……

「ビリビリするクラゲがいたり、そこかしこに穴があいてたり……。おまけに大事な石まで……。」

「石……?。」

ひよつとして、精霊石かな？

「あ、いや、こつちの話じや。と、とにかく、そのほうはさつさと帰れ。よいな！」

「あの、やっぱり見てて危なつかしいので、私と帰りましょう?。」

「……そんなにわらわのことが心配か？ ならば、特別に、わらわを運ぶ「めいよ」を与える！」

なんじゃそら……

「ただし、探し物がみつかるまでゼーつたいココから出て行かんからそのつもりでな。あ、そうじゃ。「めいよ」のついでに、これもくれてやろう。」

ルト姫は、ブーメランを取り出し、私に手渡してきた。

「……」

私はしばらく無言でブーメランを見つめていた。

また増えちやつたよ子供のおもちやしリーズ……

バクダンとの格差よ……

「さて、と。」

すると、ルト姫は体育座りで座った。

「え?」

私は小首を傾げる。

「なにをしておる、さっさと持たんか!」

えええ……?

まあ、こんなところでいちいち突つ込むのもめんどくさいや。

私は諦めてルト姫を肩車する。

そこまで重くないけど、これじゃ剣が持てないな。

「それ、突撃じゃー！」

「ドラえもんかよ……」

私はそう突っ込んでから先に進んでいった……

しばらく進むと、トゲ付きの台座のある部屋に出た。

すると、台座の上に何か光るものに乗っている。

「おおーあれじゃあれじゃー！わらわが探してあったのは！あそこにおろしてたもれ！」

「じゃあ投げますんで。」

「へ？」

ルト姫がそんな声を出した瞬間、私は姫を台座の上にぶん投げた。

「ぶ、ぶれーもの！もつとテイネイに扱わんか！わらわはブイアイピーじゃぞ！」

「それでもしないとトゲにぶつ刺さるでしょ……」

私は頭をかく。

「それよりも、ようやく見つけたゾラ、母上の石！ジャブジャブさまに飲み込まれてビツクリして落とした時にはどうしようかと思つたゾラ……。さあ、もうこれで思い残すことは何もない！さつさと帰るぞ下僕A！」

「誰が下僕Aですか！私にや宇佐見蓮子つちゆう名前があんの！」

「呼びにくいのうち……。レンコンでいいじやろ。そなたはわらわをテイネイに扱つてくれんかったからのう。」

「誰がレンコンだ！」

くっそ、うぜえ……

「蓮子、あんまりヒートアップしないで……」

ナビイが私を宥めてくるが、私のイライラは収まらない。

すると、がこん、という音とともに台座が持ち上がり、上の階に飲み込まれてしまった。

「な、なんじゃこのタコ?!」

すると、上からルト姫の声が聞こえてくる。

「くっ！」

私は咄嗟に剣に手を添える。

すると、台座が降りてくるが、そこにいたのは、ルト姫とはかけ離れた大ダコであつ

た。

「げっ!」

タコは台座から飛び降りる。

そして、強力な吸引力で私を吸い込もうとしてくる。

「うっ!」

まったく、ダイソンのバーゲンセールね……!」

「こうなったら……っ!!」

私はそう言ってバクダンを取り出し、火をつける。

そして、ニヤリと笑ってからバクダンを手放した。

バクダンはすするとタコに吸い込まれ、タコの体内で爆発した。

その衝撃でか、タコは動かなくなってしまった。

「これがホントのタコ焼き……、いや、焼いてないか。」

私はそう零して、キツと真上を見つめる。

これで上に行けるかな……

そして、私は台座に飛び乗る。

すると、台座は再び上昇し始める。

がこん、という音とともに台座は停止する。

すると、周りにふよふよとクラゲが漂ってきた。

そして、その奥には……

「なんじゃありゃあ?!」

電気クラゲを大量に携えた、巨大生物が居座っていた……!

第10話 遂に揃った精霊石!終わりの始まり…?

「こんにやろ……っ!!」

私は浮遊するクラゲ群に剣を振るう。が、

「あぎやあつ!!」

剣を通して私に電気が流れる。

「くっそく……これじゃあまともに攻撃出来ないぞ……っ?」

「蓮子!あれが電撃旋回虫、バリネード!寄生クラゲが集合した怪物よ!クラゲに守られた本体をねらうの!」

本体、か。

たしかに天井から触手にぶら下がって電気クラゲが張り付いてる球状の物体があった。

どうやらあれがバリネードそのものだと言う。

「にしても、どうすれば……」

私の頭には起死回生の策がどうしても浮かんでこなかった。

瞬間、私の背中などに電気クラゲが張り付いて、一斉に放電しだす。

「うわあああつ!!」

全神経を焼き切るような電撃にどうにか耐え、私はクラゲどもを振りほどく。

「このままじゃ一方的にやられてお陀仏ね……!」

「ねえ蓮子!あのバリネードをぶら下げてる触手、切れないかな?」

「触手を、切る……?」

切るつつたつて、あんなどこに剣なんか届かないし、パチンコじゃ毛ほどのダメー
ジも与えられない……

てことは、必然的に……

「これしかないかあ……?」

子供のおもちやシリーズ第2弾、ブーメラン。いやいやいや、材質はプラスチック
じゃないだろうけど、あんなのであれが切れたら苦勞はないし……

ええい、細かいことを考えるな、宇佐見蓮子!この世界ではなんでもありなのだ!

私はそう結論づけ、ブーメランを構える。

やはりというべきか、ブーメランの向かっていく道筋が今の私にははつきりわかっ
た。

私の立場が勇者さまに成り代わったからなのかはわからないが、とにかく、これだ

……

私は落ち着いてブーメランを構え、投擲する。

すると……

ズバァン、という剣で切ったかのような音が響き、バリネードの触手が落ちてきた。

「嘘?!」

マジかよ……

私は少しの間呆気にとられていた。

が、そこで首を振って気合を入れ直し、剣を構える。

すると、バリネードは電気クラゲを分離させ、電気の糸でくくりながら電気クラゲを振り回し始めた。

「どうにかかいくぐっていかないか……!」

私はダンツと地面を蹴って電気クラゲをかいくぐり、

「邪眼の力を舐めるなよ……!喰らえっ!!邪王炎殺剣っ!!!」

私はそう叫び、剣を右上段に振りかぶり、そのまま斜めに振って、バリネードの本体を切り裂いた。

「蓮子……、またパクリ技じゃない。それに、もう一つの小説で幽☆○☆白書やってるんだから、自重しようよ……!」

しかし、またまたナビイに呆れられてしまったようだ。

「ま、いいじゃない。私もこれ被らないように毎度毎度考えるの大変なのよ？」
「だったら使わなければいい話じゃ……」

ナビイは私に聞こえないようにボソツと言った。

「お、おい！」

「？」

私が声のした方へ振り向くと、そこには光の中で座っているルト姫の姿があった。

「あ、無事だったんすね。」

私は淡白にそう言う。

「お、遅かったではないか！何をしておったのじゃ、こ、この、役立たず！」

「……ちよつぱり、心細かったゾラ……」

うわあ、典型的なツンデレですね、わかります。

男は落とせても私はそうはいかんぞ、こんにやろう。

「はいはい、ご心配おかけしました。」

「……ブーメラン、お陰で、助かりました。」

「蓮子、人のこと言えないネ。」

「うっさい！」

私は顔を赤らめて言う。

そして、私たち3人は、光に飲まれていった。

気がつくのと、私たちはゾーラの泉の流木の上に立っていた。

ルト姫がガン見していたが。

お陰で私は木から滑り落ちて泉に転落してしまった。

「そなた、カツコよかったゾラ。……ちよっぴり、だがな。助けてもらったのだ。なにか礼をしてやってもよいぞ。そうじゃな。そなた、精霊石を集めているのじゃろう?」

「ええ。まあ。」

「それじゃあ、そなたに託すとしよう。わらわの宝物、ゾーラのサファイアをな。」

「これはわらわの夫となるものに渡せ、と母上より授かったもの、いわゆるえんげーじりんぐ、というものじゃ。」

ん?

いやいやいや！私は百合婚とかまっぴらだかんね？！

……なんか、全国の百合ファンに喧嘩売った気がする……

「なんじゃ？そなた、わらわがぶろぼーずで送っていると思うておるのか？」

「いや、そういう意味じゃ……？」

「んなわけなからう。貸すだけじゃ。後で返してもらおうぞ。まあ、そなたになら、そなた用のえんげーじりんぐとしてやつてもよいがな。レンコン。」

「レンコンじゃない、蓮子だ。」

何回言えばわかんだよ、まったく。

「ではな、レンコン！父上には、ナイシヨゾラ！」

「だからレンコンじゃないっての!!」

すると、ルト姫は居なくなってしまう。

「…やれやれ、仕方ないな。」

私は水からあがって、服の水気をとる。

「……透けてたりしないよね？」

うん、見た感じは大丈夫そうだ。

「さあ、蓮子！これで3つ、揃ったね！」

「うん、早く姫さまのところに戻ろう！」

私はそう言っただけでハイラル城に向かって走っていった。

「ふうっ、すっかり暗くなっちゃった……」

時刻は夜。小雨が降っている。

なんとか私はゾーラ川を下り、ハイラル城、城下町に差しかかろうとしていた。いざ入ろうとしたその時、白馬が私の目の前を通り過ぎていった。それに乗っていたのは、なんとゼルダ姫とインパさんであった。

「あ、ちよつと、姫さま!!」

私が声を荒げたにもかかわらず、白馬は止まらなかつた。

すると、姫さまは何かを言った後、何かをこちらに投擲してきた。

私はそれをなんとかキャッチする。

それは、青いオカリナであった。

「なにこれ……?」

すると、猛烈な寒気を感じ、私は咄嗟に振り返る。

するとそこには、ガノンドロフが黒い馬を駆り、ゼルダ姫を乗せた白馬を追いかけようとしていたのだ。

「ちっ、逃したか!」

ガノンドロフは憎々しげに呟く。

雨はいつそう激しくなってくる……

直後、ガノンドロフは私に気づいたのか、私を睨み、

「その小娘! 今白馬を見たらう。どこへ行ったか教えてもらおうか!」

「嫌だ、と言ったら?」

私はそう言つて剣を構える。

「庇い立てする気か。いいだろう!」

そう言つたらと思うと、ガノンドロフは左手を私にかざし、強烈な魔法を繰り出した。
「うわあっ!!」

私は盾で防ぐ暇もなく、城のお堀にぶち当たつて、そのまま気を失つてしまった。

「小娘、俺の名前を覚えておくがいい! 俺の名はガノンドロフ! 世界の支配者になる男だ!」

ガ
ノ
ン
ド
ロ
フ
は
そ
う
言
っ
て
走
り
去
っ
て
行
っ
た
…
…
…

蓮子大人編

第11話　そして7年後！未来で目覚めよ、宇佐見蓮子

！

「う、ん……」

「いったあ……！」

「私は重い体をなんとか起こす。

気が付いたら日が昇っており、太陽がカンカンと大地を照らしていた。

「れ、蓮子！大丈夫?!」

すると、ナビィが私に近寄ってくる。

「う、うん、まあね。」

「私はぎこちなく返事をした。

「それにしても、あいつ……」

あいつの出してきた魔法弾のスピードに全く反応できなかった。

それに加えてこの威力。まだ正面から喰らったお腹の部分がズキズキと痛む。

「姫さまもいなくなっちゃうし、どうすれば……」

私が途方に暮れていると、ナビイが

「そういえば蓮子、あの時お姫様が投げたの、まだ持つてる?」

?

ああ、確かにあの時にかキャッチしたような。

私が懐を見ると、青いオカリナがそこにあつた。

「これが姫さまの残したものののかな……?」

すると、私の頭の中に誰かの声が響いてくる。

「蓮子、聞こえますか? 私です、ゼルダです!」

なんだろう、これ? ゼルダ姫の、イメージ? それとも、記憶……?」

「あなたがこのオカリナを手にしたとき、私は既にあなたの前からいなくなっているでしょう。あなたを待っていたかったけれど、もう間に合わない……。せめて、このメロディを、時の扉を開く音を、オカリナに込めて送ります。」

すると、ゼルダ姫はオカリナを吹いて、あるメロディを演奏した。

私の中にその音は自然と入ってきて、私は無意識にオカリナを構え、それを復唱した。

「さあ、時の神殿の石版の前で、この時の歌を! トライフォースはあなたが守って!」

それだけ言い残して、ゼルダ姫は消えてしまった。

「……、んこ、蓮子、ちよつと蓮子、聞いてるの?!ボーツとしちやつて……」

私の意識は、私の頭をどつくナビイの声で引き戻された。

「あ、あれ?!私は確か姫さまと……」

「ゼルダさまはもう行っちゃったヨ。それより、どうするの?」

「……これで、時の扉を開く。そんでもって、トライフォースは私が手に入れる。そしてあいつともつかい戦う。」

私は決意を込めてナビイに言う。

「えっ、もしかして、それがゼルダさまの言ってた時のオカリナなの?!」

ナビイの問いに、私は力強く頷く。

「そうと決まれば一直線よ!さあて、ナビイ、行きますか!」

「うん!」

私は両方のほつぺたをぺしんと叩いて、すつくと立ち上がり、時の神殿へと駆けていった。

「ここが、時の神殿……、案外しんみりしてるわね……」

私は周りを見渡しながら言う。

本当に西洋の神殿のような場所だった。

奥にぼつんと扉と台座があるだけ。

とりあえずここに石を置いて、と。

私は慎重に精霊石を収める。

「あとは、時のオカリナを吹くだけだネ!」

「よし、いよいよ神さまの道具とご対面ね!」

そう言っつて私は時のオカリナを構え、時の歌を奏でた。

すると、扉はゆっくりと開いていく……!!

そして、徐々に神殿内部の構造が露わになっていく……

「あれ、なによこれ。剣が刺さってるだけじゃない。」

なんと、中身はただ剣が刺さってる台座がぼつんとあるだけだった。

「れ、蓮子!あれ、ただの剣じゃない!あれは、伝説の剣、マスターソード!!」

なんて？ウスターソース？

「引き抜けてこと？」

「うん！今の蓮子なら抜けるヨ！ナビイそんな気がする！」

いよいよ本当に勇者さまみたいになっちゃったな……

そう思案して私はマスターソードの持ち手に右手、左手の順にかけて、思い切り引き抜く。

すると、マスターソードは見事抜けて、私は光に包まれた。

あーあ。遂に私も勇者さまね。ロトのつるぎを取ってしまったぜ……

直後、真っ白になった私の視界に突如ガノンドロフが現れる。

「なっ?!」

私は咄嗟に身構えようとするが、うまく体が動かない。

「くつくつく、ご苦労だったな小娘！俺の思った通り、時の扉の鍵はお前が握っていたか

……。お前がこのオレを聖地に導いてくれるとは……。感謝するぞ小娘。」

「ちよつ、おいあんた！導いたってどういう……。?!」

するとガノンドロフは私の質問に答えることなく、高笑いをしながら消えていった

……

「くそつ、待てっ!!!」

私が叫んでも、どんだんガノンドロフからは遠ざかっていってしまおう。

「……………あれ?」

私は、突然どこか神秘的な場所で目覚めた。

すると、私の目の前に、髭を蓄えたおじいちゃんがいた。

「……………えと、誰です?」

「……………ワシの名はラウル。その昔時の神殿を作り、聖地との道を繋ぎし者じゃ。ここは賢者の間。聖地の要である光の神殿に残された最後の砦……………」

ラウルと名乗るおじいちゃんの喋り方に、何か既視感を私は覚えた。

「あれ、あなたって、もしかして……………」

「……………もうバレてしまったか。そうじゃ。ワシがあのでクロウじゃよ。」

「やっぱり。」

私は目を細めてそう零す。

「しかし、お前は時の勇者としてはまだ幼すぎたのだ。」

うん、まあ9歳前後ならね。それでマスターソードさまが私をわざわざ大人にしてくれたと!つかあ、気がきく剣ですなあ!流石聖剣さま!

「それ故に、お前の魂は7年もの間眠り続けたのだ。」

.....

.....

.....

.....

.....

.....は?.....7年?眠り?続けた?

「じゃあつまり、今は、7年後の世界.....?」

「そうだ。お前の体は現在18歳ほどになっている筈だ。」

あれ、じゃあつまりさっきまでの私は11歳だったのね。

にしてはチビだったような.....

って違う違う違う!そんなことじゃなくて!あの一瞬で7年時間経過したわけ?!

シャボンディだったら完全に大遅刻だよ!もうゴムゴムさんは海賊王になってるよ

!

幽遊白書ならもう螢子との約束破りまくってんだけどおーっ?!

私があんぐりしたまま虚空を見つめていると、

「そして、時の勇者としての目覚めの時が、来たのだ。」

いや遅くね?! ヒーローは遅れてやってくるものだったって限度があんだろ?!

「悲しいことに、お前がハイラルの平和を願って開いた時の扉にお前が封印されているのをいいことに、あろうことかガノンドロフが侵入し、禁断の聖地に足を踏み入れたのだ! そして聖地の中心でヤツはトライフォースの力で魔王となった……」

ちつくしよ……、あんにやろう私が寝てるのをいいことに好き放題やりやがって……!

「その強大な力でヤツは僅か7年でハイラルを魔物の国に変えてしまった……。もはやワシの力が及ぶのもこの賢者の間のみ……」

なんてこった……。世界を救おうとしたら逆に滅ぼす手助けをしちゃったなんて……!

「しかし希望はある! 我らには賢者の力がある! 7人の賢者が目覚めし時、賢者の力はすべての悪を彼方に封じ込める。かくいうワシもその1人だ。賢者共に戦う、それが時の勇者なのだ。」

「つまり、あと6人必要ってことですか。」

「そうだ。……、蓮子よ、お前はこの世界の間人ではない。違うか?」

「……!!ええ、その通りですよ。」

「当てやがった……!デクの樹サマみたいな力もあるのかな?」

「お前の記憶の蓋は、時の扉とともに開いた筈。もう、全てを思い出しても良い頃であろう。」

「なにを言ってる……?」

瞬間。私の頭に激痛が走る。

「あつ、うう……!!」

「蓮子!大丈夫?!」

「……くっくっ!!」

私は声にならない絶叫をあげる。

「……はっ、はっ、はっ……」

しばらくして、私は肩で息をしながら再び正面を向く。

「そうだ。全部思い出した。」

メリーのこと。秘封倶楽部のこと。

「そうだ、私、あの時あの男に絵の中に入れて……」

メリー。メリー。マエリベリー・ハーン。私の親友。かけがえのない親友。

それを私は、放っておいたままこんなに……

「どうやら思い出したようだな。では聞こう。蓮子。今のワシの力ならどうにかお前を元の世界に返すことが可能だ。ただし、肉体は子供のままだがな。どうする？ 本来ならここにいるのはお前ではない。お前に逃げる権利はあるのだ。」

.....

.....

.....私は、

「私は、残ります。」

「えっ?」

すると、ナビイが不思議そうに私を見つめる。

「どうして? 記憶が戻ったのなら、蓮子は蓮子のいるべき場所に帰るべきだよ!」

「たしかに私は向こうに待たせてる人がいる。でも、私のせいでこんなにしてしまった世界を放っておいて、のこのご自分の世界になんて帰れない。そんなことしたらメリーに怒られちゃうから。……それに、こんなどうしようもない私でも、まだ守れるついでうんなら、私は最後まで足掻き通します。あいつには、まだ借りを返してないし。」

私の返答に、ラウルさんはそうか、と言って、

「お前は、心優しいのだな。」

「そんなことないです。ただの捻くれた臆病者ですよ。」

「蓮子、マスターソードに認められた勇者よ!我が光をその身に宿し、賢者の力を我がものにせよ!」

ラウルさんはそう叫ぶ。

すると、私の手の中に黄色のメダルが現れる。

「光のメダル……。賢者が復活した証だヨ!」

「蓮子よ、6人の賢者を蘇らせ、ハイラルを救うのだ……」

ラウルさんがそう言うと、私の意識はどんどん遠のいていった……

第12話 森の神殿!! 決戦、ガノンドロフ?!

「ん……………」

私が次に目を覚ますと、そこは時の神殿のマスターソードの台座の前だった。

そうか。帰ってこれたのか。

そう私が思案していると、

「蓮子……、時の神殿に戻ってきたね。ほんとに7年も経ってるのかな?」

「どうだろ。でも私も大人に戻ってるからな。多分、おそらく、きつと。お前が思うんならそうなんだろう。お前ん中ではな。」

「蓮子、なんか脱線してない…………?」

すると、ナビィがあることに気づく。

「あれ? 子供の時使えたのに使えなくなった武器があるみたい…………」

ん……………」

たしかに、なんか持てないな………… 子供のオモチャシリーズ。

まあ、子供のオモチャシリーズだからね。もう蓮子さんは立派な大人だからね。

「とりあえず、出るしかなさそうね。」

「そうみたいね。んじゃあ、出ますか。」

私がそう言つて踵を返して出て行こうとすると、

「!!」

私は何かの気配を感じとり、すぐさま私の背後に剣の切っ先を向ける。

「……待っていたよ時の勇者……」

「あんた……何者?」

そいつは私の問いに答えることなく続ける。

「世界が魔に支配されし時、聖地からの声に目覚めし者たち、5つの神殿にあり。1つは深き森に。1つは高き山に。1つは広き湖に、1つは屍の館に。1つは砂の女神に。目覚めし者たち、時の勇者を得て魔を封じ込め、やがて平和の光を取り戻す。我らシーカー族に残る神殿の言い伝えだ。」

シーカー族……聞き覚えがあるような無いような……

「ボクはシーク。シーカー族の生き残りだ。伝説の聖剣、マスターソードを持つ者……、それが時の勇者。君が言い伝えを信じるなら5つの神殿を探し、5人の賢者を目覚めさせる他ない。」

ん? ちよつと待て、5人? ラウルさんは6人とか言つてたような……

まいつか。

「今、森の神殿でひとりの賢者が目覚めの時を待っている。君もよく知る少女だし、神殿に巣食う魔物の力で、聖地からの声をその少女に伝えることは不可能だ。それに今の君には神殿に入ることすらできぬはず。これを持っていけ。」

するとシークは私に謎の装置と弓矢を渡してきた。

「何よこれ。立体機動装置？」

「蓮子、ここはイエーガーするところじゃないよ……」

ナビイも呆れ気味だ。

「それはフックシヨット。固形物に引っ掛けたりするとそこまで移動できる優れたものだ。」

「ふうん。」

正直私にとっちゃこんなのもよかった。

そう。ついに子供のオモチャシリーズ、パチンコの上位互換が手に入ったのだから。

弓、矢!!

これぞ戦士って感じよね!

「それと、ここからではそんな盾では心元あるまい。これも持っていけ。」

すると、シークは私に鉄製の盾を渡した。

「おお……!」

ずっしりとした重み。

早速左手につけてみる。

しっくり来る、この素晴らしさ……っ!!

便利屋かこの人は。

「……まあ、ありがと。それで、まず森に行けばいいのね?」

「そうだ。」

シークはそれだけ返す。

「よし、ナビィ、ちゃつちやと賢者復活させて、イエーガーするわよ!」

「ごめん蓮子、わけがわからないよ……」

「そんなのどーでもいいでしょ?!ほら、行くよ!」

いつものように漫才を繰り広げながら私とナビィは歩いていく。

「……………」

その後ろ姿をシークはずっと見つめていた……………

神殿の外の光景。

私は思わず息を飲んでしまった。

「なによ、これ……」

そこには7年前（自分としてはほんの数分前）とは違いすぎる光景だった。

町はぼろぼろで、いたるところから煙が吹き出している。

かつ、暗い雲に覆われていて、かつてハイラル城があったところには、大きな浮遊す

る城があった。

ああ。あれがラピユタか。

悲報 ガノンドロフはムスカ大佐だった

つてな感じ。

「面影が全くないわね……」

「うん……。まあとりあえず、コキリの森に戻りましょ！」

ナビイの言葉に私は頷き、走っていった。

「疲れた……」

ハイラル平原のおおよそ端から端。丸一日かけてようやくコキリの森に帰ってきた。

「7年ぶりの里帰りね。私にとっちゃ故郷じゃないけど。」

「それにしても蓮子、あなたがあんなに寝相悪かったなんて思わなかったヨ……」

「へ?」

「いや、寝てる時にいきなり「ダイナマイト四国」だとか言いだしたり、寝返りうつてそのまま転がってつて岩に激突したり……、それでも蓮子は起きなかつたヨ……」

「私ってそんな寝相悪いかなあ」

「ほりほりと頭をかく。」

「悪いってくくりじゃないヨ蓮子!酷すぎるよ!!」

「はいはい。悪うございました。」

ナビィの愚痴を受け流し、橋を渡って、遂にコキリの森に戻ってきたら、

そこは魔物が跋扈している里へと変貌していた。

「うそ……?!」

「まさか、神殿の影響がここまで……?!」

私とナビィは顔を見合わせる。

「とりあえず、森の聖域に急ごう!」

「うん！」

そう言つて私たちは迷いの森へと入つていった。

「な、なんだオマエ！」

私が森の中を走り回つてしていると、聞き覚えのある憎つたらしい声私の耳に入つてきた。

「そんなコキリつぽい服着たつて騙されないゾ!!」

忘れもしない。あのクソガキだ。

今こそ、大人のお姉さんを怒らせたらどうなるか教えてやろうか、と思つたけど、今は神殿が優先ね。

つてか、全然コキリつぽくないぞこの服……

そういうやデクの樹サマがこの服でも違和感ないように改ざんされてるつて言つてたっけ……

「オイラ、サリアと「やくそく」したんだ！ここは誰も通さない！どーしてもサリアに会いたいつてんなら、オマエがサリアとともだちつていうショーコを見せるヨ!!ま、オマエみたいな大人にはムリだろうけどな！フンツ!!」

……

無意識に剣に手が伸びそうになる。

「蓮子、抑えて抑えて。」

が、ナビイのおかげで平静を保つことができた。

「じゃあこれで通してくれる?」

私はオカリナを構えてサリアの歌を吹いた。

「……それ、サリアがよく吹いてた歌だ。オマエ……サリア知ってんのか?!」

「もち。」

「その曲……、サリアが友達だけに教えてくれる歌なのに……。わかった。オマエ信じ

る!」

なんだ、聞き分けいいじゃない。見直したわ。

「……オマエ見ると、なんだかアイツを思い出すよ。」

……

「そいつは、あんたにイライラしながらいつかきつと帰ってくるわよ。」

「……?それ、どーゆー意味だ……?」

「さーね。自分で考えな。」

私はそれだけ言って奥へと進んでいった。

「……………」

帰ってきた。サリアとの思い出の場所。森の聖域。

なんか、道のりは今までと随分様変わりしてたけど……

すると、私の目にサリアが座ってた切り株が飛び込んできた。

「サリアが……いない……？」

私がそうこぼした瞬間、追いかけてきたのか、シークがどこからともなく現れる。

「なによ。敵かと思ったわ。もっと穩便に出てこられないわけ？」

「構うな。」

シークはそれだけ言って続ける。

「……時の流れは残酷なもの。人それぞれ速さは違う。そしてそれは止められない。時が流れても変わらぬもの、それは幼き日の追憶。」

私もメリーとの約束があるからね……。なおさらこんなところでガメオベラになれないな。

「思い出の場所へ誘う曲、森のメヌエットをお前に託そう。」

するとシークはハーブを取り出し、メロディを奏で始める。

敵かなメロディが響き渡った……

うん。覚えた。……おそらく。

「では蓮子。また会おう!」

そう言っつてシークは数は後ずさりして、地面になにかを叩きつけ、消えてしまった。

……忍者かあいつは。

「……そうか!」

それで思い出した。あいつ、インパさんに似てるんだ。そういやインパさんもシーク一族だったっけ……

なるほど。似てるわけだ。

さて、と。

私は貰ったフックショットを構えて神殿入り口の壁に突き刺し、そのまま登る。

そして、神殿へと入っていった……

町外れの無人の館、そこにはお化けが出るといふ噂があった……

「中は思ったより綺麗ね。」

「なんだか寒いヨ……、ね、ねえ蓮子、もう帰らない?」

「なによナビイビビってんの?」

「………つてか待って。これ偉い人に怒られるヨ……」

「?なんで?」

「気付いてるでしょ?!もう!」

プンスカと怒るナビイを尻目に、私は奥へ奥へと進んでいく。

すると、エレベーターがあった。

「なんで神殿にこんなハイテクなものが……」

あー、ダメだダメだ。突っ込んだら負けだこれは。

仕方なくエレベーターに乗り込み、地下に進んでいく。

すると、大きな絵画が壁にたくさん飾ってある部屋にたどり着いた。

「なんだかあの美術館思い出して嫌になるわね……」

あの男、誰なんだろ。自分のことを親戚とか呼んでたし。

私が高台の上に乗って絵を見てると、入り口が塞がれる。

「?!」

すると、聞き覚えのある笑い声が後ろから聞こえてきた。

私が後ろを振り返ると……

「が、ガノンドロフ……?!」

そこには、ガノンドロフが馬に乗って私を見下ろしていた……

第13話 激戦ファントムガノン！賢者、目覚める！！

「ガノンドロフ……！！」

私は憎々しげにそう呟く。

「フッフ……………」

ガノンドロフの顔を見ると、ガイコツのような面のようなものをつけていた。

「あ、あれは異次元悪霊ファントムガノン！！」

ナビイは声を荒げる。

「ファントムガノン……………」

私がそうこぼした瞬間、ファントムガノンは私の左後方の絵の中に飛び込んで行った。

「絵の中?!」

私が慌てて後ろを振り返ると、そこには絵の中の道を奥へと進んでいくファントムガノンの姿があった。

「嘘?!」

ファントムガノンは絵の中に入って行って消失してしまった……

「なによ。逃げちゃったじゃない。」

私がつつぶつ文句を言いながら剣をしまおうとすると、

「れ、蓮子!後ろ後ろ!!」

なによ。私は志村じゃないんだからそんなにコント風に言わんだっちゃ……

すると、位置的に私の真後ろに位置する絵から、ファントムガノンが飛び出し、私に攻撃を仕掛けてきた。

「!?!」

私は反応できず、もろにくらってパーテーションポールに叩きつけられてしまった。

「いっ……たあ……!!」

私の額から血が滲む。

明らかに重い。子供時代の奴らより……

「くっ、そ………!!」

私はなんとか立ち上がり、剣を構える。

が、既にファントムガノンは再度絵の中に消えていた。

「どこだ……、どこから来る……?」

すると、一枚の絵をだけに、道の奥から馬に乗ったファントムガノンが駆けてきているのが見えた。

「あれだ!!」

私は咄嗟に弓矢を構え、矢を番えてまっすぐファントムガノンの馬を狙う。

そして……

「蓮子、出てきたヨ!!」

「今だっ!!」

私はそう言つて矢を放つ。

瞬間、私の放つた矢はファントムガノンの馬の脳天を貫いた。

瞬間、馬を切り捨てる決断をしたのか、ファントムガノンは浮き上がり、杖に光を溜める。

「さあて。これでタイマンね。ケリつけましょう。」

私も剣と盾に持ち帰る。

マスターソードとハイリアの盾だ。

ファントムガノンは杖に溜めた光を私に放ってくる。

「ちっ!!」

私は咄嗟に盾を構える。

が、盾に着弾した瞬間、私の体に盾を通して激しい電流が流れてくる。

「くっ、盾じゃ防げない……!!」

「蓮子、大丈夫?!」

「うん、大丈夫大丈夫。」

私はケヘケホと咳き込んでから立ち上がり、盾を投げ捨てる。

「ちよ、蓮子?!盾捨てちゃっていいの?!」

「後で拾うからいいの。あいつとの戦いにとっちゃ、盾は邪魔だかんね。」

「……さあて。第二ラウンド始めようか!」

私は剣の切っ先をファントムガノンに向ける。

ファントムガノンは再び杖に光をを溜め始める。

勝負は、ヤツの弾を弾き返す!それっきゃない!!

私がそう思案した瞬間、ファントムガノンは再び光をはなつ。

今だ!!

私はマスターソードを横に薙ぐ。

瞬間、ファントムガノンの光弾は見事弾き返され、今度はファントムガノンを襲った。

光弾が着弾したファントムガノンはよろよろと地面に降りてきて膝をつく。

「ふっ!!」

私は剣を乱暴に振り回してファントムガノンを連続して斬りつける。

しかし、ファントムガノンは再び浮き上がってしまう。

そして、再び光弾の発射準備をする。

「蓮子、もう一押しだよ！」

よし……!!

瞬間、ファントムガノンは再び光弾を放つ。

私もそれを剣で跳ね返す。

が、ファントムガノンもそれを弾き返す。

「くっ!!」

私は少し気が動転したが、再び持ち直し、剣を再び振る。

そんなラリーを数十回続けた先、ファントムガノンがミスしたのか、光弾が命中した。

「こいつで終わりよ!!」

私は飛び上がり、両手でマスターソードを持つ。

「ヒテンミツルギスターイル!!」

「ちよっ……」

ナビイがツツコミを入れようとするが、私はもう止まらない。

「龍槌!!」

私は重力落下のスピードで斬り、

「翔閃!!」

剣を瞬時に持ち替え、アッパーのようにファントムガノンの顎を捉える。

「に、2連撃! いけるヨ蓮子! この機を逃す手はないわ!」

「龍巻閃 凧!!」

「旋!! 嵐!!」

私はさらに連続でファントムガノンを斬りつける。

「ぐ、5連撃!!」

ファントムガノンは耐えきったのか、再び地に足をつける。

「…………!!」

私は足に体重を乗せ、ファントムガノンの元へ飛んで、

「飛天御剣流…………っ!!」

「を取り寄せえええええー……っつ！！！！」

私は九頭龍閃を放つ。

9つの斬撃が全て命中したのか、ファントムガンは後方に吹き飛ばされ、壁にめり込んだ。

「CCOザマア、速達だぞコノヤロー」

私はそう言つてニヤツと笑う。

「うっ……」

瞬間、私は膝から崩れ落ちる。

実際、ふざけて飛天御剣流をやったまではいいんだけど、それ以前に受けたダメージが大きいな……

「れ、蓮子、やったね!!」

「うん。だいぶ疲れたけどね……」

すると、めり込んでいたファントムガンが青い炎に包まれる。

直後、本物のガノンドロフの声が響いてくる。

「小娘、なかなかやるな。少しは腕を上げた、というわけか。」

「これがあんたへの宣戦布告の速達よ。受けとんなさい。」

「だが、お前が倒したのは所詮俺の幻影にすぎん。俺と戦う時、こうはいかんぞ!!…それにしても不甲斐なきやつだ!次元の狭間に消え去れい!!」

すると、ファントムガノンは苦しみながら灰と化してしまった。

「ザマアみなさい……!」

私は額の血を擦って拭き取る。

「これで賢者が復活するのかな?……賢者が誰なのか、だいたいの目星はついてるけど。」

「うん。多分ね。それじゃあ行こう!」

そして、私たちは、また光に包まれていった……

第14話　ゴロンの英雄と炎の邪悪！

……私は、また時の神殿で目覚めたときと同じ場所で目覚めた。

「蓮子、賢者の間に出たみたいだよ。」

「うん。みたいね。」

すると、目の前にあつた緑の模様がある台に、ひとりの少女が現れた。

「……やっぱり、あんただったのね、サリア……」

私の言葉に、サリアは深く頷いて、

「ありがとう。あなたのおかげで賢者として目覚めることができました……。私はサリ

ア。森の神殿の賢者……」

「そんな改まって話さなくてもいいのに。」

あ、そうか。私が大人になってるからわかんないのかな？

「きつとあなたが来てくれると信じてたわ。だってあなたは……。」

サリアは何か言いかけたが、首を振って、

「ううん、何も言わないで。あなたと私は、同じ世界では生きていけない運命だもん

……」

……そんなに悲しそうな目をしないでよ。サリアらしくもない。

「サリアは森の賢者として、あなたを助けていくの。さあ、このメダルを受け取って。」
すると、私の手の中に緑色のメダルが現れた。

「それは森のメダル。賢者が目覚めた証だヨ！」

直後、私の意識にどんどん靄がかかってくる。

「サリア……また、お別れなの？」

私が尋ねると、

「ううん。きつとまた会えるわ。大丈夫。サリアは、ずっとずっと、あなたの友達だから
ネ……」

サリアがそう言った途端、私の意識は完全に暗転した。

「ん………」

私は目を覚ました。

どうやらデクの樹サマの前に出てきたらしい。

すると、ナビィが何かに気づく。

「あれ？デクの樹サマの前に、なんか生えてるヨ？」

「あ、ほんとだ。なんだこれ？」

私が顔を近づけてみてみると、

急に植物が生えてくる。

「うわっ!!」

「ボク、デクの樹のこどもデス！君とサリアが森の神殿の呪いを解いてくれたから、ボク、生まれてくることができたデス！本当にありがとうデス！」

「え、ええ。はあ。」

私は半分くらい何が起こってるのかわからないまま返事をする。

「昔の仲間には出会ったデスカ？みんな大きくなった君に気づかなかったデスね。」

うん。サリアを除いてはね。

「それもそのはず。コキリ族は大人にならないまま返事をする。7年経ってもこどものままデス。」

つてことは、私の元々のポジションにいる人は……

「そうデス。おおかた察しはついてると思うデスけど、君はコキリ族じゃないんデス。」

「君は本当はハイリア人。その秘密をいつか話すことが、ボクの使命だったんです。」

「昔。ハイラルの統一戦争があった頃。戦火を逃れるため、ハイリア人の母親と赤ん坊が禁断の森に逃げ込んだデス。深い傷を負っていた母親は、森の精霊、デクの樹に我が

子の命を託したデス。」

なるほど。その赤ん坊、それが私のポジションってことか。

なんか、めんどいポジションについてちやっただわね……

「母親が息をひきとったあと、赤ん坊はコキリ族として育てられ、ついに運命の日を迎えたのデス!!」

「君はもともとハイリア人。いつかこのコキリの森を出て行く運命だったのデス。自分の宿命を知った今、君にはやることがあるのデス。」

そうね。あいつに負けっぱなしは嫌だし、私がこんなにしてしまったハイラルは、私がかんとかしなきゃ。

「…………ボクから言えることはこれだけデス。さあ、蓮子。全ての神殿を解放し、平和を取り戻すのデス!!」

「ありがと、デクの樹さま。お陰で気が引き締まったわ。」

よし、と帯を締め直せた。

「そうだ、蓮子。このこと、シークさんに報告したら?」

「それもいいけど、どこにいるのかな?」

「…………多分、時の神殿に行けば会えるヨ!」

「うーん、ほんとでしようね…………?」

それで、私は渋々時の神殿へと向かっていった。

時の神殿。マスターソードが刺さっていた台座の横に、シークが立っていた。

「……………待っていたよ。神殿に取り憑いた悪霊を浄化し、賢者を目覚めさせたんだね。」

「お陰で大事なもん一個失ったわ。ま、すぐ取り戻せたけどね。」

「……………そうか。だが、君を必要としている賢者はまだいるはずだ。そのため、君はまだ強くならなくちゃあいけない。時には時間を遡った方がいい時もあるだろう。」

「ならば、時の台座にマスターソードを刺せ。そうすれば7年の時を遡ることができだろう。」

なるほど。剣を戻せばいいのか。

「蓮子、君はいずれここに帰って来なければいけない時がくる。その時のため、このメロディを授けよう。時の神殿へと帰還のメロディ、光のプレリユードを。」

すると、シークはハープを取り出し、奏で始めた。

希望が持てそうなメロディが響き渡った。

うん。覚えた。 maybe.

「時のオカリナとマスターソードがある限り、時は君の中にある。では、蓮子、また会お

うー！」

シークはそういって再び地面になにかを叩きつけ、いなくなってしまった。
……そうしないと帰れないのか……？

「それで、蓮子、次はどこへ行くの？」

そうね……

「……デスマウンテン行く？」

「そんな喫茶店感覚で言うの……？」

「そんなんじゃないわよ。」

「ただ、私の勤がここへ行けって言ってる！」

私はそう言っって走り出した。

……ゴロンシティ。帰ってきた。

……そういえば、こどもの時逃げ帰ってから一度も来てなかったな。

そこで私たちはある違和感に気づく。
ないのだ。人氣が。

「おかしいわね。こんなにしんとしたっけ？」

「ううん。もう少し活気があつたはずだよ。」

「!!」

すると、なにかが私に向かって突進してくる。

私は咄嗟に右足を突き出してその回転を止めようとする。

数メートル下がったのち、ようやくそれは止まった。

「よくもやったなコロ！ガノンドロフのこぶんめ！オラの名前を聞いて驚け！オラは

……ゴロンの勇者、蓮子だコロ〜!!」

……………ん？

「いや、私はガノンドロフの子分でもないし、蓮子って私の名前だし。」

私がそう言うと、

「え？オマエも蓮子っていうコロ？じゃあオマエがあのでんせつのドドンゴバスター、

ゆうしや蓮子?!」

ドドンゴ……バスター？

ゴーストバスターズ的な？私掃除機持っていないよ？

「お、オラのとーちゃん、ダルニアだよ！おぼえてる？」

ええ?!

「あ、あんたもしかして、ダルニアさんのこども?!」

「オラの名前、とーちゃんが蓮子のゆーきにあやかっつてつけたんだコロ!……でも、オラ女じゃないコロ。」

うん。それは私も思った。

「でもいい名前コロ!オラ気に入ってるコロ!」

そう?まあ、そう言ってくれるなら嬉しいよ。

そんなにいい名前してるかね、私。

「蓮子はオラたちゴロンにとつてえーゆーコロ!あとでサインしてほしいコロ!」「ゴロンの蓮子くんへ」って書いてほしいコロ!」

ええ……?私サインなんてしたことないよ……?」

「え?ああ、わかった……」

すると、蓮子、いや、私じゃなくて、ゴロンの蓮子はなにかを思い出したかのように「あ、そうだコロ!それどころじゃないコロ!みんなを助けてコロ!」

「助けるって、ドユコト?」

「ダルニアとーちゃんも炎の神殿に行っちゃったコロ!あそこにはリュウがいるコロ

「！」

龍……………？

「はやくしないとーちゃんまでリュウに食べられちゃうコロ〜!!」

そう言つて蓮子は泣き出してしまった。

……………なんか私が泣いてるみたいで気分悪いな。

「え、えと、とりあえず落ち着いて。リュウつてなんなの？」

私はどうにか蓮子をあやして、リュウについて尋ねる。

「むかしこの山には、ヴァルバジアつていうわるーいリュウが住んでたコロ。そのリュウはオラたちゴロンを食べる恐ろしいリュウだったコロ。」

おとぎ話みたいな話ね……………

「そいつを昔のゴロンのえーゆーが、ドツカーン!とハンマーでやつつけちやつたコロ!これ、ずーつと昔だけど、ほんとのことだよ!だつてそのえーゆーの子孫がとーちゃんなんだもん!ゴロンのみんなもガノンドロフの子分に炎の神殿に連れてかれちやつたコロ。みんなヴァルバジアに食べられちゃうコロ!」

そう言つて再び泣き出してしまった。

私は大きく息を吸つて、

「かーーーーーつ!!」

急に大声を出したので、蓮子はびくっとしてしまう。

「じゃあ、あんたもそのゴロンの英雄の血をひいてるんでしょ? だったらそんなところでいつまでも泣くな! その目ん玉ひん剥いて、今為すべきことを成しなさい! あんたも「蓮子」なんでしょ?!」

私の一喝に、

「……わかったコロ。オラもう泣かないコロ! お願いコロ! オラ、炎の神殿に行くコロ!」

蓮子の一言に私はため息をついて、

「炎の神殿は私が行くわ。ダルニアさんもゴロンの人助けるために神殿にいるんでしょ?」

「でも、オラ……」

「あんたはここで、この街を守ってなさい。それがあんたの役目よ。」

「………わかったコロ! オラ、ここを守ってるコロ!」

「よし! 大丈夫。2人も英雄がいるんなら、リュウなんてお茶の子さいさいよね!」

私の言葉に蓮子は頷く。

「よし! 炎の神殿………行きますか!!」

第15話 炎熱血戦！ヴァルバジア！！

「ねえ、まだ終わんないの？」

ゴロンシテイ。私は道具屋にて私の服に耐熱加工をしてもらっていた。

「もうちよつとゴロ。待つててゴロ。」

はあ。

あの後、ダルニアさんの部屋からデスマウンテン火口に行つてはみたものの、あまりの暑さに逃げ帰つてきてしまった。

肺が焼けるかと思つたわ。

「ねえ、これで大丈夫になるの？」

「大丈夫ゴロ。ゴロンの服は暑さ対策がバッチリゴロ。」

道具屋は自信ありげにそう言う。彼はガノンドロフの襲撃があつた際、隠れていたため難を逃れたそうだ。

「よし！これでオツケーゴロ！」

「本当に大丈夫なんでしょうね……？」

私の服は見た目、色、共に何も変わっていない。

「大丈夫ゴロ!行ってみるゴロ?」

「そうさせてもらうわ。んじやあね。ありがとう。」

私はそう言つてデスマウンテンの火口に向かつていった。

あつつ……くくない。

先程までとは大違いだ。全然暑くない。

ただ単に保冷剤でも入れてんのかな、と思つたけど、そんなこと全然なかつたわ。

「れ、蓮子、暑い……」

あそつか。ナビイはさつきとなんにも変わつてないから……

「ごめんねナビイ。さつきと神殿攻略して、温泉にでも行こうか。」

「……温泉なんてあるの?」

「あんじやない?活火山なんだし。」

私は神殿に向かいながらそう会話する。

すると、私が橋に差し掛かった瞬間、

「わっ!」

シークがどこからともなく現れ、私に近づいてくる。

「……時を超えて生まれしもの、真実の友情は時を経てより強き絆となる。その熱い心はやがて正しき者の力となり進むべき道を照らすであろう。君に、その熱い心を確かめる、炎のボレロを授けよう。」

そう言つてシークはハーブを取り出し、燃えてくるような曲を奏でた。

……うん。覚えた。おそらく。

「蓮子、また会おう！」

そう言つてシークは後ずさりする。

あつ！今度は逃がすか！その覆面ひつぺがしてやるわ！

私がシークに向かって走つていくと、私とシークの間に炎の壁ができた。

それにより私はシークに近づけなくなつてしまった。

シークは何かを地面に叩きつけ、やはり消えてしまった。

それと同時に、炎は消え去つた。

「……………くそつ、逃げられた……………」

「シークさん行つちやつたネ……………」

「うーん、ま、神殿攻略してけばまた会えるわよ。そんな時に化けの皮剥がしてやるわ……………」

私は橋を越えて炎の神殿に乗り込んでいった……………

さて、と。

入ってきたはいいものの熱いな。

よし、とドアの前に立って、扉を見る。

なんだろう。この牢屋のドアっぽいのは。

ひとまず開けてみよ。

私がゆっくりドアを開くと、マグマだまりの部屋に出た。

「そこにいるのは蓮子か……………」

すると、対岸から声がかけられる。聞き覚えのある声だ。

「ダルニアさん!」

「おお!蓮子ゴロか!しばらく見ねえ間に大きくなりやあがつて…………。しばらくゆつくりと話してえところゴロが、そうはいかねえ。」

ダルニアさんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「ガノンドロフの野郎、太古の邪竜ヴァルバジアを蘇らせちゃった!おまけに他の部族

への「見せしめ」だとぬかしやがってオレの仲間を邪竜のエサに……！くそっ！！ヤツがここから出ちまったらハイラル中が焼け野原だゴロ！」

するとダルニアさんはハンマーを取り出して、

「オレは邪竜を封じるためにこの先へ行く！蓮子、おめえをキョーダイと見込んで頼む！オレが邪竜を封じている間に、オレの仲間を助けてくれ！どうか頼む！」

アニキは私に深々と頭を下げる。

「……………わかりましたよ、アニキ。後で絶対助けに来ますから！」

「じゃあ頼むぜ蓮子！」

ダルニアさんはそう言つて奥の部屋へと向かつていった。

「……」

奥へ奥へと進んでいくと、ゴロンのみんなが捕らえられてる牢屋が見つかった。

「え、と鍵は……」

私が辺りを見回していると、

「蓮子！もしかしてこのスイッチじゃない？」

「ん、これか！」

私はスイッチに乗って押して見ようとするが……

あれ?!

動かない。スイッチが。

「あ、あれ、蓮子！このスイッチ錆びてるヨ………」

あ、ほんとだ、錆びてる。

「えー……と、どうしよ。」

私が頭を抱えていると、

「おーい！おめえ、蓮子ゴロ？久しぶりゴロ！」

「そう。助けに来たの！アニキに頼まれてね！」

「そうか、アニキが……。そうだゴロ！牢屋の中でこれを拾ったんだゴロ！これでスイッチを叩き押しして欲しいゴロ！」

するとゴロンの中の1人が牢屋の隙間からハンマーを渡してくれた。

おお………

ずっしりと重い。

こいつで……！

「はっ!!」

ズガンという音と共に、スイッチが押し込まれた。

すると、牢屋が解放された。

「おお！逃げていいゴロ?!ありがとうゴロ!!……アニキ、心配ゴロ。蓮子。伝説のドドンゴバスターのおめえにしか頼めねえゴロ。アニキをよろしく頼むゴロ！」

「……請け負った！」

私が力強くそう言うと、ゴロンはスタコラサツサと逃げていった。

「……………うし。」

私は汗を拭って、アニキが行った扉に向かって走っていった。

私がアニキの入った部屋に入ると、そこにはマグマだまりに浮かぶ丸い台座の上で巨大な竜と戦うアニキの姿があった。

「れ、蓮子!!来てくれたんだな?！」

「はい!ゴロンのみんなは助けました!」

「そうか!助かったぜ!すまねえ蓮子!オレー人じゃあこいつぁ手に余る!」

「私もアニキと戦えるなら光栄ですよ!」

私は台座に飛び乗り、剣を引き抜く。

ヴァルバジアの思しき竜は空を回ってこちらを睨んでくる。

「よっしゃーっ!!覚悟しやがれ、ヴァルバジアっ!!」

第16話 炎の友情アタック！唸れ火産霊神（カグツチ）

!!

「で、どうしますあれ。」

私はダルニアさんに尋ねる。

「どうするもこうするもねえだろう。オレたちが奴を倒さねえ限り、ハイラルに未来はねえな。」

「アスヨネー」

やれやれ。ぐちぐちと文句を言ってもしやあない。

やるしかないなら、やるだけよね！

するとヴァルバジアは台の上にある穴ほこに向かって急降下し、そのまま穴に入ってしまった。

「うわっ！」

私は思わず声が出てしまう。

「どっだ……、どっだ……?!」

私は意識を集中させ、周囲を見回す。

「後ろだ蓮子!」

ダルニアさんに言われ、慌てて後ろを振り返ると、そこには既に大きく口を開けたヴァルバジアが私を食べようと迫っていた。

「くっ!」

私は咄嗟に盾を構えて、ヴァルバジアの噛みつきを受ける。

「こんの……!!」

私が必死に押し返そうとしてもヴァルバジアはビクともしない。

「ナメンじゃ……ないわよ!!」

私は盾突きをしてヴァルバジアを仰け反らせ、ヴァルバジアの喉元を剣で斬りつける。

が。

「……なにこれ……、硬い……!!」

ヴァルバジアの強靱な皮膚にはまったく通用せず、逆に私が尻尾で弾き飛ばされてしまった。

「つつ!!いった……!!」

私は地面を数回バウンドした後、マグマに落ちる一歩手前でようやく停止する。

「蓮子!無茶すんじゃねえゴロ!」

「くそつ、剣が効かないんじや意味がない……!!」

ヴァルバジアは私を跳ね飛ばした後、上空に飛んでいく。

「蓮子、今のうちだ！中央部分に戻れ！」

「は、はい！」

私はダルニアさんの指示に従い、台の真ん中まで戻ってくる。

すると、ヴァルバジアはガンガンと岩肌を攻撃し、落石攻撃を始めた。

「わっ！とっ！あひゃっ!!」

「ちっ、あのヤロウ、やりやがるゴロ……!!」

私は四苦八苦しながら落石を避ける。

「れ、蓮子！大丈夫?!押されてるみたいだよ……」

「へへ、ナビィ、今度ばかりはヤバイかもね。」

私は乾いた笑みを浮かべる。

すると、ヴァルバジアは再び穴に潜り出す。

すると、ダルニアさんが、

「蓮子！あいつは俺のハンマーがおそらく有効だ！俺が奴が出てきた瞬間ぶっ叩く！その瞬間を狙ってやれ！」

「……ハンマー……」

そういえば、ゴロンの人が私にもハンマーくれたような。

私は慌ててメガトンハンマーを取り出す。

「お、おい!そりゃあこの神殿に安置されてるメガトンハンマーじゃねえか!おめえ
いつたいたいそれをどこで……」

「説明は後でします!それよりも出てくるあいつを捉えないと……!」

私は再度注意を穴に向ける。

……

私は目を瞑り、そつと深呼吸した。

……微かな音が聞こえる。

マグマの中を潜水、否、潜溶岩している奴の音だ。それに、微かな気配も感じる。
ダルニアさんの気配もくつきり感じられる。

……ほんとに私の体、どうにかなっちゃったのかな。

「……………そっ!!」

私はなんとなくヴァルバジアの出てくる穴が察せた。

そして瞬時にメガトンハンマーを構えて、振りかぶる。

私の意図を察したのか、ダルニアさんも同じようにハンマーを構える。

「これでも喰らえ化け物っ!!」

「スーパー・メガトン・ゴング!!!」

私とダルニアさんは案の定出てきたヴァルバジアに左右から同時に、プレス機にかけるようにハンマーをぶつける。

「カ……………!!」

ヴァルバジアはそんな声を出したかと思うと、怒り狂ったのか大暴れを始め、口から灼熱の焔を発射する。

「うわっ!!」

当然、近くにいた私の体は炎で炙られる。

「あっつ……………!!」

息ができない。息をしたら肺の中まで焼き尽くされる。

すると、ダルニアさんが私を抱えてその場から離脱した。

そして、炎の被害が来ていないところで私を下ろしてくれた。

「あ、アニキ……………」

「大丈夫か蓮子? ヤケドしてねえか?」

「ちよつと焼けたくらいです。ダルニアさんこそ、大丈夫ですか?」

「なあに。俺は昔から鈍感だからなあ! シンパイすんな!」

そう言つてダルニアさんは再度ハンマーを構える。

「おそらくさつきの一撃で凄まじい量のダメージは入れられた。あとはトドメの一撃だろう。なあ蓮子。どうして奴が出てくる穴がわかったんだ？」

「……………私、無我夢中で、なんとなくあいつの気配を追っていたら、あの穴しかないと思っ……」

「おめえはすげえヤツゴロ。戦えば戦うほど進化していつてやがる。ドドンゴの洞窟で見た頃より数倍強くなってるゴロ。おめえには、才能があんのかもしれねえな。」

「……………はは、そんなの、私にあるわけないじゃないですか。」

私は軋む体に鞭を打ち、立ち上がって剣を構える。

「おそらく、もうあいつにはさつきの手は通用しません。あいつも馬鹿じゃないですから。もう潜らずに空から攻めてくると思います。だから、ダルニアさん、1つ、頼みごとがあるんですけど……………」

私はダルニアさんを見つめ、作戦を伝える。

ヴァルバジアは既に敵味方を判別することすらせず、暴れまわっている。

その時、ヴァルバジアの目に私とダルニアの姿が見えた。

ヴァルバジアはそれがエサだとも思っただらう。口を大きく開いて、火を吹いた。

「ダルニアさん！ 思いっきりお願いします！」

「ホントにいいんだな蓮子?! 死んでも責任とれねえゴロー！」

「いいからやってください！ これですべて勝てますから！」

私はダルニアさんが構えたハンマーの上に乗り、ヴァルバジアを見据える。

「よし！ おめえはオトコの中のオトコゴロー！」

「だから私は女ですって！」

「行ってこい蓮子！」

ダルニアさんはそう言ってハンマーを振り、私を射出する。

飛び出した私にヴァルバジアの火が襲うのは言うまでもないだろう。

「だからって、そんなの関係あるかあああつ!!」

私はマスターソードを思い切り振り、ヴァルバジアの炎を剣に纏わせる。

「終の秘剣……………火産^{カグツチ}霊神!!」

「おらああああつ!!!」

私は竜巻状の炎を纏わせたマスターソードを振り抜き、ヴァルバジアを焼き尽くす。ヴァルバジアはそのまま外壁にあたり、蒸発してしまった。

「はは、やった……………」

私はそれだけ言って意識を手放してしまう。

「おっと。」

しかし、落ちてきた私をダルニアさんが受け止めてくれた。

「ホント、おめえは大したヤツゴロ。」

ダルニアさんはそう言って優しく、力強く、微笑むのであった……

第17話 凍りついた里！ハイリア湖の異変！

私がヴァルバジアを撃破した直後、デスマウンテンが大噴火を起こし、デスマウンテン上空の分厚い黒雲をぶっ飛ばし、青空を取り戻した。

「……………ん……………ん……………」

私はまた賢者の間で目を覚ました。

「ありがとうよキョーダイ！一族を代表して礼を言うぜ！やつばおめえはオトコの中のオトコゴロ！」

「いや、だから私は女ですって。」

「だがこのダルニアが炎の賢者サマだなんて……、笑っちゃまうぜ、なあキョーダイ！まあ、これも運命ってやつだろう。俺がここで封印をすることでおめえの役に立つんならこれほど嬉しいこたあねえ！」

ダルニアさんは嬉しそうに腕を組んで言う。

「キョーダイ、これを受けとんな!炎の精霊の力と友情を込めたメダルでい!」
するとダルニアさんはコイントスの容量で私にメダルを渡してくれた。

「蓮子!それは炎のメダルだヨ!これでまたあなたに力が宿ったネ!」

「ダルニアさん……」

「言うなキョーダイ。言葉はいらねえ。必要ねえ。忘れんなよ、おめえと俺は本当のキョーダイゴロ……」

「……………はい。」

私はダルニアさんに笑みを送る。

ダルニアさんも応えてくれるように親指を立てる。

そして、私の意識は再び暗転した……。

「あちやちやちやちあちち!!!」

次に私が目を覚ましたところは火口であった。

そして、私は考えなしに岩に寄りかかってしまい、危うく背中に大やけどを負うところだった。

「あつちちち……おーあつつ。」

「蓮子、大丈夫？」

「あー、うん。まあね。」

はあ。火山はこりごりだ……

さて、下山しますか。

そうして私は思い体に鞭をうってどうにか下山する。

はあ、やっと熱いところから抜け出せた……

「蓮子、次はどこに行くか決まった？」

「うーん、ひとまず子供んときに行った順番で行けばいいと思うから、次はゾーラ川ね。」

ゾーラ川。そういやルト姫は元気かな……。いや、ダルニアさんよりかは好きじゃないんだけどさ……

だってレンコンって呼んでくるんだもんあいつ。

って、こんなガキみたいなこと言っちゃ締まらないな。

「よしナビイ、行こう!ゾーラ川!」

「うん!」

そう言っただけで私たちはゾーラ川目指して歩いていった。

……メリーもこんな風にそこかしこ連れまわしてたっけ。

元気にしてるかな、メリー。

ま、もう一息の辛抱よね。ガノンドロフ倒したら元の世界に帰してくれるってラウルさん言ってたし。

よっしゃ、と引き締め、私は歩いていく……

「……なんか、寒くない？」

「うん。なんか寒いヨ……」

とりあえずゾーラ川上流、滝の前まで来た私たちは寒気を覚えた。

「なんか雪つぽいのが舞ってるヨ……？」

確かに。

ひとまずゼルダの子守歌を奏で、滝を割る。

後に行ってみるだけよね。

「へっ、へっ……へっくしゅんっ!!」

思わずくしゃみが出てしまう。

そのくらい寒いのだ。

そのうえ、

「なによこれ……、カチンコチンじゃない……!」

そう。ゾーラの里は冷凍庫の中入れたようにカチカチに凍っていたのだ。

「いったいなにが……?」

ナビイも困惑している。

明らかにゴロンシテイより状況が悪い。

ゾーラの人もさっぱり見当たらないし……

「とりあえず、キングゾーラさまのところへ行くこうヨ蓮子。」

「そうね。なにがあったのか聞かなきゃ。」

私たちはそう言ってキングゾーラさまのところに向かって行った。

が、

「お前もカチンコチンなんかーい!!」

そう。キングゾーラ様までカチコチになっていたのだ。

しかも氷の色が変だ。

「ねえナビイ。あの氷、なんで赤いの?イチゴシロップでもかけた?」

「いや、そんなんじゃないヨ蓮子……。あれは赤い氷。」
うん。見りやわかる。

「あれを溶かすには青い炎が必要だヨ！」

青い炎か。たしか青の方が熱いんだったけ。炎って。

「で？それってどこにあんの？」

「うーん、たしかゾーラの泉、そこにある氷の洞窟にあるって聞いたような……」

泉？ジャブジャブさまがいたあそこ？洞窟なんてあつたっけな……

「とりあえず行くだけいってみようか。」

「うん。そうしよう。」

そうして私たちはキングゾーラさまの横を通り抜け泉に向かって行った。

「あ、泉はまだ完全には凍ってないのね。」

ゾーラの泉は多少氷が浮いてるだけで、凍りついてはいなかった。

「あ、ほんとだ。洞窟が見える。」

流水の道の先、確かに洞窟があつた。
妙な冷気を感じる。

「ま、行くしかないか。」

私はそう結論づけ、氷の洞窟に入つていった。

「やっぱさむっ!!」

半袖には堪えるなあ…

ん? なんだろこれ…

そこには、大きな燭台に青い炎がともっていた。

「あつ、これだヨ蓮子! 青い炎!」

「うーん、どうやって取るのこれ…」

「大丈夫、空き瓶で持ち運べるヨ。」

いやいや、炎を空き瓶で持ち運べるわけが…

私はそう思案しながら空き瓶を振る。

すると見事に炎が入った。

できた…!? 出来ちゃったよマジで…

「よし、これで氷を溶かせるわね。つて、なんだこれ。」

私は宝箱を見つけ開けてみる。

そこには、

「なによ、靴じゃない。」

靴が一セット入っていた。

しかし、私が持ち上げようとしたとき、

「うわっ!! なにこれ!? 重っ!!」

それは一足十キロはありそうなブーツだった。

「なによこれ。使えんの……?」

私が呆れ気味にブーツを見てみると、

「また会ったな蓮子…」

「シーク……」

私が振り返ったそこにはシークがいた。

「ゾーラ族に会いに来たのなら無駄足だったな。見ての通りだ。ゾーラ族は一人残らず厚い氷の下。ゾーラの姫だけはなんとか助け出したがその姫も…」

姫っていうと、ルトのことね!

「水の神殿へ行く」と言い残して行ってしまった…。この水は邪悪な呪いに依るもの。水の神殿の魔物こそ呪いの源。源を倒さねば呪いは解けぬ。ゾーラの里を救うため、危険に立ち向かう覚悟があるなら、神殿へ導く調べを伝えよう。」

「…時は移り人は移る。それは水の流れにも似て決してとどまることはない。幼き心は気高き大志に。幼き恋は深い慈愛へ。澄んだ水面は成長を写す鏡…。己の姿を見つめる為、水のセレナーデを聞くがいい。」

それが聖徳・セレナーデ♪

シークはハーブを構え、演奏を始めた。

水の流れのように美しいメロディが響いた…

うん。覚えた。(絶対覚えたとは言っていない)

「では蓮子、また会おう!」

するとシークは私が近づく前にいなくなってしまった。

「あつ、くそ、また逃げられた……」

「でも、シークさんのおかげで水の神殿に行けるようになったネ!」

そうだ。まずはそつちだ。よーし、行くか、水の神殿!

第18話 モーファの罨！蓮子が2人?!

「んで、どうやってハイリア湖まで行こうか？」

私は腕を組んでナビイに問う。

「うーん、どうしよう………、私の記憶だと、ハイリア湖はハイラルの反対側あたりにあつたような………」

ナビイも言葉を濁す。

「そーいやさ、シークが神殿へ導く曲つつつてたわよね、これ。」

私はシークの言葉を思い出す。

「神殿へ導く調べ。神殿への道がわかるか、神殿へひとつ飛びなのか………」
まあ吹いてみたほうが早いかな。

そう思案して私は水のセレナーデを奏でた。

瞬間、私の体は光に包まれ、そのままどこかへ飛んでいってしまった。

うわっと!

私が着地したのは、どこかの水に浮かぶ浮島の上だった。

「あ、蓮子!ここがハイリア湖だヨ!!」

「うそ?!ついたの?!」

マジでか。たったちよこつとオカリナ吹いただけなのに。

……………それにしても。

ここ、本当に湖?

そこは、水がほとんど干上がっており、湖底に見える神殿の入り口が剥き出しになっていた。

「その方はもしかして、レンコンゾラ?」

ん?!

すると、背後から声をかけられ、私は歩みを止める。

「あー!ルト姫!!」

「やっぱりレンコンか!久しいのう!!」

「いやだからレンコンじゃねーっての!!」

私のツツコミもスルーして、ルトは歩み寄ってくる。

「それにしても、でっかくなつたのう。ま、それはそなただけに当てはまることではないな。」

「この惨状を見るレンコン。この湖の水が干上がったせいで我が里もめちやくちやゾラ。」

「でも側から見ればただ湖の水位が下がってるってだけじゃ……」

「甘い、甘いぞレンコン。ここは命を司る水が湧き出る場所。それが干上がったとなると……」

ルトはそこから言葉を濁した。

「わらわは神殿へ行く。そなたはここで待つておれ。よいな。」

「そんなことしませんよ！せつかくここまで来たのに!!」

「うーん、ならば仕方ない、こうしよう！」

「こうしよう？」

「合言葉を決めるのじゃ。もし中で逸れてしまった時のためにな。」

おお、

確かにそれは言えてる。

心配だもんな、この人。

またいらん罨にかかりそうで。

「よし、では決めたぞ。お互いにこのキーワードを叫ぶのじゃ。それは、「貧」と、「乳」じゃ。」

ルトは私と、自分を交互に指差す。

「貧と、乳?」

「そうじゃ。」

「貧………乳?」

「うむ。だってそなたわらわより貧相な胸であろう?ほれ、胸に絶壁ができておるぞ。」

「………」

私は自分の胸の部分に触る。

ぺったーん、としてみる。

………

私はルトのそれを確認する。

ある。私より圧倒的に。

「うるさいなバカ!!偉い人は言ってたもん!「貧乳はステータス、希少価値だ」って!!」

「ステータスだとしても貧しいものは貧しかろう。」

うっ………

ズバツと言ってくれやがって……

「ああもう!!それでもいいですよ!ほら、行きましょ!」

私は水に飛び込む。

が、

いくら水が干上がってるとはいえ水が完全に消えたわけではない。まだいくらかは残っているのだ。

「くそつ、ギリギリ息が続かない……………」

すると、ルト姫が私の体を持って水に潜る。

「全く、ろくに泳げもしないくせに無理するでない。ほら、息だけ止めてしっかり掴まってるがよい。」

ルト姫はそう言うすると潜っていった。

「よし、では神殿に突入するぞレンコン!!」

「だから蓮子だつて」

私が突っ込もうと口を開けた瞬間水が入ってきて、私は軽いパニックになってしま
う。

「お、おい!口を開けるでない!」

瞬間、水の神殿内部の水が急速に流れ出し、私とルト姫は分断されてしまった。

「うわああああー……!!」

「う、ん……」

私は重い体をどうにか起こす。

どうやら砂浜のようなどに打ち上げられたらしい。

でも雰囲気は完全に神殿のそれだ。

私はけけけほと咳き込み、

「おーい！ルト姫ー!!……貧！貧!!貧乳!!あ、言っちゃった……」

……返事はない。

くそつ、どうしてこうなるかな……

とりあえず先に進むしかないか。

そう思案して私は先に進んでいく……

「なんだ……」

私はウユニ塩湖のような場所に出てくる。

砂浜があつて水鏡のように私を映し出している。

「蓮子、嫌な気配がするヨ……」

「うん。私も感じてる。」

刹那、私の背後から猛烈な殺気を感じ、私は瞬時に振り返る。

するとそこには、真つ黒な私が剣を構えてこちらを睨みつけていた。

「ダーク蓮子、つてやつ？ いいわよ。かかつてきなさい。コピーがオリジナルには絶対に勝てないってこと教えてあげるわ。」

私もマスターソードを引き抜きダーク蓮子と向き合う。

瞬間、私はダーク蓮子めがけて真横にマスターソードを薙ぐ。

が、ダーク蓮子は軽快な身のこなしで私のマスターソードの上に飛び乗る。

「見切られた?!」

私がそういった瞬間、ダーク蓮子は真縦に剣を振り下ろしてくる。

「ちっ!!」

私は地面を転がってそれを躲す。

それと同時にダーク蓮子も着地した。

あいつ、全く重さを感じなかった……

おそらく、本当に幻影かなにかと戦ってるのかね、私は。

私は瞬時に距離を詰め、マスターソードで斬りつけていくがそれはことごとく躲されてしまう。

「ちっー!」

私は左足でダーク蓮子の腹部を蹴りつける。

避けられると思っていていた攻撃だが、ダーク蓮子は反応できなかったようだ。

「当たった!」

私は続けざまにジャンプをしてマスターソードを体重を乗せて振り下ろす。

「これで、どうだ!!」

が、ダーク蓮子は先ほど私がやったように地面を転がってそれを避けた。

「そう、それを待ってたのよ!」

私は瞬時に弓矢に持ち替えて矢を引き絞って放ち、ダーク蓮子の心臓部に命中させた。

そして、私は剣を振りかぶって一瞬でダーク蓮子との距離を詰め、そのままマスターソードを横に薙いだ。

矢が命中して集中が削がれていたのか、ダーク蓮子は反応できずに真つ二つになってしまった。

「……………ふうっ、ほらね、言ったでしょ? コピーはオリジナルには勝てないって。」

私はマスターソードを鞘に収めてそう零す。

「蓮子凄いい! 自分相手に圧倒してたじゃない!」

ナビイが私を賞賛するが、

「いや、あいつ、マスターソード以外なら反応できないのか避けられてなかった。だから弓矢で足止めしてから見切られないように死角からぶった斬るのが一番だと思って。」

「れ、蓮子、もしかして、たったあれだけの斬り合いてそれを見破ったの?! 凄いワ! 私もそんなの知らなかったのに……………!」

「そう? 案外簡単にわかったわよ?」

正直そんなに苦勞はしなかったかな。

「さ、次次!行くわよナビィ!」

「あ、うん!」

私はナビィと一緒に更に奥へと進んでいった。

「ここが一番奥っぽいわね………」

私が入った部屋。そこに空いていた穴から落ちたその先、水の上に4つの台座が立っている部屋に私はやってくる。

すると、ルト姫の声が響いてくる。

「レンコン、ダメじゃ!!その水に触れるでない!!」

ルト姫の声が出た直後、水が触手のような動きで鞭のようになり、私の腹部をぶつ叩く。

「つつ!!」

私は水の上にある台座から吹き飛ばされ、水の外側の足場まで吹き飛ばされた。

部屋の壁についていた無数の棘にあと少しで刺さるところだった。

「あ、危ない……………!!」

私は背筋がゾツとする。

「レンコン、大丈夫か？」

すると、ルト姫も部屋に降りてきて私の元へ駆け寄る。

「ええ。でも、なんで水が…………？」

「……………あの水がこの神殿を蝕んでおる魔物、水生核細胞、モーファそのものじゃ!!」

ええっ?!

うそ?!あれがボス?!

「うひゃあ、参ったな……………どうすりゃいいんだろ……………」

第19話 激突!ウルトラブリッツボール!!

モーファは水の触手をブンブンと振り回して、私たち目掛けて振り下ろしてくる。

「こんにゃろ……っ!!」

私は弓矢で水の触手を射る。

が、風穴が空くだけで、大したダメージは入っていないように見える。

もつとも、その穴さえほんの数秒で塞がってしまうが。

「ちくしよう、戦いようがないなあ……」

私は思わずそんなことを漏らす。

「慌てるでない、レンコン! 奴には何処かに核がある! それを潰しさえすればわらわた

ちの勝ちじゃ!!」

「核つつつたつて……」

一体どこに。

見た感じでは普通の水が動いているようにしか見えない。

しかし、そんな思考を巡らせているうちに一瞬にして私の体は水に絡め取られてしま

う。

「うわわわわっ!!」

私はそのまま持ち上げられ、空中を数十回振り回された後、先ほど私たちが立っていた足場の反対側に叩き落とされた。

「いっ………っ………!!」

私は額から血をボタボタと流す。

「骨数本逝った気がするなあ……」

私は薄ら笑いを浮かべて立ち上がる。

瞬間、ミシミシと骨が軋む音がする。

「いっ、てて………」

「レンコン! 無事ゾラ?!」

「これで無事なら凄いつすね……」

私は肩で息をしながら言う。

「嫌んなるわね……」

私はマスターソードを構える。

「レンコン! こいつを使え!!」

するとルト姫はフックシヨットを渡してくる。

「ええ?! それはもう持つてるよ!」

「違うー!これはロングフック!フックショットの強化版ゾラー!こいつの伸びる長さはフックショットとは大違いゾラ!」

「そ、それなら……」

と、とりあえず私は受け取っておく。

瞬間、水の中に小さなサッカーボールのような赤い塊が見えた。

「ねえルト、あれって……!!」

私が指差すと、

「あ、あれゾラ!あれがモーファの核!!」

「じゃああれを破壊すれば……」

私は足を動かそうとするが、

「うっ……!!」

私は体を襲う激痛に思わず膝をついてしまう。

瞬間、待ってましたと言わんばかりにモーファは水を操作して水の触手で私の腹部を

突いて吹き飛ばす。

更に触手を振り回してルト姫も吹き飛ばす。

「あの水の中にある核さえ潰せれば……っ!!」

私は核を狙い打ち、矢を放つ。

が、

モーファは流れるように核を動かし、私の矢を躲す。

「躲された!!」

瞬間、私はまた触手に絡め取られ、水中に引きずり込まれる。

「がぼっ……ぐ……ふっ……」

(しっ、しまった……っ!!)

私は必死にもがくが、水はまるで固まったセメントのように動かない。

(まずい、もう息が……!!)

「レンコン! しっかりするゾラ!!」

瞬間、ルト姫は私を担いで水の外へ離脱する。

「げほっ、げほっ……!!」

私は咳き込む。

「レンコン! レンコン!! 意識は確かか?!」

「だから、レンコンじゃないっつの……!!」

私はそれだけ返して再び立ち上がる。

そして私はルト姫に注文をする。

「1つ、頼みが……! これですつを倒しますから!!」

「ほんとにそんなんでいけるのか?!」

いけなきやダメなんだっつの!!

私は構えて、

「いくわよーっ!!!」

と叫ぶ。

「う、うむ……!!!」

ルト姫は微妙な表情で返事をする。

「違う違う!!」「いくわよーっ!!!」って言ったら「はあーっい♡」って言わなきやダメでしょ?!ちゃんとしないと技出来ないんだかんね?!」

「ほらもっかい!!いくわよーっ!!!」

何故かはわからないが、ルト姫は顔を真っ赤にして、

「は、はあーっい♡」

と乗ってくる。

「よっしや!!」

私はフックショット、否、ロングフックでモーファの核を捉える。

「おお!!」

「いっ!!」

私はロングフックを巻き取りモーファの核を引きずり出す。

そして、

「喰らえっ!!」

マスターソードで9回斬りつける。

そして、マスターソードを突き立て、それを踏み台にジャンプする。

瞬間、やはり私の体を激痛が襲うが、私は堪え、ルト姫に叫ぶ

「アレお願いします!!」

するとルト姫は水で生み出したボールをトスしてくれた。

「来た……っ!!」

私は鉄棒の逆上がりをするようにオーバーヘッドキックで水のボールを蹴る。

「喰らえ!!これが私たちの、エース・オブ・ザ・ブリッツだーっ!!」

私は水のボールを蹴り飛ばし、核に当てて炸裂させた。

「あいてっ!!」

私は落下の衝撃で更にぼろぼろになってしまう。

瞬間、核が砕け散り、台座の下に溜まっていた水は枯れてしまった……

「やったな、蓮子……」

第20話 潜入!インゴ-牧場?!

「……………」

私はまた賢者の間で目を覚ました。

目の前にはルト姫がいる。

「レンコン……、さすがじゃな。妾がエンゲージリングを渡しただけのことはある。これで、ゾーラの里も、ゾーラたちも、じきに元に戻るであろう。」

「だから、レンコンじゃないっての。」

私は何回めかもわからないツツコミを入れる。

「ふふ、そなたが男なら、妾の永遠の愛を与えてやろう、と、思っておったがそなたは女じゃからのう。そうじゃな、あのエンゲージリング、そなたにやろう!そなたにぴったりの人が見つかったら渡すがよい!」

「は、はあ……」

結婚相手ねえ。そんなの居るのかね。

「これからもそなたを弄って面白おかしくやっていこう、と思っておったが、どうやら今の妾には叶わぬ願いのようじゃ。妾はこれから水の賢者として水の神殿を守らねばな

らぬ。……そうじゃ、レンコン、「ゼルダ」という姫を探しておろう。」

「え？ああ、うん。つてか、なんでわかったの？」

「妾に隠し事はできんのじゃ。安心せい。ゼルダは生きておる。妾にはわかるのじゃ。だから、挫けるでないぞ、蓮子！そなたはハイラルの最後の希望なのじゃからな！」

!!

「……………初めて、蓮子って呼んでくれたわね。」

「……………ふふつ、2回目じゃ。では、そなたにこのメダルを授ける！謹んで受け取るが良
い！」

すると、私の手の中に青いメダルが現れた。

「蓮子！それは水のメダルだヨ！やったネ蓮子！これで4枚目だヨ！」

「……………あんがと。お礼は言っとくわ。」

「ふん、そなたに礼を言われる筋合いはない！さっさと行け！ガノンドロフは待つちやくれんぞー！」

私の意識が暗転する直前、ルト姫は笑って、

「ありがとうな蓮子。……………もしシークに会ったら、妾が礼を言っておつたと伝えてくれ。よいな……………」

「……………わかった。覚えとくわ。」

私の意識はそこで途切れてしまった。

「……………湖から魔物の気配が消えてゆく……………、蓮子、やったな。」

シークは湖畔で湖を見てそう呟く。

すると、

「いってっ!!」

シークの後ろに私が頭から落下してくる。

「蓮子、無事だったんだな。」

「今回もボロボロになったけどね。賢者サマの力で怪我は治ったから結果オーライだけだよ。」

「あ、そうだそうだ。ルト姫があんたに礼を言ってたわ。」

私がシークに言うときシークは少しの間目を閉じて、

「……………そうか。彼女のためにも、ハイラルの平和を早く取り戻さないと、な。見たまえ蓮子。君とルト姫の力で魔物は倒された。湖は再び清らかな水で満たされ、元の姿を取り戻したのだ。」

わあ……………!!

私は水辺に近づいて湖を見渡す。

湖は綺麗に澄んだ水で満たされていた。

「シーク……………って、また逃げられた…」

私がシークから注意を逸らした隙を狙ったのだろう。いつのまにか居なくなっていた。

「ま、また会えるか。」

いつものことなので流石に私も慣れて、さっさと諦め、朝日を浴びる。

すると私は何かの石板を見つけた。

「ん？なんだこれ。「湖に水満ちる時、朝日に向かって打て」……………、ってなんじゃそら。」

私は顔を歪める。

「蓮子…これって弓矢を射ろ、ってことなんじゃない？」

「ええ……………？そんなんでいいの？ってか普通太陽になんか届かないでしょ……………」

……………まあいいか。しのごの言っても仕方がない。

私は弓を構えて、矢を射る。

すると、私の両端に二本矢が帰ってきた。

「うわっ?!」

なんだこれ、氷?

私が矢を拾い上げると、そこには矢の先つちよにそれぞれ赤い塊と青い塊がくつついていた。

「あー蓮子すごい!それは炎の矢と氷の矢だヨ!マジックアイテムだ!」

おお……、なんかファンタジーにありそうな弓矢強化系のやつね……

「よし、いいのも貰ったし、朝日から元気を貰ったし!行きますか!次の神殿探しに!」

「うん!」

そうして私とナビィはまた平原へと戻っていった。

「……………そういやさ。」

「なに蓮子？」

「ロンロン牧場って、どうなってんだろ。」

「そういえば、7年後の世界では顔を出してないね。どうするの？」

「よし、ちよつと寄り道していきますか！」

結局、私たちはロンロン牧場に寄り道することになった……

「おー……………帰ってきた……………」

私は世界が支配されているとは思えないほどのどかな雰囲気息を飲む。

「特に変わってないなあ……………」

私はゆっくり進みながらそう零す。

「……………あれ?」

なんか知らない柵が出来てる。

しかもなんか顔が描いてあるし。

「まあいいや。」

そういつて私は馬小屋に入っていく。

「あら珍しい!お客さんなんて久しぶり!どこから来たの?」

私が馬小屋に入った瞬間、綺麗な女性から声をかけられる。

「え?あー、その辺。」

私は答えを濁す。

「街の人もいなくなっちゃったし、ガノンドロフが現れてからあちこち荒れ果てて怪物ばっかり。」

「……………あれ?」

私はその容姿に見覚えがあった。

「インゴさんもあいつに気に入られようと馬たちを利用して……、みんなひどい人になっちゃおう……。私の父さんもね、インゴさんに牧場を追い出されちゃって……。私がインゴさんに逆らったら馬たちまで酷い目にあうから……。せめてあの子達が大好きな歌でも聞かせてあげたいんだけど……。」

「も、もしかしくなくても、あんだ、マロンちゃん?!」
「え?」

マロンと思しき女性は首をかしげる。

「父さんって、タロンさんのことでしょ?!」

「そうよ。なんで知って……………、って、もしかして7年前の妖精ちゃん?!」

「そうよ! わー!! やっぱりマロンちゃんだ! 久しぶりー!!」

私はマロンちゃんに抱きつく。

「でっかくなつたわね!」

「お互い様よ。」

「実は私はなんやかんやあつて来てみたんだけど、この有様だったってことね……………。外から見たら何にも変わってなかったからびっくりしたよ。」

「うん。インゴーさんが父さんを追い出してから、私もずーっと仕事、仕事…………、やんなつちやうわ。」

「……………。よし! あつたまきたわ! あいつ、ギャフンと言わせてくる!」

私は馬小屋のドアに手をかけた。

「妖精ちゃん! 大丈夫なの?」

「大丈夫大丈夫! あいつなんかへでもないから!」

私はそう言って表に出た……

第21話 レース対決!! エポナを勝ち取れ!!

「……………ねえ」

私はインゴーに声をかける。

「なんだあ?こんなところにネエちゃん来るなんて珍しいな。……俺が牧場をだまし取った、なんて噂してる奴がカカリコ村辺りにいるらしいが……。ふざけんじゃねえ! タロンの野郎がお人好しなんだよ!このインゴー様が一生懸命働いたから今の牧場があるんだ!!」

「それでも、ちよつとやりすぎなんじゃない?」

しかしインゴーは鼻で笑い、

「ふん、赤の他人のネエちゃんに文句を言われたかねえな。それにガノンドロフ様がこの俺の腕を見込んで牧場を任せてくださったんだ。俺は立派な馬を育てて大魔王ガノンドロフ様に認めてもらい、出世するんだ!……」

「そんな……っ!あんだ!わかってんの?!このままガノンドロフを放っておくと、今度こそ世界は終わりよ?!あいつに媚びへつらつてたつて無駄よ!きつとあいつは全部壊してしまうのよ?!」

「ふん。知るかそんなこと。……まあいい。なあネエちゃん。ここの馬、乗りたかねえか?」

「はあ?」

私が訝しげな顔を見ると、インゴーはニヤツと笑い、

「どれか一頭、選んでいいぜ。その馬で俺とレース対決だ。掛け金50ルピーでどうだ
い。」

「……………上等じゃない。やってやるわ。」

「ね、ねえ蓮子……………?今私たちって一文無しじゃあ……………」

「うっ……………か、勝てばいいのよ!勝てば!!」

私とナビィはボソボソと会話する。

「?一人で何言ってやがる。ほら、サツサと選べ。」

インゴーはナビィに気づいていないのか、苛立ちを見せながらゲートを開く。

「よし、私たちが選ぶ馬はもう決まってるわよねナビィ。」

「うん!」

私はよし、と言ってオカリナでエポナの歌を演奏した。

すると、広場の奥から一頭の大きな馬が走ってきた。

「おおーあれエポナ?!でっかくなったわね!!」

エポナは私に擦り寄ってくる。

「へへ……、よしよし、久しぶりね!」

私は頭を撫でて、エポナに乗る。

「よ………つと。」

乗馬は生まれて初めてかもなあ。

「ほいっ!」

私を手綱を握ってお腹を軽く蹴るとエポナは歩き出した。

「おおー!偉い偉い!!」

私は頭を撫でてあげる。

「……………」

インゴーは私がエポナを乗り回しているのを柵に寄りかかってじっと見ていた。

「おいネエちゃん!馬はそいつでいいか?!なら始めるぞ!!」

「おつ、よし、初陣だぜエポナさん!」

私は手綱を軽く引いてエポナを止める。

「レースはコース1周。簡単だろ?」

「ええ。吠え面かかないでよね。」

「さて、かくのはどっちかな……、まあ、俺にやわかるがな。」

インゴーは自分の馬にまたがって雄叫びをあげる。

「ヨーイ………ドン!!」

瞬間、私とインゴーは同時にスタートする。

「ふっ!」

私はムチで一回エポナを叩いて刺激し、加速させる。

「いいよ!その調子!」

ナビイも私の後を必死についてくる。

「へへっ、私センスあるのかもね！」

私は更に加速させ、そのままインゴーをぶつちぎって勝利した。

「へへー……!!ピースピース!!」

私はVサインをしてナビィに喜びを伝える。

「やったネ蓮子！」

「すんごいわねエポナ！あんたカスケードより速いんじゃない?！」

「それなら有○記念に勝てるネ……、って、そうじゃないヨ蓮子！」

「てへへ、そうだそうだ。」

私が頭をかいていると、

「くっ、くっそー!!こ、こんなことが……!!も、もしもこんなことがガノンドロフ様に知れたら……!!て、てめえ!!もう一回だ!も、もしてめえが勝てたら……、その馬くれてやるよー！」

「へえ。負けといて偉そうね。でもいいわ。乗ってあげる。この馬くれるんでしょ?」

「か、覚悟しやがれ……!今度こそ吠え面かかせてやる!!」

インゴーは無様な小悪党のように狼狽する。

「はいはい。」

私は終始にやけ顔でインゴーを見ていた。

「よし、エポナ！もっかい行くよ！」

私は再び手綱を持つ。

「よ………ドン!!」

「あつ!!こら!!ズルすんな!!」

今度はインゴーはスタート時にズルをしてフライングでスタートする。

「ちっ!!」

私も慌ててスタートするが、1メートルほど話されてしまう。

「はっはっは!!ザマアみやがれ！」

「くっそ、舐めんよ畜生め………!!」

私はムチを打ってエポナを加速させ、カーブでインを刺してインゴーを追い抜かず。

「なっ?!」

「へへっ、イニD見てる私の方が1枚上手みたいね！」

「蓮子、イニDは関係ないヨ………」

ナビイのツツコミと同時に更に加速させ、そのままゴールした。

「大、勝利!!」

私は再びVサインをする。

「そ、その馬は?! え、エポナじゃねえか!! その暴れ馬をどうやって手懐けやった?!」
「へへ、ちよつち秘密があんのよねー……。」

私はニヤニヤしながらインゴーを見る。

「ガノンドロフ様に差し上げるはずの馬を賭けてレースに負けるなんて……!!」
あ、そうだったんだ。

んじゃあエポナを助け出せてよかったかな。

「ふん!! や、約束通りその馬はお前にくれてやる! ただし!」

インゴーはそう言つて小屋の方へ続く道に行つて、

「この牧場からは出られねえがな!!」

柵を乱暴に閉じた。

「あつ!」

くつそ、卑怯者め……!!

そこで、私に妙案が浮かんだ。

「エポナ、もうひと頑張りお願い!」

私は柵から距離をとり、ムチでエポナを加速させた。

「跳び越えろつ!!」

瞬間、エポナは柵を飛び越え、再び走り出す。

「なにつ?!」

インゴーも目を見開く。

その時、表にマロンが出てきた。

「マロンちゃん!エポナ、ちよつと借りてくね!インゴーも懲らしめといたから、もう大丈夫!」

「え?ほ、ほんと?!」

「うん!そんなじゃあね!!」

私はそのままエポナに乗って牧場を後にした……

第22話 闇の巨人、現る！手がかりは7年前！

「おおおおお!!」

速い！

まさかこんなにも速いもんだとは……………

ロンロン牧場から脱出した私たちはエポナを駆って平原を疾走していた。

「それでナビイ、次の神殿は？そういうえば、もう子供時代に行ったところは全部行っちゃったよ？」

「それもそうだなネ……………、うーん……………」

私とナビイが頭を悩ませていると、

デスマウンテンの麓の辺りから大爆発が起こる。

「なに今の?!あの場所つてもしかして……………!!」

私は焦燥感を抱きながらナビイに問う。

「うん！カカリコ村だヨ！蓮子、急ごう！」

「もちー！」

私はエポナを加速させてカカリコ村に急行した。

「エポナ、ちょっとここで待ってて。」

私はカカリコ村入り口付近の木にエポナを括り付ける。

「じゃあ行こうナビィ!」

「うん!」

そうして私たちナビィはカカリコ村ひ入っていく。

「なによこれ……?!炎の神殿に行くときに寄ったときはこんなになつてなかったのに……!」

私がカカリコ村に入った瞬間、私たちを襲つたのはサウナのような熱気と焦げ臭いにおいだった。

カカリコ村の民家からは次々に火の手が上がっており、カカリコ村の上に小さな黒雲を作り出すほどだった。

すると、私は井戸の前に立っているシークを見つけた。

「シーク!これいったいどうなってるの?!」

私はシークの元に駆け寄るが、

「下がれ蓮子!」

と言われ、私は慌てて急停止する。

「……………」

私が小首を傾げた瞬間、井戸の柱が吹き飛んだ。

そして、地面と激しく衝突し、粉々に砕け散ってしまった。

「なんで急に柱が……………」

私が柱が落ちた場所を見ていると、

「うわっ!!」

急にシークの体が浮き上がり、ブンブンと振り回され、先ほどの柱と同じように吹き飛ばされる。

「ちよ、ちよつとシーク!どうしたのよ!」

私はシークに駆け寄る。

瞬間、井戸から”何か”が出てくる。

私には全く視認できなかつたが、なにか巨大な黒い影がカカリコ村を回りながら私の方へ突撃してくる。

「くそつ、そつちがやる気ならやってやる!」

私はマスターソードを引き抜き、構える。

「よつ、よせ蓮子!待て!」

私はシークの警告を無視して、影に剣を突き立てるが……………

「ん、くく……………っ……………」

私は重い体を起こす。

「目が覚めたか……………」

シークは私の顔を覗き込む。

「そうか、私、あの影にやられて……………」

「蓮子、大変なことになった……………。闇の魔物が復活してしまったんだ!」

「闇の、魔物……………」

「闇の魔物はカカリコ村の長、インパによつて井戸の底へ封じられていた……………。だが闇の魔物の力が強まったため封印が解け、奴は地上に現れたんだ!」

奴……か。私は影が見えただけでなんにも見えなかったぞ……。

あれ、でもなんかなんとなく気配は察せたな。おそらく人型の魔物。人間なわけないんだけど。

「インパはおそらく魔物を再び封じるため、闇の神殿に向かった筈だが……、このままでは彼女が危険だ！インパは六賢者の一人なのだ！このままでは彼女はやられてしまう……！頼む蓮子。インパを助けてくれ！」

「あんたが……まで言うのは初めて聞いた気がするわ。まあでもやるわよ。あいつには借りができたし。」

「………そうか。ありがとう。闇の神殿はこの地下、墓地の下に入り口がある。」

うげつ、墓暴きでもするの？……でも懐かしいなあ。メリーとも墓暴きとかしてたっけ。

「わかった。とりあえず墓地に行けばいいのね。」

「ああ。すまないが、今の僕にできることは闇の神殿に誘うメロディを伝えることだけだ。時をも飲み込む無限の闇に奏でし者を誘う調べ、聞け、闇のノクターンを。」

シークはそう言ってハーブを構えた。

そして、飲み込まれそうな感じのメロディがカカリコ村に響いた……

うむ、覚えた。かもしれない。

「村のことは僕に任せろ。蓮子、闇の神殿は頼む！」

「がってん承知！」

私はシークに笑みを送る。

そしてシークはいつものように消えてしまった。

「あ、一応消えはするんだ。」

「あれ？蓮子、闇の神殿には行かないの？」

「ん、まあね。ちよつち気になることがあつて。」

私は「何か」が這い出してきた井戸の底へ降りていった。

「この下には多分牢獄みたいなのがあるはずなのよ。多分。ここ、普通の井戸じゃないから。」

私がそう言っている間に、私たちは底までたどり着いた。

「ほら、やっぱり。」

確かに井戸の底には通路があつた。

が。

「よし、入るぞ……！」

ぎゅむ。

……

「あれ、は、入らない……」

その穴は余りにも小さく、私はお尻が引つかかってしまった。

「ぬー！にー！！にゃー！！」

私は思いっきり先に進むうとしてみるが、ビクともしない。

「蓮子、ダメだヨ……、お尻が引つかかっている。」

「むう、ダメか……、絶対なんかあるんだよなあ……」

私は穴から出てパンパンと埃を払う。

「しゃあない。戻りますか。」

私はそう言ってハシゴを登る。

「あー、ムカつくぜ……！！」

私がハシゴを登り終え、地上に出てきた瞬間、そんな声が聞こえてくる。

「?あのどうしたんですか?」

私が声をかけると、オルゴール?のようなものを回している男はイライラしながらこう答える。

「ああ、すまねえ。いやな、俺は風車の下で働いてるんだが、7年前、あんたみたいな女の、オカリナ持ったガキが急に現れ、おかしな曲を吹いたかと思うと、もの凄く速さで風車が回り出す始末。まったく!忘れもしねえこの曲さ。なああんた、聞いちゃくれねえか。」

「え?あ、はい。」

私は思わずそう答える。

男はオルゴール?を回して今日を奏でる。

嵐のような荒々しさを持つメロデイが響いた……

「……………すまねえなあんた、俺の愚痴を聞いてもらって。おかげで7年前、井戸まで枯れちまってあんな化け物が出る始末よ。くそつ、ガノンドロフが現れてからこの世界はどうなっちまったのかね。」

……………そうか。

7年前。全て合致した。

「ねえ蓮子、どういふことかな？」

私たちはカカリコ村の出口に向かいながら会話する。

「あれやったのは多分私よ。」

「え？」

ナビイは小首を傾げる。

「多分未来のことを知ってる私が過去であの曲を吹いて井戸を枯らしたんだ。そうしないとおの井戸の底の穴に入れないから。多分そこで何かを手にする……んだと思う。」

「なら、あの化け物は……」

「さあね。でもあの化け物を封印しているのが水だったら私が井戸を枯らした瞬間に出てきてるわよ。だから多分大丈夫。」

「で、でもちよつと待って！7年前って、どうやって戻るの？」

「その点については心配ないわ。ほら、シーク、時の神殿で言ってたでしょ？あの台座にマスターソードを戻せば、7年前に戻るって。」

「あ、そうか！」

「よし、そうと決まれば！」

私とナビイは顔を見合わせて、

「行くぜ、7年前！」

第23話 潜入、井戸の底！真の瞳を手に入れろ！

「ふうっ、便利ね、これ。」

私はオカリナをポンポンと投げてはキャッチを繰り返す。

私は「光のプレリユード」を奏でて一瞬で光の神殿へと戻ってきた。

さあて。さっさと片付けましょうか。エポナも待たせてるし。

私は台座の前に立つ。

「これで本当に戻れるのかな……」

ナビイは訝しむように声をあげる。

「んー、大丈夫でしょ。多分。」

私はマスターソードを引き抜き、

「よっ!!」

台座に押し込む。

瞬間、私の意識が飛んだ。

「……………?」

私の意識が戻った時には、私は子供の姿でマスターソードを掴んでいた。

「おお……………」

「戻った!」

私は子供の高い声でガッツポーズをとる。

「じゃあ蓮子!早くカカリコ村に行かなきゃ!」

「そうね、そうと決まりや、さっさと行きますか!」

私はコキリの剣、デクの盾に持ち替え、時の神殿を後にする。

「よし……………」

私たちは7年前のカカリコ村へと戻ってきた。

まだ井戸の柱は健在で、村は平和そのものだった。

「よし、吹くわよ……………」

私はオカリナを構えて「嵐の歌」を吹く。

瞬間、村の風車が猛烈な勢いで回り出し、井戸の水がどんどん枯れていく。

「よし、やっぱり！」

私は喜びの声をあげる。

「お、おい！その嬢ちゃん！今何したんだ?!」

すると、私に7年後に「嵐の歌」を教えてくれた人が私に話かけてくる。

「悪いわね！やんなきゃいけなかったの！」

私はその男性に謝って、井戸に飛び込む。

「よっ……………てて……………」

ふう。

私は落下の衝撃でじんじんする足をさする。

「よし、やっばあるわね。」

私は再び穴に入ろうとする。

「よし、今度は入れる……!」

今度は引つかかることなく、するすると穴に入ることができた。

「来たわね、井戸の底に……!」

ジメジメとした感じとずしりとのし掛かる圧力。

ゾツとするわねこりやあ……

私は剣を構えたままジリジリと奥に進んでいる。

「ねえ蓮子。あなたが言うメリーってどんな人なの?」

「へ?」

私は思わず抜けた声が出てしまう。

「なんでそんなこと聞くのよ。」

「だって、あなたがそんなに想ってるんでしょ? 私も気になるヨ。」

「……………メリーは」

私は思い出すように語りだす。

「こつちに大学ってあるかな?」

「学校ってこと? 城下町にはあるんじゃないかなあ?」

「私はそこでメリーに出会ったの。忘れもしないわ。その前は、いや、今もだけど。秘封

倶楽部っていうサークル、所謂集まりね。まあ今も私とメリーしかないんだけどさ。」
「その秘封倶楽部ってところで何をしてたの？」

「そうね、墓暴きしたり、里帰りしたり、メリーの夢の話を聞いたり、月面行こうとしたりとか、宇宙ステーションに行ったりとか……、ほんとに色々やったわ。その度にふざけたことやつてメリーに怒られてたっけ……、メリー、元気にしてるかなあ……、そうだ、1日後に帰る、とか見栄張つて言っちゃったな、そーいや。」

私はふっ、と吹き出す。

「でも、なんか不思議なことを言うのよね、メリーは。なんだか私のことを見透かしてる、違うな。これから起こることがわかってるみたい……」

ま、どうでもいいか。

「好きなの？メリーって人。」

「そうね。親友だと胸を張つて言えるのはメリーだけかな。張れる胸はないんだけどね……」

私は涙目で言う。

「げ、元氣出して蓮子！」

「そうよ！まだ成長期が来てないだけなのよ！30歳になったらグラマーなだいなまいとほでいになる！いつかボンキュッボンになる……っ！！」

「その前にガノンドロフを倒さないとそれも叶わないよ……」

「そうよ!それもそうだ!さつきとガノンドロフぶつ飛ばしてメリーの元へ帰んなきゃ!」

私は気合を入れなおす。

すると、ナビイの方を見て前を向いていなかった私は宝箱にぶつかって尻餅をついてしまう。

「んん?なんだこれ……」

私は体重をかけて宝箱を開ける。

「メガネ?虫眼鏡?」

私は紫のメガネ、否、虫眼鏡を拾う。

「それはまことのメガネ!真実を見抜く目だと言われているヨ!」

「真実を……?」

なんじゃそら。まさか服が透けるとかいうえっちいものじゃあ……」

私はメガネを握りつぶそうとするが、一旦落ち着き、とりあえずメガネを覗き込んでみる。

「あれ?」

さつきまで壁だったものが消えてる。

ちなみに自分の服を見てみたら透けてない。うん。大丈夫。ほっ……

「もしかして、これであの時井戸から出てきたやつが見えるようになるのかな？」

「たぶんそうよ蓮子！大収穫じゃない！」

「よし、んじやあこんなジメジメした場所、さっさと出ましようか。」

私はきた道を引き返す。

「よっ……………」

私はハシゴを登って地上に出てくる。

「こいつであいつにも勝てるぞ……………っ!!」

「……………ねえ蓮子。なんであなたはそんなに強くなってるの？」

「へ？なんでって……………、いろんな奴と戦ったからでしょ。たぶん。」

「にしては成長が早すぎるヨ。もともと勇者の力が宿つてるとはいえ……………」

「ん……………？通信教育で空手と柔道と合気道はマスターしたわ。たぶんそれでしょ。」

「どこの教授……………？」

「ヴァルバジアの時もヴァルバジアが出てくる穴がわかってたみたいだし……」

「だからなんとなくだって。私にだってどうやったかわかんないわよ。あんたも、その羽根どうやって動かしてるか説明できる?」

「そりやできないけど……」

「でしょ?それと同じようなこと。」

私はやれやれと首を振る。

「そういやメリーが言ってたわね。夢の中で人に会ったときに、「小さな気を感じて来てみたら、こんなところじゃ危ないですよ」とか……、赤い髪の女の人に言われたって。それで紅い館でお茶を……馳走になったとか……。私もそれと同じなのかな?ま、関係ないか。」

私は頭をかく。

そうこうしているうちに時の神殿のマスターソードの台座に戻ってきた。

「よし……!」

私はマスターソードの柄の部分に手をかけて、思い切り引き抜く。

その時、私の意識は再び飛んでしまう。

「ふうつ、戻ってきた……」

私はマスターソードを引き抜き、鞘に納める。

ちゃんと体は大人に戻っていた。……胸は……うん。
まことのメガネもしっかり懐に入っている。

「よし、あとは……」

私はオカリナを構えて、「闇のノクターン」を奏でた。

私は墓地、闇の神殿前に出てきた。

「うぐ、やっぱり雰囲気あるなあ……」

私は闇の神殿へと入っていく。

「あれ?」

私が入ったところは、大きな扉の前でたくさんの燭台が並んだ部屋だった。

「んん………? どういうことだこれは………? もしかして、これに全部火をつけろってこと………?」

にしては多すぎる。

「………まあ地道につけるしかないか………」

私は炎の矢などで試してみたが、すぐに火は消えてしまい、とてもすべてつきそうにない。

「ねえ蓮子、私、ラウルさんが蓮子の懐に何か入れてたのを見てたヨ。ねえなにかラウルさんに入れられなかった?」

え?

そんなの入れられたかなあ。

私は懐をゴソゴソと探してみる。

すると、3つの結晶のようなものが見つかった。

「あつた。これかな？」

「あつ、蓮子！それはそれぞれフロルの風、デインの炎、ネールの愛だヨ！」

「それって、あのハイラル作ったっていう女神様の？」

「うん！デインの炎は周囲に炎のドームを作って、フロルの風はダンジョンの中ならポイントをセットしておけばワープできて、ネールの愛はちよつとの時間だけどダメージを受けなくなるの！」

へえ。

そりやすごい。

………つて、そのデインの炎ならこれを全部火をつけられるじゃん。

もうちよい早く言ってくれよな……

「よし、………」

私はデインの炎を持って、思い切り地面に拳を落とす。

瞬間、私の周りに炎のドームが現れ、全ての燭台に火が灯った。

それと同時に、大きな扉が重い音を立てて開いた！

「よし、開いた!!」

私はガッツポーズを決めた。

よし、
……
……行くか、
闇の神殿!!

第24話 ハイラルの深淵！闇の巨人、ボンゴボンゴ！

「うっ……」

神殿に入った私の鼻孔を刺激したのは、何故か腐臭であった。

「なんでこんな臭いが……」

私がこう零すと、

「ここは昔、処刑場として使われてたって噂を聞いたことがあるヨ……」

「処刑場？ほんとに？」

「いや、噂だから、本当かはわからないヨ……」

「そっか……」

私が先に進んでいると、いきなり壁にぶち当たってしまった。

そこは一本道であり、ほかに通路も見受けられない。

「あれ、行き止まり……？」

「ううん、違うヨ！ここは多分、真実の目を使えば……！」

そうか。「まことのメガネ」か。

私はまことのメガネを覗き込んで壁を見た。

すると、先ほどまで壁だった場所は、透けて向こう側が見えるようになった!

そうか。これが本物の通路なんだ。

こういった偽物を見せてくるのか。

よし、行きますか……!

私は壁に見える通路を抜ける。

するとそこは船着場のような場所だった。

「なにこれ……船?!

そこには大きなガイコツが船首にくつついた大きなガレオン船が停泊していた。しかし水で満たされているというわけではなく、空気があるだけで、つまり宙に浮いている状態なのだ。

「まあ、とりあえず乗るしかないか……!」

私は船に乗り込む。

「……あれ、動かないな。」

操縦しろってわけじゃないし……

舵輪がついてない。おそらく操縦は出来ないのかな?

「蓮子、オカリナを吹け!」

すると、そこに1人の女性が現れる。

「インパさん！」

インパさんは大きな太刀を背負っていた。

「そうか、ゼルダの子守唄……！」

私は下にトライフォースの紋章があることに気付いた。

私は時のオカリナを構えて、ゼルダの子守唄を吹いた。

瞬間、船が動き始める。

「おお！動いた！」

「それにしても、蓮子、何故ここに……？」

「そうだ、私はシークに頼まれて、インパさんの手助けを……！」

「そうか。すまない。……よくここまで来れたな。」

「はい。「まことのメガネ」がありましたから。」

「なるほど。助かる。闇の巨人、ボンゴボンゴは私一人では手に余る。」

「大丈夫ですよ！2人ならきつと勝てます！」

私は力強くインパさんにそう言う。

瞬間、船にガイコツの騎士が上から降ってきて、乗ってきた。

「な、なんだこいつ?！」

私は慌てて剣を構える。

「ねえ、れ、蓮子…この船落ちちゃうよ!早くどこかに飛び降りて!」

ええ?!

そ、そんなこと言ったって……

私は周りを見るが、飛び降りれるような足場は無かった。

ナビィの言う通り、船の進行方向には大穴が開いている。

「くそつ、とりあえずこいつを……!!」

私はジャンプをしてマスターソードを振りかぶり、

「渾身斬り!!」

私はガイコツ騎士に渾身斬りを浴びせ、ガイコツ騎士を砕く。

「れ、蓮子…どうしよう!もう間に合わない!!」

「ど、どど、どうしよう?!」

私が慌てふためいていると、インパさんが私を抱えて、船からだいぶ離れた足場に飛び移った。

「い、インパさん、ありがとうございます……!」

「蓮子、強くなつたな。あのスタルフォスを一撃とは……」

「いやいや、インパさんがいなかったらあのままお陀仏でしたよ。」

私は冷や汗を拭う。

「それと、こんなものを見つけたんだ。何かに奴立つのならないんだが……」
インパさんはブーツを1セット私に渡してくる。

「蓮子、それはホバーブーツ！3秒くらいなら宙に浮かべるよ！……滑りやすくなるケド。」

ふーん。すごいな。

……多分使わないな。これ。

私はとりあえずそれをしまつて、

「インパさん、そのボンゴボンゴってのは……」

「おそらくこの先だ。邪気を感じる。気を引き締める蓮子。」

「……はいー」

やっぱりインパさんはカッコいいなあ……

私とインパさんは近くの扉を開け、奥に進んでいった……

「……は……」

私たちはまた穴の空いた部屋にやってきた。

「こつちだ蓮子、飛び降りるぞ。」

「あ、はい!」

私はインパさんに続いて穴に飛び降りる。

「うわっ!!」

すると、ボウン、という太鼓のような音とともに私とインパさんの体は数十センチ浮かび上がった。

「うおつとつとと……」

私は跳ねる体を抑えてどうにか地面に立つ。

「(っ)は……」

そこは毒のエネルギーが充満してる床に、ドクロがたくさんついた太鼓のようなものが浮かんでいる空間だった。

すると、私たちの体がまた跳ね上がった。

「うわつとと!!なにこれ?!!」

私はバランスを保つのに必死になっていた。

すると、

「れ、蓮子!!あれあれ!!」

ナビイが向いている方向に私は視線を移す。

そこにはなんと、両手と胴体、頭部が無く大きな赤い眼球が首に埋め込まれた巨人が手で私たちが立っている太鼓を打ち鳴らしていた。

「なんじやありやあ?!」

「あれが暗黒幻影獣ボンゴボンゴ……!!蓮子行くぞー!」

インパさんがそう叫んだ瞬間、ボンゴボンゴの胴体がスーッと消えていった。

「くそつ、やるしかないか……!!」

私はボンゴボンゴの手が太鼓を叩くせいで生まれる振動によって体を跳ねあげられながら、マスターソードを構える。

「でもちよつと……、反則っぽいよなあ……」

第25話 リミットブレイク!!超究武神覇斬!!

「さて、いきなり参っちゃったな……」

私は剣を構えたままそう零す。

「まずは見えてる手を潰すしかないか……!!」

私は地面を蹴ってボンゴボンゴの右手目掛けて剣を振るうが、あっさりボンゴボンゴ本体が動いて避けられてしまう。

「うわっ、とっ、とっ、とっ!!」

私は太鼓の端っこまで跳ねて追い込まれてしまった。

というか私が勝手にそこまで行ってしまったのだが。

瞬間、私の汗が額から流れ落ち、太鼓の外の毒に滴り落ちた。

直後、ジュツという音とともに煙が上がった。

「うひゃあ……落ちたらひとたまりもないな……」

私はボンゴボンゴがドンドンと太鼓を叩くためびよんびよん跳ねながらそう零す。

「トランポリンみたいね……」

私は盾を構えていない左手で帽子を抑えながらボンゴボンゴの手を睨む。

やっぱり色々戦い方を変えた方がいいのかなあ……

マスターソードは両手で持つにしちやあ短いから……、まあ両手剣じゃないし当たり前か……

というかなんで私は今の科学世紀には無縁の剣なんてメルヘンチックなものを振り回してるんだ……？

もつとこう、銃とかあるでしょ……？

「じゃあないか、この世界じゃあこれが一番なんだし。」

むこうに戻ったら捨てればいいや。

……でも捨てるのもつたいないな。飾つとこうかな。

「蓮子、気を緩めるな！来るぞ!!」

インパさんが声を荒げたため、私ははつとして持ち直す。

ブーツとしてたので、私は迫り来るボンゴボンゴの手に気づけていなかった。

まあ、インパさんのお陰で事なきを得ただけだ。

「こいつでどうだ!!」

私は避けた瞬間にマスターソードをしまい、弓に矢をつがえ、引き絞って放った。

矢はボンゴボンゴの手を捉え、ボンゴボンゴの手が怯んだ。

「蓮子避けろ！突っ込んでくるぞ!!」

インパさんがまたしても声を荒げる。

それにしても、突っ込んでくるってどういうことだろう。

手はぶらーんとして何かしてくるようには見えないけど。

瞬間、私は何かに跳ね飛ばされ、そのせいで、マスターソードが吹っ飛んで天井に突き刺さってしまった。

「あ、やべ……」

私はなんとか太鼓から落ちなかつたが、マスターソードを失ってしまった。

「あちゃー……、忘れてた……。あいつの本体は見えなくなってるんだっけ……」

「そういや忘れてたな……」

「それよりも……」

「参ったな……剣が吹っ飛んじやった……」

私は乾いた笑いを浮かべた。

「蓮子、こいつを使えないよりマシだ!」

すると、インパさんは自身の大太刀を引き抜いて私に投げってくる。

「うおつと!!重つ!!」

それは私の身長、否、それ以上に長い刀身を持った大太刀であり、凄まじい重さだった。

持てないわけじゃないけど……

これじゃあ盾を構えられないな。

私はなんとか両手で持つのが精一杯で、片手でこれを振り回すのは無理があった。

「それでもやるつきやない!!」

私はまことのメガネをかけて、ボンゴボンゴ本体を視認する。

「もう一度突っ込んでくるぞ蓮子！構えろ!!」

よし……、今度は吹っ飛ばされてたまるか！

私は突っ込んでくるボンゴボンゴの目にインパさんの大太刀を突き立てる。

「よし、効いてる!!」

私は怯んで太鼓に突っ伏したボンゴボンゴに大太刀で何度も斬りつける。

「くそう、重い……っ!!」

私は息をきらしながら必死に連続で目玉を斬っている。

が、それはほかのことへの注意を散漫にしていることと同意義なのだ。

私の体はボンゴボンゴの右手に掴み取られてしまった。

「うそっ?!」

私は当然反応できずに、手に囚われてしまった。

「うっ、くっ、うああ……っ!!」

私の体はボンゴボンゴの手が締め付けるため、ミシミシと嫌な音を立てている。するとボンゴボンゴの手は大きく振りかぶり、私を投げ飛ばした。

「うわっ!!」

私は壁に思い切り叩きつけられ、激しく吐血する。

「いつ、てて……、ちくしょう、なんでか弱い女子大生の私がこんなに怪我せにやならんのやら……」

私が恨めしそうにぼやくと、ボンゴボンゴの拳が飛んできた。

「が………っふ………!!」

ボンゴボンゴの拳は私の肉体を完璧に捉え、私は壁とボンゴボンゴの拳でサンドされてしまう。

そのせいで、まことのメガネがひび割れ、ダメになってしまった……

「ぞ、そんな！まことのメガネが！」

ナビイが絶望じみた声をあげる。

私にとどめを刺そうとボンゴボンゴの手は再び拳を振りかぶる。

が、インパさんが苦無でそれを止める。

「蓮子、しっかりしろ！息はあるか?!」

インパさんは私に声をかけてくる。

「な、なんとか……!!」

私は軋む体を動かそうとして、ロングフックを取り出した。

瞬間、インパさんはまたなにかを見つけたのか声を荒げた。

「まずい、蓮子！避ける！奴が突っ込んでくる！」

「くそっ……、ふざけやがって……、こうなったら、イタチの最後っ屁だ……、喰らえ!!」

私は目を閉じて、ボンゴボンゴの気配がする方にロングフックを構えて、ロングフックを発射した。

ロングフックは見事に引っかかったのか、私は壁から脱出し、ボンゴボンゴの方へ引き寄せられていく。

「限界を……超えるっ!!」

私は大太刀を両手で構えて、振りかぶる。

「おらああああっ!!」

私は大太刀でなんどもボンゴボンゴを斬りつけ、ボンゴボンゴ本体を蹴って上に飛び上がり、剣を上段に構える。

「喰らえ……超究武神覇斬だ!!」

私は剣を振り下ろし、ボンゴボンゴにとどめを刺した。

「くっ!!」

私は太鼓に叩きつけられた。

刹那、ボンゴボンゴは狂ったように太鼓を叩き始め、そのまま大爆発を引き起こした。そのおかげで、マスターソードが刺さっていた天井が崩れ、マスターソードが落下してきた。

「へへっ、やり……!!」

私は勝利を確信して、意識を手放した。

「……………流石だな、蓮子。見直したぞ。」

第26話 最後の神殿へ！いざゲルドの谷！

「……………あれ、こゝは……………」

私はまた賢者の間で目覚めた。

「……………蓮子、よくやったな。」

「インパさん……………」

私が目覚めたその先には、インパさんが優しく、力強い瞳で私を見つめていた。

「我々シーカー族は代々ハイラル王家の僕として使えてきた……………、しかし、7年前のあの日、ガノンドロフの突然の襲撃……………、ハイラル城は敢え無く陥落した……………。奴の目的は聖地への鍵の一つ、時のオカリナだったのだ。」

そうだ。そして私が聖地を開いてしまったから……………

「私の役目はゼルダ様をガノンドロフの手の届かぬところへお連れすることだった……………。その逃亡の途中だったな、お前と最後に会ったのは……………。7年で見違える程強く、立派な勇者になったものだ。」

「勇者だなんて、私はそんな……………、大層な名前をつけられる程じゃないですよ。狡くて臆病な女なんですから。」

「……………少なくとも私が思う限りでは私はそうは思わん。お前は我々の為に血と汗を流してくれている。それには大層勇気が必要なことだ。お前は人より劣つてなどいない。自身を持って蓮子。お前ならばガノンドロフに打ち勝てる。私は確信しているのだ。」

「……………そう、なんですかね……………」

「そういうえば、言い忘れていたな。ゼルダ様はご無事だ。まもなくゼルダ様はお前の前に現れ、全てを語られるだろう。その時こそが我ら六賢者が魔王を封印しハイラルに真の平和を取り戻す時なのだ!」

「私はここに残らねばならない。ゼルダ様をお守りする役目が果たせなくなってしまうのだ。蓮子、お前にゼルダ様を守ってほしいのだ。」

「……………会えるまでは約束できないですけど、会えたらきつと守ってみせます、だから、安心して下さい、インパさん。」

「そうか。ではお前に我が力を託す!これを受け取れ!」

すると私の手の中に紫のメダルが収まった。

「……………ゼルダ様を頼んだぞ!」

「……………はい!!」

私は力強く返事をする。

するとインパさんは小さく頷いた。

それと同時に、私の意識は暗転した。

「あ、いってて……………」

私は思い体を動かしてどうにか立ち上がる。

どうやらカカリコ村の墓地に戻ってきたようだ。

「蓮子、これで神殿はあと一つだね！がんばろう！」

「うん、最後の神殿もよろしくねナビィ！」

「もちろん！」

「……………あ」

「えっ？」

そうだ。

私はポケットの中を探る。

「これ、忘れてた……………」

まことのメガネ。ボンゴボンゴと戦つてるときに割れちやつたんだ…………

「あ、そういえば……」

ナビイも思い出したようだ。

「これ、どうしよ……」

「うーん……、それなら、山の上のダイゴロンにお願いしてみたら?」

「ダイゴロン?」

なんじゃそら。でっかいゴロンのこと?

「インパさんの剣もダイゴロンが作ったって聞いたことあるの!」

へえ。あの重たい剣はそいつが作ったのか……

「これも直してもらえるのかな。」

「うーん……わかんないけど、とりあえず行ってみようヨ蓮子。」

「そーね。そうしますか。」

こうして私たちはデスマウンテンを再び登り始めたのであった……

「うひゃあ……」

私は思わずそう口にしてしまう。

それは普通のゴロンとは比べものにならないほど巨大なゴロンであった。まんまだがこれが「ダイゴロン」なんだろう。

「おめえはたしか……、ドドンゴバスター兼ドラゴンキラーの蓮子ゴロ？」
なんか変なあだ名また増えてる……

「なんか用ゴロ？」

「あ、そうだ。これ、壊れちゃったんですけど、直せます？」

「うーん……、ワカンねえゴロ。まあでもやってみるゴロ。」

ほっ……

「それよりおめえ、使ってねえ剣が一本あるだろ？見せてみる。」

へ？

コキリの剣のことかな……

私は少々疑問に思いながらコキリの剣を手渡す。

「オラ、ついでにこいつを鍛え直してやるゴロ。」

ええ?!

「ほ、ほんとに?！」

「なあに、オラたちを助けてくれた礼ゴロ。新しく剣も一本打ってやるゴロ。」

うひょー!! 流石はダイゴロン! 凶体だけじゃなく器もデカいつ!!

「それじゃあ一日くらい待ってほしいゴロ。急いで取り掛かるゴロ。」

「1日か。ゴロンシテイにでも泊まらせてもらおうかな。」

「わかりました。よし、じゃあ行こっか、ナビィ。」

「あ、うん。」

「おお、おはようゴロ。例のやつ、出来てるゴロ。」

「直ったの?!」

「一応直しはしたから、見てほしいゴロ。」

受け取ったまことのメガネは綺麗に直っており、くつきり見える。

「それと、この剣と、ダイゴロン刀、サービスゴロ。」

ダイゴロンはインパさんが担いでいたような大きな剣とコキリの剣だった剣を差し出した。

「まず一本……」

私はコキリの剣だった剣を引き抜く。

すると刀身は1・5倍程に伸びており、金ピカの剣があった。

「金剛の剣とも名付けておくゴロ。それはいくら斬つても絶対刃こぼれしないゴロ。金を使用しているゴロ。」

おお……軽くて持ちやすい。

二刀流にしてもカツコいいかもね。

これを受太刀にして、マスターソードで斬る、とか。

「いいなあ……」

「そしてそれはダイゴロン刀。重くてなかなか持てないが凄まじい威力を誇る一振りゴロ。」

うーん、確かに片手じゃ持てないな。

でも両手剣にしたら破壊力やばそうね……

うーん、臨機応変に使いわけろってことか。

「ありがとうございます！」

私は金剛の剣とダイゴロン刀を背中に背負って、踵を返す。

「気をつけてゴロ〜」

ダイゴロンが小さな白いハンカチをヒラヒラさせている。

久しぶりだなあ、そんな見送り方見たの。

「さあて、最後はどこにあるのナビイ?」

「あ、うん。最後は砂漠、ゲルドの谷にある魂の神殿だヨ!」

魂の神殿か……

なんで今まで属性系の神殿だったのに魂になるわけ……?

魂属性ってこと……?」

……関係ないか。

私はエポナを操りながらそう思案する。

ん、もうすぐみたいね。

周囲の景色がゴツゴツした岩場へと変化してきた。谷が近づいてるようだ。

「よし、もうひとつ走りお願いねエポナ!」

私はエポナを撫でる。

「あちゃあ……」

谷。もうすぐそこに住むゲルド族の砦に出る、とナビイは言っていたのだが……

「橋が落ちてる……」

対岸に行くための橋が落ちてしまっていた。

橋の下には数百メートルの落差がある大きな谷になっている。

下には川が流れているが、落ちたら痛いじゃ済まなさそうだ。

「参ったなこりゃ……」

「蓮子、どうしよう……?」

「こっとなつたら……!!」

私は橋と距離を取り橋と一直線上にエポナをつける。

「れ、蓮子、どうする気?!」

「突っ切る!!」

「へ?」

ナビィからそんな声が出てしまう。

私はムチを使ってエポナを加速させる。

「あわわわわ!!落ちる!!落ちるヨ!!」

「大丈夫!多分!」

私たちはどんどん橋に近づいていく。

「よし、エポナ、ジャンプ!!」

私の声に合わせてエポナが飛び上がる。

そして、橋にできた穴を飛び越えて、見事対岸に着地できた。

「おお……!」

ナビィは私の帽子の中で震えていたが、恐る恐る帽子から出てくる。

「蓮子凄い!勇氣あるわネ!」

へへ……

なんかナビィとの距離がだいぶ縮まった気がする…

「よっし、さっさと魂の神殿、攻略するわよ!!」

「うん!」

そして、私はエポナを走らせる。

第27話 大脱出、ゲルドの砦！

「……………」

「……………」

「……………ねえ、蓮子」

「……………なんでしようナビイさん」

「……………どうしてこうなった」

「……………知らんがな」

「……………知らんがな……………じゃないでしょ?! 私たち牢屋にいるんだヨ?!」

そう。ここは砂漠前の砦の牢屋。しかも離れという特別サービスだ。

「エポナとも逸れちゃったし……………」

「元はと言えば蓮子、あなたがなんの警戒もなくエポナで砦を突っ切ろうとしたから……………」

……………」

「だって、盗賊団だったなんて知らなかったんだし。」

「それでも武器持って見張りしてるんだから一応警戒しようヨ……………、聞くとところによる

と橋を落としたのも盗賊団らしい……………」

「まあとりあえず、脱出しますか。」

「えっ? 脱出つて、どうやって……」

私はちよいちよいと人差し指で上を指差す。

そこには大きな窓が開いており、木でできた蓋のようなものがある。

「ほいっと。」

私はロングフックを蓋に刺して窓に飛び移る。

「うわあ! 凄い凄い!」

警備は凄いけど、牢屋はザルね……

私はそう思案し、下を見下ろす。そこには沢山の女たちが薙刀を持って警備に勤しんでいた。

「よし、スナイプしてやるわ……」

私は帽子を目元が隠れるくらいまで深く被り、弓矢を構える。

「鉄が食べたいんならそう言いなさいよね……!!」

私は弓に矢をつがえ、よく狙い、矢を連続で放つ。

矢は寸分狂わず命中し、女たちは気絶してしまった。

「はいー丁〜」

私は帽子を元の位置に戻す。

「S & W M19コンバットマグナムが欲しいなあ……」
「なあにそれ。」

これを持ってきつきの撃ち方すると完全にアレになるからね……、向こうに帰ってからだと銃刀法に引つかかるし。

「銃よ、銃。カッコいいじゃんアレ。」

私はロングフックで近くのドアにフックを突き刺し、そこに飛び移る。

「よし、……」

私はドアをゆっくり開けた。

「あつ、あなた、誰?!」

するとそこにはオカマ口調で話す男の人が4人ほどいた。

「あたいたちここに捕まつてるの!カギ持ってない?カギ!」

「んなもん持ってないわよ……。私もたつた今牢屋から逃げてきたばっかだし……」

すると、私の後方から殺意を感じ、私は咄嗟に身構える。

「くっ!!」

私が剣を抜き放ち、間一髪その太刀筋を見切る。

「あつぶないわね……。いきなりなにすんのよ!」

「ふふん……」

他の盗賊とは少し格好が違うその女は不敵な笑みを浮かべて、サーベルを二本抜く。

「ああそうーあんたがやる気ならこっちもやってやるわよ!!」

私はマスターソードとハイリアの盾を構える。

「そらっ!!」

女は二本のサーベルで斬りかかってくる。

私はそれを盾で防ぎ、女の腹部に蹴りを入れる。

「ちっ!!」

女は仰け反り、飛び退く。

私はそれを見逃さず、盾を投げる。

「うっ!!」

女は盾を避けるため、身体を右に逸らす。

盾は壁に深く突き刺さった。

女の注意が盾にいった瞬間を逃さず、私はマスターソードで思い切り突きを入れた。

そのせいで、壁が崩れてしまう。

「……………くっ、参ったよ。あたいの負けさ。」

私は女盗賊の顔面から左に数十センチずれたところに剣を突き刺していた。

「んじゃあこの檻のカギちよーだいよ」

私は左手を差し出す。

「……………ほら、持っていきな」

女盗賊は大人しくカギを差し出した。

私はそのカギで檻を解放する。

「おお！オネエチャンありがと！アタイらやっと帰れるワ！」

「……………そーすか」

私は呆れ気味に答える。

オネエたちはルンルンと帰っていった。

「アンタ、なかなかやるじゃないか。ここの守りを突破するとはね。」

すると、先ほどの盗賊が話しかけてくる。

……………油断して捕まったばっかだったとか言えないな。

「は、はあ。」

「アタイはナポール様からこの砦を任されてる者さ。」

「ナポール？」

「ナポール様はガノンドロフ様の右腕。ゲルド族の首領さ。」

……………じゃあそいつが今回の敵なのかな。

「ふんふん、それで？」

「今は魂の神殿においでなのサ。あんた、アタイらの仲間になりたいんだろ？」

「へ？」

私は思わず抜けた声が出てしまう。

「いや、そんなんじや」

「いいんだ皆まで言わなくなつて。ほら、これで砦を自由に歩けるよ。」

……会員証を半ば強引に渡された……

まあいいか。この先は砂漠っぽいし、ここにエポナを預けて行こうかな。

「そういや、さつきそこら辺にいた馬、アンタのだろ？アタイらが保護してるヨ。今は厩舎にいるだろうから。」

そっか。よかつた。

「そういや、この先は「真実を見る目」がなきゃいけないらしいよ。気をつけな。」

「真実を見る目」……まことのメガネか。

私はまことのメガネをかけて、外に出る。

「うひゃあ……」

私は大きな開閉扉を前に開いた口が塞がらない。

ガインガインという音とともに木でできた門が開いていく。

その先には、広大な砂漠が広がっている。

「うわあ……」

暑い…

私は我慢しつつ先に進んでいく。

砂の吹雪に打たれ、砂の大河に飲まれないように苦勞して、オバケにビクビクしながらも、なんとか私は巨大な邪神像の前までやってきた。

どうやらこの像が神殿になっているらしい。

私は疲れた身体に鞭打って、像内部に侵入する。

まず出たのは大広間。目の前には階段と分かれ道。

それより、私が考えていることは一つだった。

「疲れた……」

「たしかに疲れたネ……」

こんなにも砂が吹雪いているとクチの中がジャリジャリになってしまふ。

イライラするので、毎度毎度飲み水で軽くうがいをしていたのだ。

「まあ、とりあえず神殿に着いた。それでよしとしましょう。」

私はため息をつく。

そこで気付いた。

右の道は大岩が塞いでいる。

恐らく押ししてもビクともしないだろう。

一方左の道は小さな穴が開いているだけ。

また前みたいにお尻がつつかえる事態になるのが目に見えている。

「参ったな……。これじゃあ神殿攻略出来ないじゃん……」

まさかとは思いますが、また子供の姿でここに来ないといけないのだろうか。

そう考えるとゾツとする。

またあのクチがジャリジャリになりながら、今度は往復しないといけないのだ。

そして私の口から出るのはため息である。

「どうしよう蓮子、手がつけられないヨ……」

「しょーがないわ。ナビィ、とりあえず出よう。」

私はとぼとぼと神殿から出る。

私が神殿から出た直後、聞き覚えのある声があった。

「過去、現在、未来……。君の持つマスターソードはその流れを旅する舟……。時の神殿にその港はある。」

「……やっぱりあんたねシーク。今日もむずかしいお話でしょう?」

「……まあ聞け……」

「……なんだろう、少し呆れられた気がする。」

「砂漠の邪神像を魂の神殿として復活させるには時の流れを遡らねばならない。」
やっぱりか……

「幼き者を砂漠に誘う調べ、魂のレクイエムを聞くがいい……」

そう言うとしークはハープでまた音楽を奏で始めた。

……魂が癒されるような音色が響いた……

よし、覚えた……気がする。

「よし、今日という今日は逃がさないよ!!」

私はシークに不意打ちで近づこうとするが、砂煙が舞い、それが晴れた頃にはもうシークの姿はなかった……

「ちえっ、また逃した……」

さて、しょうがない。時の神殿に戻りますか。

「はあっ、はあっ……」

めんどくさかった……

時の神殿の台座にマスターソードを刺し、うろ覚えの魂のレクイエムでどうにか戻ってこれた……

やれやれ。

まあでも、コキリの剣より長くて少し重いけど、これも強そうね。

私は金剛の剣を見る。

その刀身はキラキラと金色に煌めいていた。

さて、魂の神殿、再突入しますか！

「あれ？」

左の道の穴の前に誰かいる。

「ねえナビィ。あれ誰だろ？」

「うーん、とりあえず話しかけてみようヨ。」

「あの……」

私が話しかけると、そこにいた女性は振り返り、

「おや、見慣れない子供だね。ここに何の用だい?」

うっ

どうしよ。賢者探しにきた、だなんて信じてくれなさそうだし……

「べ、別にこれといった用は……」

「そうか!用がないなら丁度いい!アタイの頼みを聞いておくれよ。」

へ?

「つと、その前にあんた……、ガノンドロフの一味じゃないだろうね?」

「んなわけないでしょ!!」

私は少し怒気を孕んだ声色でその女に言う。

「ふっつ、そうかい。あんた、いい根性してるな。……アタイはナボール。一匹オオカミの盗賊さね。」

ナボール……

そうか、こいつが敵か……

私がゆっくり剣に手をかけようとしていると、

「けどね、勘違いするんじゃないよ!大勢で寄ってたかつて弱いやつから物を盗んだり、人殺しするガノンドロフとは違うんだ!」

あれ?

さっきの盗賊はガノンドロフの右腕とか言ってたような……
気のせいかな。

「あんたは知らないかもしれないけど、アタイらは女だらけの民族。男が生まれるのは100年に1人さ。」

へえ、そうだったんだ。

「そうして生まれたゲルド族の男は王になれる「掟」だが、アタイはあんな奴認めないからね！……さっきから自分の話ばかりすまないね。あんた、なんて言う名前だい？」

「……………蓮子。宇佐見、蓮子です。」

「蓮子？へんな名前だねえ……………」

そこまでヘンじゃねーだろ……………」

「ま、いいや。アタイの頼みつてのは、このちっこい穴をくぐって、その先にある「銀のグローブ」を取ってきてほしいのさ。」

「そいつは重いもんでも押ししたり引いたりできるすんごい代物さ。おっと。そいつを横取りしようたってそうはいかないよ。「銀のグローブ」は子供が装備したって意味ないのさ。大人しくアタイに渡すこったね。」

するか！

私は内心でそう叫ぶ。

「そいつがあれば、あっち側から神殿の奥に潜り込める。そこのお宝をたんまりいただいて、ガノンドロフの鼻を明かしてやろうって寸法さ!」

なるほど。

「どうだい? もちろん礼はするよ。やってくれるかい?」

……うーん、結局私も神殿の奥に行かないといけないし……

「わかった。行ってくるよ。そこで待ってて。」

「よしきた! 交渉成立だね!」

「さあ、アタイとあんたで、ガノンドロフに一泡吹かせてやろうじゃないか!」

ナポールが私と肩を組んでくる。

「わかった! わかったから離してよ。そんじや、行ってくるから!」

「気いつけてな」

ったく……

穴を抜けて、出た先はまたしても邪神像がある広場だった。

「また像か……」

まあでも今度は色々と扉があるみたい。
とりあえず、道なりに進んで行こうか。

私がつい進んでいくと、いかにもボス部屋のような部屋に来てしまった。

「うわっ、それっぼい……」

私の口から思わずそう零れてしまう。

すると、部屋の奥に座っていたヨロイが急に動き出し、斧を持って私に襲いかかってくる!!

「うわっ!!」

私は斧の一撃を地面を転がって避ける。

「いんにやろう……やる気か……?!」

私はデクの盾と金剛の剣を持って構える。

「こいつの試し斬りにはびったりっぽいわねー!」

私はヨロイが斧を振り下ろした瞬間を狙い、連続して斬りつける。

ヨロイが重いのか、動きがトロいそれは私に斬られるまま、遂には倒れてしまった。

金剛の剣は、恐らく鉄で出来ているであろうヨロイをいとも簡単に切り裂いてしまった。

「凄いわね、ダイゴロンの技術は……!」

私は剣をしまつて、さらに先へ進む。

すると、いつのまにか外に出てしまったようだ。

私は巨大邪神像の右の手のひらの上にいた。

「ここに繋がってたのか……!」

私は周りを見回す。

すると、宝箱が置いてあった。

「おっ、これが銀のグローブかな?」

私は体重を乗せてそれを開き、中から銀のグローブを取り出す。

やつぱりぶかぶかみたい。

「しょうがない、大人しくナボールに渡すか……」

「そうだね。」

私とナビイがそんな会話をしていると、急に女性の悲鳴が響いた。

「!?なにごと?!」

「アタイをどこへ連れてく気だい?!ちくしょうっ!!離しやがれ!!」

私が周りを見ると、魂の神殿入り口に、何かブラックホールのようなものに引きずり込まれるナボールの姿があった。

その周りには婆さん2人が箒に乗ってナボールの周りをぐるぐる回っている。

「て、てめえら、ガノンドロフの一味だな?!れ、蓮子っ!!早く逃げろ!!こいつら、怪しげな魔法を……!!」

ナボールが叫んでいるが、どんどんと穴に吸い込まれ、最終的にはいなくなってしまうった。

「あわわわわ………」

私は隠れながらその様子を見ていることしか出来なかった。

「ど、どうしよ………」

「どうしよ………」

私とナビイは顔を見合わせる。

「……………しようがない、大人に戻ってナボールの代わりに神殿攻略しますか!」
大人の身体ならグローブも合うだろうし。

「それでいいのかなあ……………」

「大丈夫よ、んじやあまたオカリナ吹いて……………」

「ふうっ、また帰ってきた……………」

私は再び大人の姿に戻り、巨大邪神像の前に戻ってきた。

よし。んじやあ、気を取り直して……………」

行くか、魂の神殿!!

第28話 激突ツインローバ！見せる二刀流、グラウンドクロス!!

「あれ、なんだこれ……………」

私が再び大広間に入ると、そこには赤い、煌めく盾が飾られてあった。

「これ、盾みたいだよ……………」

私は盾を手取る。

キラキラと私の顔を反射している。

いわゆるミラーシールドってやつなのかな。

私は盾をミラーシールドに持ち帰る。

よし、これで本当に勇者みたいになったな……………っ!!

私はワクワクしながら盾を構えた。

そういや、私、銀のグローブをつけたけど、本当にこの岩を動かせるのかな…………

私は大きな岩の前に立ち、両手を当てて、力を込める。

「おりゃあああ……………っ!!」

すると、ズリズリと岩が動き出し、通路ができた。

ふうっ……

「本当に動かせた……!」

「すごいよ蓮子! あんな大きな岩を……!」

「まあ動いてよかったよ……」

私は汗を拭う。

よし、と私は先に進んでいく。

私は再び神殿の邪神像に出る。

「ねえねえ、ナビィ。あの邪神像の顔、嫌な気配がする……」

私がそう言うと、

「たしかに……あれ、嫌な感じがするね……」

私はミラーシールドを構えて、指している太陽光を反射させ、邪神像の顔に太陽光を当ててみる。

すると、邪神像の顔が崩壊した!!

「あっ!」

その崩れた奥、通路があることに気づいた。

「まさかあそこがボスの……」

私は金網にロングフックを引っ掛け、邪神像の頭部に移動する。

「よし……」

私はその奥にある扉をゆっくり開く。

……その先は見覚えしかないボス部屋っぽい部屋だった。

あのヨロイか……？

そう思案した私を待っていたのは、魔法を使う婆さん2人に挟まれた、ヨロイの魔物だった。

「やっぱりか……」

私はため息をつく。

「ホッホッホ……誰か来たようですよコウメさん……」

「ヒツヒツヒ……そのようですねえ、コタケさん……」

ギョロツとした目が特徴的な婆さん2人はゆっくり振り向く。

「ご丁寧に服にカタカナで「コウメ」「コタケ」と書いてある。」

「どうやら赤いのが「コウメ」青いのが「コタケ」らしい。」

「我らの神殿に侵入するとは、とんだ不屈きものだねえ、ホツホツホ……」

「ではそんな不屈きものに罰を与えてやらないとねえ……、ヒツヒツヒ……」

「さあ、我らが忠実なる僕よ……」

「我らに代わり、侵入者を殺せ!!」

婆さんたちが合図すると、ヨロイが動き出す!

それと同時に婆さんが消えた。

「妙にハイテンションだねあのヨロイ……」

「うーん、なんか懐かしい感じがする、あのヨロイ……」

「えっ?」

「なんだか、懐かしい気配だよ……」

私がそう言うのと、ナビィはうーん、といった感じになる。

「れ、蓮子!それよりも来るヨ!」

私はマスターソードを構える。

「喰らえっ!」

私はマスターソードで連続でヨロイ魔物を斬りつける。

瞬間、ヨロイは後ずさり、バラバラとヨロイが砕ける！

すると、ヨロイが完全に砕けたナボールは倒れこむ。

「やっぱり！」

私はナボールの体を支える。

「うっ……、あ、アタイはいつたい……？」

「ナボールっ！しっかりして！」

すると、コウメとコタケが現れる。

「おやおや……、正気に戻ってしまったようですよコウメさん……」

「そのようですねコタケさん……。たかが小娘でもこいつを慕う者もいますからね……」

「ではもう少しガノンドロフ様の役に立ってもらいましょうかね……」

「ではもう一度洗脳し直してあげましょうかね……ヒツヒツヒ……」

そして2人は同時にエネルギーを貯める。

コウメとコタケはエネルギーを解き放ち、ナボールに命中させ、ナボールは姿を消し

てしまった……

「ナボール?!」

私はナボールの名を呼ぶが、返事はない……

「お前……っ!!」

私はコウメとコタケを睨む。

しかし2人は不気味な笑い声を上げて消えてしまった。

「待てっ!!」

私はマスターソードをさらに強く握りしめて奥へ進んでいく……

「……バカな子だねえ……自分からガノンドロフ様の生贄になりくるなんて……」

さらに奥に進んだ台座の部屋の、私が台座に乗ると、婆さんたちの声が聞こえてくる。

「お前らだけは……許さないぞ……!!」

私は歯を噛み締める。

「ヒツヒツヒ……あたしの炎で骨まで焼いてやる……」

「ホッホッホ……あたしの冷気で魂まで凍るがいい……」

私の前方、後方にそれぞれコウメ、コタケが現れる。

「む……」

しかし、向かいから来る風に耐えるように手で顔を覆う。

「ほら、かかってこい……っ!!」

私はマスターソードを構える。

「はっ!!」

私は地面を蹴ってまずはコウメを斬りつける。

コウメは反応できずに喰らってしまふ。

それに続いて、今度はコタケの元に高速で移動し、コタケも斬りつける。

「どうした、あんたらの力はこれっぽっち?」

私は顔を顰めたまま剣先を向ける。

「くっ、なかなかやるね……、やるよコウメさん!」

「オツケーコタケさん!」

「コタケ&コウメの、セクシーダイナマイツアタック!!」

すると、2人の婆さんは手を繋いでなんと合体する。

「!?!」

そこにいたのは、文字通りダイナマイトボディの大きなゲルド族の女だった。

「……うう、参った。女として負けた感……」

私は思わずそう零してしまふ。

「ほら蓮子! しゃんとして! ナポールさんの仇なんだヨ!」

「くっそー……、本当に私をイライラさせるやつ……っ!!」

「こうなったら……、これで行くか……!!」

私は盾を仕舞い、金剛の剣を抜き放つ。

「この二本でケリをつけてやる……っ!!」

私はマスターソードと金剛の剣を構える。

「そんなもの効かないよ、ヒツヒツヒ…」

私は敵をまつすぐ見据え、剣を構える。

「喰らえ……っ!!」

そして私は剣を振りかぶる。

「はっ!!」

しかし2人の合体は炎と氷の魔法を放つ。

私は金剛の剣で魔法を切り裂き、懐に入る。

「グランドクロス!!」

私はマスターソードを縦に、金剛の剣を横に薙ぎ、コウメとコタケを十字に切り裂く。

「きやあああ!!」

すると、2人は叫び声をあげ、またコウメとコタケに分離した。

すると、2人の頭に輪っかが出来た。

「……………」

私はポカンとして2人を見ている。

「ええい、猪口才な……今度こそ本気で行くぞいコタケさん！」

「こ、コウメさん、その頭の上のはなんじや？」

「そーいうあんたの頭にもあるよコタケさん！」

「……………」

そしてコウメとコタケは自身の異変を察したのか、キレだした。

「あたしやまだ400年しか生きてないんだよ！」

「あたしなんか380年だよ！」

「双子なのに20年もサバ読むんじゃないよ!!」

「あんたこそボケてんじゃないのかい?!」

「ボケてるだつて?!それが姉に対する言葉?!」

「双子に姉も妹もあるかい！」

「キー!!この薄情者！」

「なんだいこの恩知らず!!」

「薄情者!!」

「恩知らず!!」

そうして、2人とも召されていった………
私は暫く、ポカーンとしたまま動けなかった………

第29話 ガノン城へ……、蓮子、決意の進撃！

「ん……く……」

私はまた賢者の間で目を覚ました。

すると目の前にナボールがいる。

「あんたにはまず感謝しなきゃね。へへへ……7年前のあの子供がもういつぱしの剣士じゃないか。まあ……、このアタイとしたことかとんだドジ踏んじまったよ。あのバアさんたちに洗脳されていいようにガノンドロフに利用されちまうなんてね……」

ナボールは目を閉じる。

「でも面白いじゃないか！そんなアタイが魂の賢者だなんて！6賢者としてガノンドロフと戦うことになるなんてな！この借りはキツチリ返させてもらおうヨ！」

ナボールはニヤツと笑う。

「あ、あはは……。まあ程々に……」

「時の勇者蓮子……。あの時の礼として、このメダルをやるよ！受けとんな!!」

すると、私の手の中に黄色いメダルが収まった。

「やったネ蓮子！それが魂のメダルだヨ！これで、全ての賢者が復活したんだ!!」

「ほんと?! やった!!」

私は顔色をばあつと明るくする。

「……………あんたがこない女になるってわかってたら……、あんたを相棒にでもしたかったよ……………」

「……………あはは……………、私は盗賊なんて似合わないよ……………」

「……………あとはガノンドロフだけだ。頑張れよ蓮子。お前ならできる! 自分を信じて、全力でぶつかってこい!!」

ナポールは純粹に私を応援する言葉を送ってくれた。

「……………うん!!」

それに私は目一杯の笑顔で答える。

そして、私の意識は暗転した……………

しかし、そこでラウルさんが現れる。

「勇者蓮子よ……………、遂に我ら6賢者は復活した! 魔王との対決の時が来たのだ! が、その前に、お前を待っている者に会うがよい。その者は時の神殿でお前を待っておるぞ……………」

「時の神殿……………」

ラウルさんはそれだけ言い残して居なくなってしまった。

「……………ん……………」

私は巨大邪神像の前で目を覚ます。

「よし……………これで全ての賢者が復活したんだよね？」

「そうだよ蓮子！でもその前に時の神殿に行かなきゃネ！」

「そうね。待つてる人がいるらしいし。」

……………でも十中八九察しがつくなあ。

ま、いつか。

私はオカリナで光のプレリユードを奏で、時の神殿へと飛び立った。

「……………待つていたよ蓮子。」

時の神殿入り口に入った私の背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

「やっぱりあんたねシーク。」

やっぱり、後ろにいたのはシークだった。

「時の勇者蓮子……。君は数々の苦難を乗り越えて、6賢者を目覚めさせてくれた……。そして今また、魔王ガノンドロフとの対決の時を迎えようとしている。だがその前に君だけに話しておきたいことがある。聞いてほしい。」

「難しいのはナシにしてよね」

私は予め断っておく。

「君にもわかるように話すよ……。闇の民、シーカー族に伝わる、トライフォースの知られざるもう一つの伝説を……」

ああ。あつたわねトライとホース。

「……………聖なる三角を求めるならば心して聞け。聖なる三角の在るところ……聖地は己の心を映す鏡なり。そこに足踏み入れし者の心、邪悪なれば魔界と化し、清らかなれば

楽園となる。」

その古典単語をやめてほしいんだけどなあ。私古典はダメだ古典は。

「トライフォース……聖なる三角……。それは力 知恵 そして勇氣……。3つの心を測る天秤なり。聖三角に触れし者、その3つを合わせ持つ者ならば、万物を統べる真の力を得ん。」

よーするに、力、知恵、勇氣を持つ者がトライとホースに触ると、めちゃんこつおくなるってことでしょ？

ならそんなむずかしい単語使わなくていいのに。

「しかし……その力無き者ならば、聖三角は力、知恵、勇氣の3つに砕け散るであろう。後に残りしものは3つの内の1つのみ……。それがその者の信ずる心なり。もし真の力を欲するならば、失った2つの力を取り戻すべし。」

つまりトライとホースに見合う人じゃないと、そいつが信じるひとかけらだけが残って、後の2つはどっかいってしまおうと。

そしてめちゃんこつおくなりたかったら、失った2つの力を取り戻せと。

………なんとなく理解はできてるな私。

「その2つの力、神により新たに選ばれし者の手の甲に宿るものなり。」

うーん、わかったようなわかんなかったような……

「ガノンドロフ……、奴は君が7年前に開いた時の神殿の扉をくぐり、聖地に到達した。しかし、奴がトライフォースを手にした時、伝説は現実となった。」

なるほど。ガノンドロフはトライとホースに見合わなかったってわけだ。

運が良かったんだなあ私たちは。

「トライフォースは3つに砕け、奴の手に残ったのは力のトライフォースのみだった。」

「そ、それじゃあ残る知恵と勇気が……」

「……………」 奴はトライフォースの力で魔王になったが、その野望が果てることはなかった。完全な支配のため、ガノンドロフは残る2つのトライフォースを持つ神に選ばれし者を探し始めた……………」

まあそりやそうだろうね。

しかし次にシークが発した言葉は私の度肝をぬくのであった。

「その1つ、勇気のトライフォースを宿す、時の勇者、宇佐見蓮子。」

!?

「わ、私?!」

うせやろ……………」

「……………」
「それでもう1人は……………」、知恵のトライフォース宿る者、賢者の長となる7人目の賢者……………」

あ、やっぱラウルさんが言ってた7人の賢者ってのは間違ってたんだ！
するとシークは右手の甲を私の方へ向け、光を放った。

「うっ！」

私は咄嗟に目を瞑る。

光が徐々に晴れていき、私が次に目を開けるとそこには、見覚えのあるドレス、長い
ブランドの髪の毛の女性……

「この私、ハイラル王女、ゼルダです。」

……

……

……

……嘘?!

マジで?! シークがゼルダ姫?!

にしては声とか全然違ってたぞ……

「魔王の追及を逃れるためとはいえ、シーカー族と偽り、接してきたこと、どうか許して
ください……。」

いやいや、それより私の方がだいぶ失礼なこと言ってたような……

うぐ、処されるな、私。

「え、ええ。私もずいぶん失礼なことを……」

「7年前のあの日、ハイラル城はガノンドロフの襲撃を受けました……。私は乳母のインパとともに城から脱出する時、見たのです、貴女の姿を。」

確かにあの時精霊石が揃って、ゼルダ姫のところへ行こうとしてたんだよな……

「私は思いました。あなたにオカリナを託そうと。そしてそのチャンスは今だ、と。オカリナがあなたの手にある限り、ガノンドロフは聖地へ入らないと思っていました。……、私の予期せぬ事態が起りました。」

封印か……

「時の扉を開いたあなたを、まさかマスターソードが聖地に封印してしまうなんて……。あなたの魂は聖地に封印され、トライフォースはまんまとガノンドロフの手に……。そしてガノンドロフは魔王となり、聖地は魔界となりました。それらは全て不幸な偶然……」

まあ私がトライフォースを手にかけてもめちゃんこパワーを手にできたとは思えないけどね……

「私はシーカー族になりすまし、あなたが戻ってくるのを信じて7年待ちました。しかし、あなたが帰ってきたことにより、ガノンドロフが支配する暗黒の時代は終わるのです！6賢者たちが開いた封印にガノンドロフを引き込み、私がこちらの世界から閉じる

……。それで魔王ガノンドロフはこの世から消えるでしょう。」
できれば完全に倒しきりたいけどね……。

正直、相手との力量の差は理解してるつもりだ。だからこそその封印だろう。

「蓮子、それにはあなたの勇気が必要です。今一度、私たちに力を貸してください！」
……………まあそんなの答えなんて決まりきってるよね。

「もちろんです！」

私は即答する。

元はと言えば私が引き起こしてしまった事態だ。私が解決しないと……。メリーには申し訳ないけど、命だつて賭けても構わない。

「……………ありがとう。では、あなたにさいごの力を託します、魔王の守りを破る、選ばれし者に神が与えたもう力、聖なる光の矢を!!」

すると、光の矢が授けられた。

おお!! かつちよいい!! 勇者っぽいつ!!

すると、その時、いきなり地震が起こる。

「い、この地鳴り、まさか?!」

ゼルダ姫がそう叫んだ瞬間、ゼルダ姫の体が水晶に覆われてしまう。

「な、なにこれ!!」

それと同時に、ガノンドロフの声が響いてくる。

「愚かなる反逆者ゼルダ姫よ。7年もの長き年月、よくぞオレから逃げおおせた。だが、油断したな。この小娘を泳がせておけば、必ず現れると思っておったわ!!」

「くっ、この、こんな水晶ごとき……っ!!」

私は引つ叩いたり、蹴っ飛ばしてみたものの、水晶はビクともしない。

「唯一のオレの誤算はその小娘の力を少々甘く見ていたことだ。」

すると、水晶はどんどん浮かび上がっていつてしまう。

「いや、小娘の力ではないな。勇気のトライフォースの力だ。そしてゼルダの持つ知恵のトライフォース……。この2つを得たその時こそ、オレはこの世界の真の支配者となるのだ!!小娘!ゼルダを助けたくば、我が城まで来い!!」

そう言うゼルダ姫は消えてしまった……

「~~~~~……っ!!くそっ!!」

私は思い切り地団駄を踏む。

私は迷うことなく外へ向かおうとする、

「れ、蓮子!!ダメだヨ!!罨だヨ!!」

ナビィが私を止めようとするが、

「ごめん、罨でも行くしかないよ！私が行かなくて、ゼルダ姫から知恵のトライフォースをガノンドロフが奪ったら、それこそ私は太刀打ちできない！だから今、あいつが一個しかトライフォースを持っていないうちに、奴を叩く!!」

「そつ、それでも！ガノンドロフとの力の差は…」

「……………わかつてる。私とあいつの力の差くらい。それでもやらなきや。やるしかないなら、やるだけよ。」

「蓮子……………、わかった。もうあなたに着いて行くつて、デクの樹サマの時から決めてたもん。最後まで着いてくヨ。」

「……………へへ、ありがと、ナビィ。」

「ううん。さあ、早く行こう！」

「よしー！」

そうして私たちはガノン城へと進んでいく……。

うひゃあ……

かつてハイラル城があつたそこは、もうハイラル城としての面影はなく、不気味な城が宙に浮かんでいた。

すると、ラウルさんから通信が入る。

「どうやら頭に直接話しているようだ。」

所謂、「こいつ、直接脳内に……ッ!」ってやつ。

「勇者蓮子よ。聞こえるか、賢者ラウルじゃ、我ら6人の力を結集し、ガノンドロフの城に橋をかける。頼むぞ、ゼルダ姫を救うのじゃ!!」

「元からそのつもりだったの……!」

私は頬をバンバンと叩いて気合を入れて、構える。

すると、6つの光が合わさって、大きな橋が架かった!

「よし、行くよナビィ!」

「うん!」

そして、私はガノン城に侵入する。

待つてろよガノンドロフ……、決着つけてやる!!

第30話 この世界の全てを照らす、奇跡の光

ガノン城、ガノンの塔。この扉の奥に奴がいる。

あれから賢者のみんなのサポートを受けながらどうにかここまで来れた。

途中、金のグローブという銀のグローブの上位互換をゲットできた。

これで、全てが変わる。

私は勢いよく扉を開いた。

「!!ゼルダ姫!それに……、ガノンドロフ……っ!!」

ガノンドロフはパイプオルガンを奏でている……。

パイプオルガンのてっぺんに、水晶に閉じ込められたゼルダ姫もいる。

すると、私の左の手の甲に、三角形の紋章が現れた。

「うわっ!なんじゃこりゃ?!」

私が驚いていると、ガノンドロフはパイプオルガンを弾く手を止めた。

「共鳴している。トライフォースが1つに戻ろうとしている。……7年前、我が手に

できなかった2つのトライフォース……。まさか貴様たち2人に宿っていようとはな
！そして今、全てのトライフォースがついに揃った！」

ガノンドロフは不敵な笑みを浮かべ、こちらに振り向く。

なんて威圧感……。本能が警告している。こいつは危険だと。しのごの言わずにさっ
さと尻尾を巻いて逃げろと。

「貴様らには過ぎたオモチャだ……。返してもらおうぞ!!」

ガノンドロフは右手の甲を見せて、トライフォースの紋章を浮かび上がらせる。

「……………へっ、あんたに返すもんなんて何一つ無いわ……。私は沢山あるけどね!!」

「ふん、凶にのるな小娘。貴様などオレの足元にも及ばぬわ!!」

ガノンドロフはそう言っつて魔力を解き放つ。

「くっ……………」

猛烈な威圧感だ。立っているのがやっとなくらい……

「蓮子……………ダメだヨ……………。闇の波動でナビィ近づけない!ゴメンネ蓮子……………」

ナビィが弱音を吐くところなんて初めて見たわね……

瞬間、ガノンドロフはパイプオルガンを消し去り、宙に浮かぶ。

「来るわね……………!!」

私はマスターソードを構える。

瞬間、ガノンドロフは地面に拳を叩きつけ、私の周りの地面を陥没させる。

「うっ！」

私は立っていた足場から離脱して、陥没していない地面に降りる。

「はっ!!」

ガノンドロフはファントムガノンと同じような光弾を放ってくる。

「あん時と同じか……!!なら……っ!!」

私はマスターソードを薙いで、弾を跳ね返す。

しかし、ガノンドロフも甘くはない。私が弾いた弾を再び跳ね返してくる。

「そう簡単にはいかないか……!!」

私とガノンドロフは何度もラリーを繰り返す。

その時、ガノンドロフがミスをして被弾した。

「今だっ!!」

私は弓に光の矢をつがえ、光の矢を射る。

光の矢は炸裂し、ガノンドロフに襲いかかる。

「喰らえ……、飛天御剣流!!」

「九頭龍閃っ!!」

私はいきなり九頭龍閃をお見舞いした。

「ちいつ!!」

ガノンドロフは壁に叩きつけられるが、大して怯まず、今度は二本剣を取り出した。「やるではないか……、オレも本気でやろう……!!」

私の背筋に悪寒が走る……

いよいよ本気が来るのか……

そう考えるとさらに寒気が走る。

私は一気にガノンドロフとの距離を詰め、マスターソードで斬りつけるが、呆気なく防がれてしまう。

その上、ガノンドロフの剣戟に押し負け、吹き飛ばされてしまう。

「ふんー!」

ガノンドロフはさらに炎を放ってくる。

「ちっ!!」

私はそれをマスターソードで斬りはらい、さらにその炎を纏わせ、

「終の秘剣……、火産霊神っ!!」

私は火産霊神を放ち、ガノンドロフを攻撃する。

「そんなオモチャが……!!」

ガノンドロフは光弾をさらに放ってくる。

「まずい……っ!!」

私はそれを真上に斬り上げる。

そしてジャンプをして光弾に追いつき、

「エース・オブ・ザ・ブリッツ!!」

光弾を思い切り蹴り飛ばし、ガノンドロフに当てて炸裂させる。

「どうだ……?」

「くっ……、ふふ、今のはいい攻撃だったぞ……」

「大したダメージ無し、か。傷つくな……」

私はそう言った瞬間ガノンドロフの懐に潜り込み、

「超究武神覇斬……っ!!」

連続して斬りつける。

が、全て見切られているのか、剣で防がれてしまった。

「受けられた!でも防ぐだけで精一杯だったはず……っ!!」

私は盾を投げつけ、金剛の剣を抜きはなした。

「グラウンド……クロス!!」

そして、ガノンドロフを十字に斬り裂いた。

「入ったぞ……っ!!」

私は一旦距離を取り体力を回復させる。

「くっ、この程度で……」

今しかない。私は感覚でそう察した。

「はあああああつ!!」

私は最後の一撃、マスターソードでガノンドロフの体を斬り裂いた!

「ぐっ、ぬ……う、こ、このオレ様が……、魔王ガノンドロフが敗れるというのか……?」

こ、こんな小娘に……。う、宇佐見……蓮子……っ!」

ガノンドロフはそう言うと、両手を天に掲げ、光を放つ。

その時、周りの景色が崩壊し、ボロボロの塔のてっぺんの景色になった。

すると、ガノンドロフは膝を折り、倒れてしまった。

「……か、勝った、のかな……?」

私は肩で息をしながらそう呟く。

すると、ゼルダ姫の入った水晶が降りてきた。

そして水晶が砕け散り、ゼルダ姫が解放された。

「……ガノンドロフ、哀れな男……強く正しい心を持たぬが故に神の力を制御できず

……」

ゼルダは哀れむようにガノンドロフを見る。

すると、いきなりグラグラと揺れが起こり始めた。

「なっ、なに?！」

「蓮子! この塔は間もなく崩壊します! ガノンドロフはおそらく、最後の力で私たちを道連れにする気です! 急いで脱出しないと!」

「うっ、うそ?！」

「さあ早く!!」

「はっ、はい!!」

ゼルダ姫に急かされ、私たちは大慌てで塔を下っていった。

「……………ふうっ」

私たちが塔を下り終えた直後、ガノン城は轟音を立てて崩れ落ちた。

「ガノン城が…………」

ガノン城は跡形もなく崩れ落ちてしまった。

「……………終わつたのですね……………。何もかも……………」

「はい……………」

私たちはガノン城の残骸を見てそう言う。

「蓮子、さつきはゴメンネ……………一緒に戦えなくて……………」

「いいよ、気にしないで。あんな奴相手なら誰でもビビるって普通は。私もまだ膝ガクガクしてるし……………」

私はふうつと一息つく。

すると、瓦礫が不自然に崩れる音がする。

「……………」

私が中央に近づいた瞬間、ガノンドロフが飛び出してくる！

「ガノンドロフ!!」

私とナビィは同時にガノンドロフの名を叫ぶ。

「おのれ……………宇佐見蓮子……………!!」

ガノンドロフは右手の甲からトライフオーズの力を使い、巨大な魔獣と化した……………

「う、嘘……………、まだ死なないの……………」

私はマスターソードとミラーシールドを構える。

ガノンドロフ、否、魔獣ガノンは両手の剣を振り回した。

その剣は私のマスターソードに命中し、いつのまにか出来た炎のサークルの外、ゼルダ姫の外に刺さってしまった！

「く、くそ……っ、剣が……!!」

私はマスターソードを一瞥し、マスターソードの代わりに盾をしまい、ダイゴロン刀を構える。

「ナビイ、もう逃げない!! 一緒に戦う!!」

「……ナビイ……、そうよ、そうよね……、ナビイがこんなに勇気出してんだから、私も……負けてらんないよね……!!」

私はダイゴロン刀を構える。

「魔獣ガノン……、弱点は……わからないヨ……」

そりゃわかんないでしょうよ……

「とにかく光の矢なら……」

私はガノンが振り回す剣をかいくぐりながら光の矢を射る。

すると、ガノンが光の矢の効力で、ガノンが怯んだ!!

「よしっ、次はどうすれば……」

「ねえ蓮子！アイツの尻尾！あそこに力が集まってるヨ！そこを叩けば……」

ナビィに言われ、ガノンの尻尾を見てみると、微かに発光している。

「あれは……」

私はガノンの尻尾をダイゴロン刀を用い、連続で斬りつける。

すると、やはり効いているのか、ガノンが怯み、膝をついた！

直後、私たちを囲っていた炎のサークルが消えた！

「蓮子！マスターソードはこっちに！」

ゼルダ姫がそう叫ぶ。

「よしっ!!」

私は走ってマスターソードを拾い上げる。

すると、マスターソードに光が集まり、刀身が光に覆われ、刀身が巨大化。エネルギーの塊の剣になった。

「蓮子！私が魔王を抑えます！あなたはそのうちにその剣で魔王を!!」

すると、ゼルダ姫が魔法でガノンの動きを止める。

「よし……!!」

私は両手でマスターソードを持ち、構える。

その時、マスターソードから、ハイラルに生きる人々の気配が感じられた。

「なんだかみんなが力を貸してくれている気がする……!」

「蓮子、私の力もマスターソードに込めます！ハイラルの願いの剣で……魔王にとどめを!!」

「行くよみんな……、ガノンドロフを、倒す……っ!!」

「ナビイの力も蓮子にあげる!」

「ありがとう……!!喰らえ、ガノンっ!!」

私は地面を蹴り、ガノンの目前まで突進する。

「はっ!!」

そしてエネルギーの塊の剣を、ガノンに突き刺した。

「これが、ハイラルに生きるみんなの思いだ!!お前なんか……この思いを、好きに

……させるかああっ!!」

私は剣を引き抜き、横、縦にガノンを斬り、ガノンの頭に剣を突き刺した。

「6賢者たちよ……今です!!」

ゼルダ姫は頭上に手を掲げ、光の玉を作り出す。

「ハイラルを作りたまえし古代の神々よ!今こそ封印の扉開きて、邪悪なる闇の化身を、

冥府の彼方へ葬りたまえ!!」

ラウルさんがそう叫ぶと、ダルニアの兄貴、ルト姫、インパさん、ナポール、そして

サリアが同時に力を込め、封印の扉を開いた。

「……………おのれ……………おのれ……………ゼルダ!!おのれ……………賢者ども!!おのれ……………宇佐見蓮子!!!いつの日か……………この封印が解き放たれしとき……………その時こそ貴様らの一族、根絶やしにしてくれる!!……………我が手の内に、力のトライフォースある限り……………」

「ありがとうございます……………。あなたのおかげでガノンドロフは闇の世界に封印されました……………。これでこの世界はまた、平和な時を刻み始めるでしょう……………」

「ゼルダ姫……………、私はそんな、大したことしませんよ……………」

「……………これまでの悲劇は全て私の過ちです。己の未熟さを顧みず、聖地を制御しようとし、さらにはあなたまでこの戦いに巻き込んでしまった……………。異世界から来たあなたも、こんなことは望んでいなかったでしょう……………、重ね重ね申し訳ありません……………」

「いやいや、マスターソードを引き抜いたのは私です……………、それに、ガノンドロフは倒

したじゃないですか！私もこれで胸張って帰れますよ！」

「そうですね……………、今こそ、私は過ちを正さねばなりません。マスターソードを眠りにつかせ、時の扉を閉ざすのです。だけどその時、同時に時を旅する道も閉ざされてしまいます。」

「蓮子、オカリナを私に……………」

「あ、はい。」

私は言われるがままオカリナを渡す。

「今の私なら、賢者としてあなたを元居た世界へと送ることができません。姿は子供のままになってしまいますが……………」

そっか。こつちに来たのは子供の時か……………」

まあしょうがないか。どっかの名探偵の如く小学生からやり直そうかな。

メリー驚くだろうなあ……………」

「ハイラルに平和が戻るとき……………、それが私たちの別れの時なのですね……………」

「そうみたいですわ……………」

私は落ち込むゼルダ姫にそう言うしかなかった。

「蓮子……………私とも、お別れなの？」

ナビイが私の帽子から出てきてそう言う。

「うん。私も私の世界に帰らなきゃ。」

「蓮子、私なんだかんだ言っても、あなたがパートナーで本当に良かったヨ。ありがとう、蓮子……。」

「うん。私もだよナビィ。」

「蓮子、あなたは立派な人です。これからあなたの世界で苦難が待ち構えているかもしれない。ですが、あなたは一人じゃない、これだけは覚えておいてください。」

「はい。ほんとう、お世話になりました！」

私はゼルダ姫に頭を下げる。

「さようなら、蓮子、どうかお元気で……」

ゼルダ姫はオカリナを奏で始める……

すると、私の意識は朦朧としていった……

………
諧？ 邨よ 肩 邨ゆ ○ 纏 翫？ 蟋 九 U 纏

………その日は、 天気良かったのを覚えている。

カラツとした快晴。

いつものように寝坊して、いつものように遅刻して、メリーに怒られて、奢らせて

………

そんな日がいっまでも続くと思ってた。

……それこそ私の都合のいい妄想だったのかもしれない。

あの日、あの美術館に行ったこと、あれが全ての間違いだったんだ。

あんなところに行かなければ、こんな結末にはならなかったのに。

ああ、嫌だ。

現実を見たくない。

逃げ出したい。

全てを放り投げて。

でももう出来ない。

これが現実だから。

これが真実だから。

これが夢でないから。

ここに希望は無いから。

ここには絶望しかないから。

何もないから。

だから逃げる。

逃げられない。

逃げる。

捕まる。

失う。

………もう嫌だ。

死んだ方がマシだ。

でも死ぬのは嫌。

生きているのも嫌。

戦うのは嫌。

人と触れ合うのも嫌。

……他人に心を許すことが怖い。

……私はもう生きる価値なんてないのかもしれない。

でも、私が生きていないとあの人たちが死んでしまう。

でも、私が生きているとあの人たちは死んでしまう。

あれ？

なんでこんなことになったんだろう。

もう忘れた。

ああ。そうだ。

私はあの後、子供のまま帰ってきたんだっけ。

そしたら、京都は燃えてて……………

かつて人だったものが転がってて。

私は絶望しながらあのカフェに向かったんだっけ。

ああ、そうだ。思い出した。

そこにいたんだ。あいつが。

私の親友の亡骸の首を掴んで。

あの時の彼女が私の名前を呼んで絶命したのを鮮明に思い出した。

ああ。嫌だ。

あれから7年経った。

私も大人の体に戻って、今は反乱軍のリーダーになってたんだ。

私はあの世界の武器や身体能力をそのまま受け継いで帰ってきたから、あいつに唯一まともに太刀打ちできる人間だったんだ。

まともに、というのは語弊がある。

いつもいつも死体の山だけ増やしているだけだ。

そして私だけが生き残る。

あなたがいてくれれば大丈夫、と。

信じている、命に代えても守ると言ってくれていたあの人々を死なせて。

私は今日ものうのうと生き残っている。

いつそ殺してくれればいいのに。

そうしたら私も楽になれるのに。

彼女に会いに逝けるのに。

ああ、嫌だ。

こんな私なんて、大っ嫌いだ。

こんな世界なんて、大っ嫌いだ。

死ねばいいのに。

消えてしまえばいいのに。

同情なんてしてほしくない。

私の痛みなんて死んでもわからない。

こんなにも悲しい、痛い、苦しい。日に日に目の前が暗くなっていく。

………わかせてやりたい。

私の痛みを。

私の苦しみを。

愛する人や大好きな風景が、
一瞬で奪われる苦しみを。

大切な人が目の前で奪われる悲しみを。

いつでも勇者と持て囃される。

貴女さえいてくれれば、と。希望が残っている、と。

フザけてる。

普通の人間に、勇者の孤独は分からない。

人間に植物の苦しみが理解できないように。

ああ。憎い。

ただただ憎い。憎たらしい。

自分の無力さが。

世界の残酷さが。

鳥が羨ましいなあとか、思ったりする。

私もこんな苦しい「世界」という籠から抜け出して、自由に飛んで行きたい。

でもそれは叶わない。

私を「世界」に縛っているのは私だから。

私を騙して、嘘ついて、偽って、戦ってるのは私だから。

ああ。そうだ。

全部記憶の奥底に押し沈めて、忘れて機械のように、それだけを忠実に遂行するよう
にすればいいんだ。

私なんて要らない。

必要ない。

メリーが居なくなつて、私を証明してくれる人はいなくなつてしまつた。

なら要らない。

「宇^わ佐^た見^た蓮^し子」なんて死んでしまえ。

「宇^わ佐^た見^た蓮^し子」なんて消えてしまえ。

何も考えず、
ただ黙々と死ぬまで戦え。

そして死ぬ。

早く死ぬ。

さつさと死ね。

もう「宇佐見蓮子」は「宇佐見蓮子」じゃなくなつたんだ。

だから死ね。

死んじまえ。

こんな腐った「宇^に佐^ん見^げ蓮^ん子^ん」なんて。

この世から消えちまえ。

失せろ。

さつさと失せろよ。

こんな自分。

こんな人生。

頭に来るんだよ。

人でもない。

いきものですらない。

1人だ。

孤独だ。

なんにも属さない。

「宇佐見蓮子」という存在。

……今更名前なんて無意味か。

結局、私は誰にも理解してもらえないんだ。

残るものなど何もない。

ただ絶望を押し付けられるだけだ。

「孫悟空」……………奴はそう名乗っていた。

奴が一度現れるたび、私の心はすり減っていく。

憎い。

喉笛引き裂いて殺してやる。

脳天潰して殺してやる。

殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺してやる。

ぐちやぐちやにして殺してやる。

そしたら私も殺してやる。

跡形も残らないくらい。

バラバラに。

メ
チ
ヤ
ク
チ
ヤ
に。

細
か
く
砕
い
て。

私
が
壊
し
た
モ
ノ
と
共
に。

このまま目を閉じていよう。

もう二度と開けないでいよう。

そしたら楽になれる。

でも心は楽になれない。

一生、否、この世が終わるまでヘドロのような怒りと憎しみと、絶望と悲しみと、痛みと苦しみに苛まれ続ける。

それでもいいや。

………？

なんだろう。

懐かしい。

温もりを感じる。

暖かい。

目を開けてみようかな。

ふざけないで。もう二度と開けるな。

でも気になる。光が見える。

そんなのまやかした。

希望はあるのかもしれない。

絶望しかこの世には無いんだよ。

それでも、試してみたい。

そこに謎があるなら、解き明かしてみたい。

ああ。それでいいのかもしれない。

もう一回だけ、信じてみたい。

目を開けよう。

.....

.....

.....

「う……………ん……………」

私はゆつくり目を開ける。

……………

……………

「……あれ、ここ、ここは……?」

「お、目が覚めたみたいだな。」

私の顔を金髪の女性が見つめている。

……メリー?

私は尋ねてみる。

「あなたは……?」

「私は霧雨魔理沙。普通の魔法使い兼武道家だ。」

金髪の女性は魔理沙と答えた。

「魔理沙、さん……、私は、どうしてここに……」

「ああ。森でお前が倒れてたんだ。ここまで運ぶのには骨が折れたぜ。あ、ここ私んちな。」

「森……?それに、やけにのどかな雰囲気ですね……、あいつの襲撃はなかったんですか?」

私は窓の外を覗く。

空は黒くない。外は小鳥がさえずっている。

「あいつ?誰のこと言ってるかわからんが、ここは至って平和だぜ。」

この人の言う通り平和そうだ。

そうか。ここに「孫悟空」は来ていないのか。

「そうですか……、よかった……」

とりあえず起きなきや。

「あ、おいおい、まだ寝てろ。お前さん、凄く怪我だったんだぜ。」

「こんなの、どうってことないです、……つつ……」

やはりあの時致命傷に近い傷をもらっていたようだ。体が言うことを聞いてくれない。

「ほら、言わんこつちやねえ。さ、寝てろ、ほら。」

魔理沙さんは私を布団に寝かせる。

布団なんていつ以来だろう。

「お前、名前は？」

魔理沙さんに尋ねられ、私は、あの名前を紡ぐ。

「……………私の、名前は……」